



2002.6.1.



和鉄の故郷 兵庫県千種 岩鍋

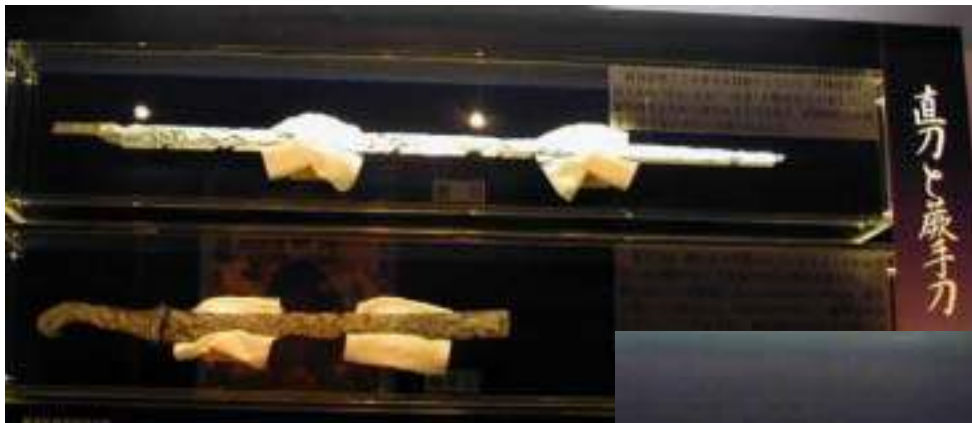


出雲 斐伊川

Iron Road 和鉄の道 『和鉄の技』



高度な熱処理による脱炭表面処理がなされた中国製の古代 鑄造鉄斧



日本刀の源流

「蕨手刀」から「舞草刀」へ



舞草鍛冶の活動

奥州の刀鍛冶たちは、月のきたえ方や使いやすさをさらに求めていきました。

蕨手刀の柄を細くくりぬいても、板形蕨手刀をつくり、やがて長くて幅づくりの薄刀、毛抜形太刀に発展させたのです。この毛抜形太刀は、部では貴族の正装に使われました。今では、この刀が日本刀成立の源流のものであるとされています。このように刀の変化に大きく関わったのが奥州舞草に仕込んだと伝えられる舞草鍛冶と考えられます。

接合・接着のルーツ 赤漆・アスファルト 「発掘された日本列島 2001」展より



縄文の赤漆と天然アスファルト塊



赤漆での修復痕跡のある土偶

日本古代から脈々と続く大木の加工技術

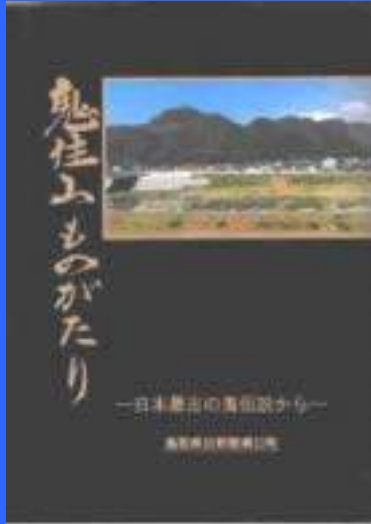


天空にそびえる古代出雲大社(推定模型)とそれを支えた宇豆柱の発掘

日本各地の鬼 & 鬼伝説

1. 伯耆国 鳥取県 溝口町 孝謙天皇 鬼退治伝説

楽楽福神社の伝承



伯耆国 溝口 鬼住山の鬼

伯耆大山山麓 溝口

2. 北上の鬼 蝦夷の雄「アテルイ」

東北・北上地方 多賀城・胆沢城・秋田城遺跡



3. 丹後国 大江山酒天童子伝承

京都府 大江町



4. 吉備国 「桃太郎伝説」の鬼城 99.5.29.

「真金吹く 吉備の中山・・・」と歌われた吉備は 古代製鉄の発祥の地の一つ
現在の総社市を中心とした吉備地方には古代遺跡・古代製鉄遺跡が目白押し
この地には「桃太郎」伝説の源流「ウラの鬼伝説」と「鬼城」の遺跡がある



総社市郊外にある「鬼城」遺跡 99.5.29.



古代遺跡が広がる吉備国 ー鬼城からー



「桃太郎」伝説の吉備津彦神社

5. 青森県 岩木山 (巖鬼山) 山麓の鬼伝説

青森県 弘前市・鱒ヶ沢町

1. 巖鬼山の鬼伝説が広く伝承される鱒ヶ沢



岩木山 北麓赤倉口より



鱒ヶ沢へ流れ下る赤石川



岩木山北麓 十腰内 原生林の中 巖鬼山神社

2. 鬼神社と鬼沢の鬼伝承

弘前市鬼沢



鬼沢 鬼神社に掲げられた鎌等の鉄製品の献

古代 和 鉄 の 歴 史

BC 800	600	400	300	200	100	0	100	200	300	400	500	600	700	800	1000	1500
▼	▼	▼	▼	▼	▼	▼	▼	▼	▼	▼	▼	▼	▼	▼	▼	▼
縄文晩期			弥生前期			中期	後期	古墳前期	中期	後期	飛鳥	奈良	平安	室町		
【鑄造破片再生の時代】							【本格鍛冶の時代】			【鉄の量産化の時代】↑						
日本古代 和鉄の歴史							【原始鍛冶の時代】		【鉄生産・鉄の自給拡散の時代】							
							【鍛打伸展鍛冶の時代】			【鉄の多様化の時代】						

1. 縄文晩期～弥生前期 紀元前2世紀～紀元1世紀 【鑄造破片再生の時代】

中国・朝鮮半島との交流は縄文時代晩期には既に始まっており、中国にその起源をもつ鉄器が日本に現れ、その後弥生前期には中国で製造された鑄物製の鉄斧などの破片を日本で割るなどの再加工して使用する事が始まる。

2. 弥生時代中期～後期 紀元1世紀～3世紀初頭 【原始鍛冶の時代】

薄く板状に鑄込み表面脱炭去れた素材が日本に持ち込まれ、曲げなど簡単な鍛冶が行われるようになる。

3. 弥生時代後期以降～古墳時代中期 2世紀～4世紀 【鍛打伸展鍛冶の時代】

中国では脆い鑄鉄鑄物ばかりでなく、鉄鉱石を低温還元焼成してつくられた塊状錬鉄が得られるようになり、脱炭鑄鉄と同時に日本にこれらが持ち込まれるようになり、これらを素材とした鍛錬加工(原始鍛冶)がスタートし、次第に本格鍛冶へと移って行く。

4. 古墳時代初頭以降 初期～中期 3世紀後半～5世紀 【本格鍛冶の時代】

大陸では塊状鉄精錬が本格化し、鍛冶材料として広く流布。朝鮮半島でもこの塊状鉄精錬がスタートしたと見られるが、はっきりしない。

この当時 半島朝鮮半島の南部辰韓・加耶と倭国との交流が始り、4世紀半ばには加耶が鍛冶加工された薄い鉄板(鉄)の供給基地として登場し、渡来人の交流と共に大量の鉄が鍛冶原料として持ち込まれるようになる。当初3世紀には北九州に限られた鉄の先進地が5世紀には瀬戸内・出雲・吉備・畿内へと東進してゆく。この間日本に於いてはこれら朝鮮半島から持ち込まれた鉄と共にこの鍛冶・加工に使った鍛冶炉跡や鍛冶滓が大量に見つかるようになる。

5世紀後半になると畿内には大泉遺跡のような大規模な專業鍛冶集団が生まれて勢力を伸ばす。

5. 古墳時代中後期～飛鳥・奈良 5世紀末～8世紀 【鉄生産・鉄の自給拡散の時代】

その始りはまだはっきりしないが、5世紀末から6世紀初頭にかけて 鉄鉱石原料とした箱型炉による製鉄精錬が日本国内(吉備)で始り、鉄素材の自給が始まった。また 国内に大量に存在する砂鉄を原料とした精錬も始り、日本での鉄自給の波が西国から東へ広がって行く。

7世紀末から8世紀には現在の福島県原ノ町近傍(行方製鉄遺跡)まで広がりさらに、9世紀には青森岩木山北山麓での製鉄が確認されている。

6. 奈良・平安時代 8世紀～11世紀 【鉄の多様化の時代】

竪型炉が関東・東国に出現し、大型の箱型炉や鑄物遺跡の出現など鉄生産が日本全国におよび、鉄生産の多様化が進む。本格的な鑄物生産がはじまり鉄の多様化がはじまる。

7. 中世 15世紀以降 【鉄の量産化の時代】

高殿たたらが鉄山経営として成り立ち 出雲など中国地方の生産が他を圧倒して行く

『Iron Road 和鉄の道』【2】和鉄探訪

- □ 絵 1 Iron Road 和鉄の道 和鉄の技
- □ 絵 2 日本各地の鬼伝説
- □ 絵 3 古代 和鉄の歴史

『Iron Road 和鉄の道』【2】和鉄探訪

1. 播磨国 「千種鉄」 千種・岩鍋
 1. 播磨国 「千種鉄」 千種・岩鍋
古代製鉄の神 金屋子神 降臨伝承の地 WALK
 2. 金屋子神社と金屋子神 神話
古代製鉄の神 金屋子神の総社 島根県 広瀬町 WALK
 3. 兵庫県立歴史博物館〔1〕
「千種鉄 たたら」 ビデオライブラリー
 4. 兵庫県立歴史博物館〔2〕
兵庫歴博ゼミナール「発掘が語る兵庫の歴史 兵庫の鉄」
－中国伝来の弥生 鑄造鉄斧には既に熱処理による表面加工がおこなわれていた－
2. 古代「iron road 鉄の道」で繰り広げられた壮絶なドラマ
古代出雲の国謎の荒神谷遺跡と加茂岩倉遺跡
 1. 荒神谷・加茂岩倉遺跡 country walk
 2. 荒神谷遺跡 探訪
 3. 加茂岩倉遺跡 探訪
 4. 大量の青銅祭祀器埋蔵の謎
3. 久しぶりに訪れた 房 総 九十九里 砂鉄の浜 飯岡浜
4. 接着・接合の原点 縄文の石鏃について「アスファルト」
5. 接合のルーツ 「漆」・「アスファルト」を見る . -「発掘された日本列島 2001」展-
日本固有「木の文化の加工技術」として
6. 鬼の住む山 京都府 大 江 山 Walk - 大江山の鬼伝説に
『Iron Road 鉄の道』のロマンをかきたてて -
oeyma.htm by M. Nakanishi
 1. 鬼が住む山 大江山へ -古代 iron road の夢のせて-
 2. 鬼の住む山 大江山 walk
 3. 酒呑童子説話と大江山「鬼退治」
7. 『日本人 はるかな旅 日本の源流』展を見て -ルーツの旅に現代を重ねて-
8. 岩手県 北上川流域 の 和 鉄
蝦 夷 の 主要武器 「蕨手刀」を訪ねて一関博物館へ
日本刀 の ル ー ツ 「舞草刀」
 1. 北上川流域の和鉄
 2. 一関博物館で
9. 2000 年前 中国から日本へ持ち込まれた中国製鉄斧
弥生時代高度な表面脱炭処理 鉄の強靱化熱処理伝来のルーツか？

10. 日本各地の鬼伝説 「鬼伝承」の「鬼」は本当に「悪者」か・・・？
 1. 伯耆国 鳥取県 溝口町 孝謙天皇 鬼退治伝説
 2. 北上の鬼 蝦夷の雄「アテルイ」
 3. 丹後国 大江山 酒天童子伝承
 4. 吉備国 桃太郎伝承の鬼ヶ城
 5. 青森県岩木山（巖鬼山）山麓の鬼伝説
11. 「真金吹く 吉備の国」吉備国 桃太郎伝説
 1. 稲作と鉄器の伝来が縄文の智恵と融合して原日本がつくられた
 2. 古代 吉備の国 「鉄」そして「鬼」
 - (1) 「弥生の暮らし」を持たらした大陸からの渡来人 - NHK 「日本人遥かな旅」より -
 - (2) 古代 吉備の国 「鉄」そして「鬼」
 3. 吉備の国「桃太郎伝説」の原型となった「温羅・うら伝説」
 - (1) 桃太郎伝説の原型「温羅・うら伝説」
 - (2) 鬼ノ城 walk - 朝鮮からやって来た製鉄集団に思いをはせながら-

● 参 考 日 本 の 鬼 伝 説
12. 第5回 暦博国際シンポジウム「古代東アジアにおける倭と加耶の交流」に参加して
 『加耶の鉄と倭国』
 1. 弥生時代には日本自前の鉄はなかった？ - 日本古代鉄の歴史 -
 2. 「加耶の鉄を巡る古代日本の派遣争い」それが日本を造っていった
13. 鉄の自給を達成し大和朝廷を支えた 近江国 瀬田丘陵の古代製鉄遺跡群
 1. 滋賀県古代製鉄遺跡
 2. 瀬田丘陵 古代製鉄群を訪ねる

草津市 野路小野山製鉄遺跡・木瓜原(ボケバラ)遺跡
 3. 資 料 瀬田丘陵の古代製鉄遺跡
 4. 製鉄技術伝来と大陸・朝鮮から伸びる鉄の道
14. 幕末 信州 武州街道沿いの現地産出の鉄鉱石原料「たたら製鉄」
 - 「茂来山 鉄山」製鉄遺跡 Walk - 長野県 南佐久郡 佐久町
 1. 「茂来山 鉄山」製鉄遺跡 Walk
 2. 茂来山鉄山遺跡の概略
 3. 霧久保沢から帰路 小海線 羽黒下駅まで - のんびりと山郷のWalk -

播磨国 千 種 鉄

1.

「たたら」製鉄の神 金屋子神 降臨伝承の地

和鉄のふる里『千種・岩野辺』

chigsal.htm by M.Nakanishi

- 1.1. 播磨国 「千種鉄」 千種・岩鍋 Country Walk
古代製鉄の神 金屋子神 降臨伝承の地 COUNTRY WALK
- 1.2. 古代製鉄の神 金屋子神社 COUNTRY WALK と 金屋子神 神話島根県 広瀬町
- 1.3. 兵庫県立歴史博物館〔1〕 「千種鉄 たたら」 ビデオライブラリー
- 1.4. 兵庫県立歴史博物館〔2〕 兵庫歴博ゼミナール「発掘が語る兵庫の歴史 兵庫の鉄」

1.1. 和鉄のふる里『千種・岩野辺』



1. 和鉄「千種鉄」のふるさと『兵庫県 千種・岩鍋』とその歴史
2. 千種 天兒屋たたら公園と天兒屋鉄山跡
3. 古代金屋子神降臨の地 岩野辺(岩鍋)

1. 『兵庫県 千種』とその歴史

金屋子神 千種岩鍋 降臨の伝承

播磨国志相郡岩鍋なる桂の木に高天が原より、はしらの神天降り座すあり。

民驚きて「如何なる神ぞ」と問いまつる。

時に、神託げて曰く、「われは是れ、作金者金屋子の神なり。…吾は西の方を守る神なれば、むべ住むところあらん」として、白鷺に乗りて西の国に趣たまふ。

出雲国の野義郡の黒田が奥非田の山林に着きたまひて…

島根県 広瀬町 「金屋子神社」祭文より



国道沿い千種岩野辺に建つ
金屋子神 降臨の碑



兵庫県千種の位置
兵庫県宍粟郡 岡山県との境



千種鉄 和鉄 発祥の地 千種 と 千種川



国道沿い千種岩野辺に建つ
金屋子神 降臨の碑

兵庫県の西端 中国山脈の南側山懐 岡山県との県境にそびえる三室山から氷ノ山にいたる山塊を背景にそこから流れ出る千種川に沿って千種の街が広がる。

ここは 中国山地の山懐千種川の源流に位置し、ここから算出する砂鉄を用いた「和鉄」発祥の地「千種鉄」の産地として古代から製鉄が盛んに行なわれたところである古代 金屋子神 千種 岩鍋の地への降臨伝説や「播磨風土記」にも記載があり、7,8世紀には盛んに製鉄が行なわれていたことが解っている。

また 伝承によると神功皇后が朝鮮出兵の帰りに瀬戸内海を通られ、千種川の河口が濁っているのに驚かれ「なぜ濁っているのか」とお供の者に尋ねられると「この川上で天兒屋根命の子孫が、鉄砂（カンナ）流しをしているからです。」と答えたと言われている。

千種が古代より製鉄の産地であったことがこれらの資料からもしのべられます。

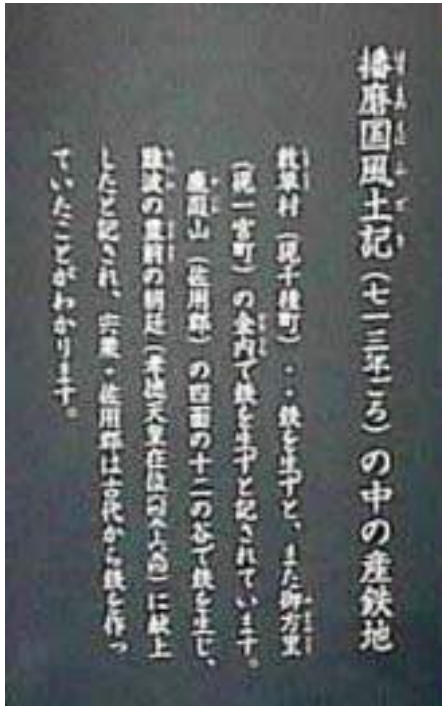
千種川を下ると播州赤穂市、その隣には岡山県備前市があります。中世、千草鉄は備前の刀匠たちに珍重され、数多くの国宝重文の名刀を残しています。そして、西洋鉄に取って変られる明治まで、長きにわたって、和鉄の一大製鉄産地であった。



千種川の流れ出る三室山の峯峰

和鉄の一大製鉄産地であった。

● 播磨風土記 記載



千草鉄 (六粟鉄) の略年表

年号	西暦	出来事
天智一	672	千草鉄の産出
天智二	673	千草鉄の産出
天智三	674	千草鉄の産出
天智四	675	千草鉄の産出
天智五	676	千草鉄の産出
天智六	677	千草鉄の産出
天智七	678	千草鉄の産出
天智八	679	千草鉄の産出
天智九	680	千草鉄の産出
天智十	681	千草鉄の産出
天智十一	682	千草鉄の産出
天智十二	683	千草鉄の産出
天智十三	684	千草鉄の産出
天智十四	685	千草鉄の産出
天智十五	686	千草鉄の産出
天智十六	687	千草鉄の産出
天智十七	688	千草鉄の産出
天智十八	689	千草鉄の産出
天智十九	690	千草鉄の産出
天智二十	691	千草鉄の産出
天智二十一	692	千草鉄の産出
天智二十二	693	千草鉄の産出
天智二十三	694	千草鉄の産出
天智二十四	695	千草鉄の産出
天智二十五	696	千草鉄の産出
天智二十六	697	千草鉄の産出
天智二十七	698	千草鉄の産出
天智二十八	699	千草鉄の産出
天智二十九	700	千草鉄の産出
天智三十	701	千草鉄の産出
天智三十一	702	千草鉄の産出
天智三十二	703	千草鉄の産出
天智三十三	704	千草鉄の産出
天智三十四	705	千草鉄の産出
天智三十五	706	千草鉄の産出
天智三十六	707	千草鉄の産出
天智三十七	708	千草鉄の産出
天智三十八	709	千草鉄の産出
天智三十九	710	千草鉄の産出
天智四十	711	千草鉄の産出
天智四十一	712	千草鉄の産出
天智四十二	713	千草鉄の産出
天智四十三	714	千草鉄の産出
天智四十四	715	千草鉄の産出
天智四十五	716	千草鉄の産出
天智四十六	717	千草鉄の産出
天智四十七	718	千草鉄の産出
天智四十八	719	千草鉄の産出
天智四十九	720	千草鉄の産出
天智五十	721	千草鉄の産出
天智五十一	722	千草鉄の産出
天智五十二	723	千草鉄の産出
天智五十三	724	千草鉄の産出
天智五十四	725	千草鉄の産出
天智五十五	726	千草鉄の産出
天智五十六	727	千草鉄の産出
天智五十七	728	千草鉄の産出
天智五十八	729	千草鉄の産出
天智五十九	730	千草鉄の産出
天智六十	731	千草鉄の産出
天智六十一	732	千草鉄の産出
天智六十二	733	千草鉄の産出
天智六十三	734	千草鉄の産出
天智六十四	735	千草鉄の産出
天智六十五	736	千草鉄の産出
天智六十六	737	千草鉄の産出
天智六十七	738	千草鉄の産出
天智六十八	739	千草鉄の産出
天智六十九	740	千草鉄の産出
天智七十	741	千草鉄の産出
天智七十一	742	千草鉄の産出
天智七十二	743	千草鉄の産出
天智七十三	744	千草鉄の産出
天智七十四	745	千草鉄の産出
天智七十五	746	千草鉄の産出
天智七十六	747	千草鉄の産出
天智七十七	748	千草鉄の産出
天智七十八	749	千草鉄の産出
天智七十九	750	千草鉄の産出
天智八十	751	千草鉄の産出
天智八十一	752	千草鉄の産出
天智八十二	753	千草鉄の産出
天智八十三	754	千草鉄の産出
天智八十四	755	千草鉄の産出
天智八十五	756	千草鉄の産出
天智八十六	757	千草鉄の産出
天智八十七	758	千草鉄の産出
天智八十八	759	千草鉄の産出
天智八十九	760	千草鉄の産出
天智九十	761	千草鉄の産出
天智九十一	762	千草鉄の産出
天智九十二	763	千草鉄の産出
天智九十三	764	千草鉄の産出
天智九十四	765	千草鉄の産出
天智九十五	766	千草鉄の産出
天智九十六	767	千草鉄の産出
天智九十七	768	千草鉄の産出
天智九十八	769	千草鉄の産出
天智九十九	770	千草鉄の産出
天智百	771	千草鉄の産出

713年頃 「敦草村〔現千種村〕金内川〔現一宮町〕で鉄を生ず」との記載
千種「たたら学習館」展示より

● 金屋子神 伝承 と 千種 岩野辺〔岩鍋〕

島根県能義郡広瀬町の金屋子神社の祭文

『播磨国志相郡岩鍋なる桂の木に高天が原より、はしらの神天降り座すあり。民驚きて如何なる神ぞと問いまつる。時に、神託げて曰く、『われは是れ、作金者金屋子の神なり。…吾は西の方を守る神なれば、むべ住むところあらん』として白鷺に乗りて西の国に趣たまふ。出雲の国の野義の郡の黒田が奥非田の山林に着きたまひて……』

千種の岩鍋 (現在の岩野辺) に天から金屋子の神が降り立ち、驚いた人々が何をされる神かと尋ねたら、金屋子の神であると応えさらにその地で鍋を作り、さらに金屋子の神は白鷺に乗られて現在の島根県能義郡に行かれたとも書かれている。 岩野辺の地名の由来は、ここから来ているとも言われている。

- 金屋子神社は「たたら製鉄」の守り神 島根県 広瀬町 金屋子神社 金屋子神話

2. 千種 天児屋たたら公園 と 天児屋鉄山跡



A. 整備前の旧天児屋鉄山跡 walk 1990. 5. 26.

わたしが最初に千種を訪問したのは1990年5月。

千種の街には立派な歴史資料館があり、そこには貴重なたたら関係の資料などが展示されている。

三室山の谷筋には現在も「たたら」の遺構〔天児屋鉄山遺跡〕が残っていると教えてもらい、千種の街の北側千種側沿いに広がる千種・三室高原へ登って行きました。

千種は岡山と兵庫の県境に位置し、周りを山に囲まれ 三室山を水源とするきれいな千種川が流れています。

この川の源流近くいく筋もの谷筋が砂鉄の宝庫で、古代からこの砂鉄をむ原料とした鉄生産が行なわれてきた。

〔資料によると千種の山々の花崗岩、閃緑岩、石英粗面岩などの地層にはすぐれた真砂砂鉄が含まれていて、今めざす天児屋鉄山跡ばかりでなく、高羅、荒尾鉄山など近世の遺跡や町内の至る所に点在する小規模な古い時代の「たたら」遺跡が点在している。〕



千種川とその川のふちに堆積した黒い砂鉄

川に下りるときれいな清流の川底には幾筋もの黒い堆積物があり、この川底の黒い堆積をすくいとり、磁石に近づけるとピツタリと吸いつき、紛れもなく砂鉄。今も川筋に在る砂鉄にビックリし、またここが千種鉄の発祥地であることに今更ながら納得。

この地が古代日本の鉄発祥の地。

「製鉄の神である金屋子神がこの千種に舞い降り、そこから吉備を経て奥出雲へ」という金屋子神伝説を頭に、透き通るような青空にそびえる県境の山々をながめながら、三室山の谷筋を上って行きました。もっとも 金屋子神が舞い降りたといわれる「岩鍋の地」は今登ってゆこうとする千種の街から北に広がる千種三室高原とは異り、千種の街の南から東へ波賀町へ抜ける国道を峰床山越えの山々へ向って行

く途中にある。

この千種川の周辺の山々いたる所が 古くからの千種鉄の山地として活用されてきたのだろう。

千種高原三室山へは舗装された立派な道路が岡山県境へ伸びており、途中で谷筋へ分け入る道に曲がり、登って行くとその途中に「鉄山橋」の名の橋があり、そこから少し登ったところそこが天児屋鉄山跡の草ぼうぼうの山端の道沿いに石垣と倒れかかった天児屋鉄山の看板があるのみだった。

草ぼうぼうで中に入れず、荒れ果て道からは全くここが鉄山であることがわかりませんでした。看板だけが、鉄山跡であることを示していました。

千種 旧天児屋 鉄山跡 walk

1990. 5. 26



三室山



鉄山橋



天児屋鉄山 勘定場跡



天児屋鉄山 金屋子さん

天児屋鉄山は元禄年間、千草屋源右衛門が切り開いて鉄を吹き、泉屋（住友の分家）が 経営していたこともあるそうです。

明治九年ごろの鉄山が終わりに近づいた時代（閉山は明治十八年）にも七十戸三百人以上の人たちが働いていたといわれ、近世たたら遺跡の中でも規模の大きなたたら遺跡であるが、その時は全くわからず。

何回か訪れている間にこの鉄山遺構が整備されはじめ、金屋児神を祭る祠をはじめとして、製鉄跡 カンナ流し場等が姿を現わしてきました。そして1997年 川筋には立派な「たたら学習館」が立ち、鉄山跡も立派な製鉄遺跡として整備されました。

B. 整備された天児屋鉄山跡 天児屋たたら公園 と たたら学習館 1999. 5. 26.

スギの森の中に、山城を思わせるようなコケむした石垣が、段々状に続いて、草木の明るい若葉と対照的なコントラストを見せて道から少し上がったところには金屋子神が立派に祭られ「天児屋たたら公園」として整備されていました。

現在の天児屋鉄山跡 天児屋たたら公園 1999. 5.



【天児屋たたら公園の標識】



【たたら学習館】



【天児屋鉄山遺跡 勘定場】



【天児屋鉄山遺跡 たたら場跡】

日本の「たたら」製鉄発祥の伝説の地「千種」に多くの人たちがかかわった「たたら」製鉄の主要現場がすべてそろって跡地として残っている。それが、天児屋鉄山。

日本を造り、日本の発展を古代から今に至るまで支えた鉄。その日本固有の製鉄法である「たたら」の製鉄現場と勘定場など一連の作業場が鉄山としてこの製鉄発祥の地に復元整備されれば意義の深いものとなるとおもいますが……

日本各地にある同じような幾つもの「たたら館」。それはそれでその地方を支えた鉄の歴史を担うものとして意義があるでしょうが… 。 さあ どうでしょう。

2001. 1. 8. 昔の資料を整理しつつ by M. Nakanishi

by M. Nakanishi 2001. 1. 8.

C. 「たたら 学習館」



たたら学習館とその内部



たたら唄



播磨風土記の記述



初花の献額

D. 天児屋たたら遺跡

天児屋鉄山跡の一角 遺跡跡のそばを流れる川淵に在り、たたら製鉄の歴史や工程を模型や図表等で詳しく紹介展示。また千種町で生産された玉鋼を使って製作された日本刀なども展示されている。すぐ横の道路を挟んだ右の山肌を階段状に切り開いた斜面状に石垣を積み、たたら場やかんな流し場ほか主要な天児屋鉄山の跡が整地され広がっている。

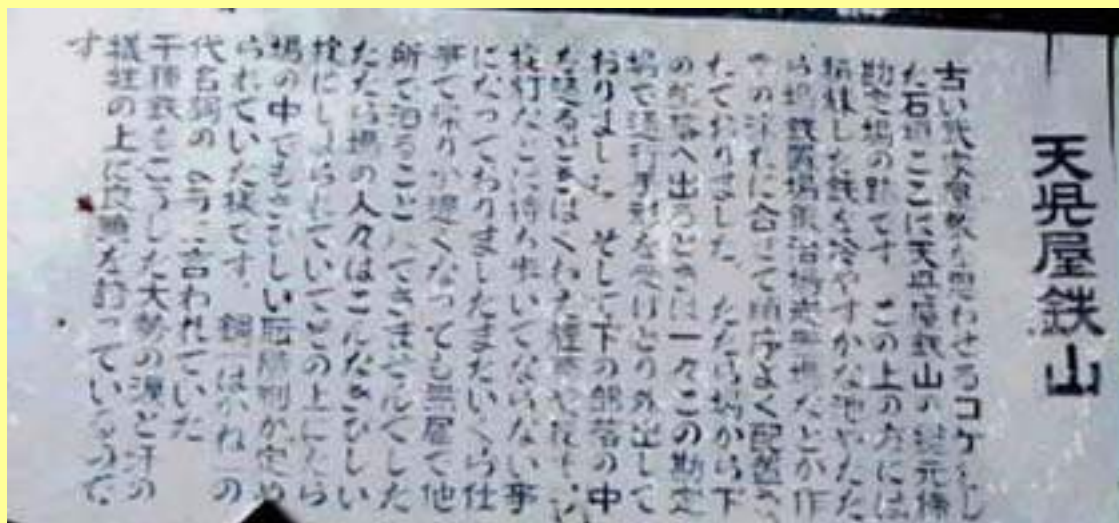


1999. 5. 15. 天児屋鉄山 勘定場跡



1990. 5 .26. 天児屋鉄山 勘定場跡

天児屋鉄山の総元締 勘定場跡に立つ看板 1990. 5. 26.



古い武家屋敷を思わせるコケむした石垣。ここは天児屋鉄山の総元締勘定場の跡です。この上の方には精練した鉄をひやす「かな池」や「たたら場」「鉄置場」「鍛冶場」「炭置場」などが作業の流れに合わせて順序よく配置されておりました。

「たたら場」から下の部落に出る時はいちいちこの勘定場で通行手形を受取り外出しておりました。そして下の部落を通る時はくわえ煙草や???提灯などを持ち歩いてならない事になっておりました。

いくら仕事で帰りが遅くなっても無届で他所で泊まる事は出来ませんでした。

たたら場の人々はこんな厳しい掟にしばられていてその上たたら場の中でも厳しい職階制が定められいた様です。

鋼の代名詞のように言われていた千種鉄もこうした大勢の涙と汗の犠牲の上に良質を誇っていました。



整備されて「たたら公園」となった天見屋鉄山遺跡 1999. 5. 15.



鉄穴流し跡 と 鉄山たたら場跡

「たたら」製鉄の神 金屋子神 降臨伝承の地

3. 岩野辺〔岩鍋〕 1999. 5. 15.

iwnbe.htm by M. Nakanishi



千種 岩野辺



金屋子神社 祭文の写

金屋子神 千種岩鍋 降臨の伝承

播磨国志相郡岩鍋なる桂の木に高天が原より、はしらの神天降り座すあり。民驚きて「如何なる神ぞ」と問いまつる。時に、神託げて曰く、「われは是れ、作金者金屋子の神なり。…吾は西の方を守る神なれば、むべ住むところあらん」として、白鷺に乗りて西の国に趣たまふ。

出雲の国の野義の郡の黒田が奥非田の山林に着きたまひて・・・

島根県 広瀬町 「金屋子神社」祭文より

北の岡山・兵庫の県境から流れ出た千種川が山々が迫る細い谷合を南に流れ下る。源流地域から幾筋かの川が集まり、本流となって谷を下る丁度その出口少し広くなった盆地に千種の街があり、本流は瀬戸内海へ向って流れ下る。この千種川にそった一本道の両側に店が並ぶ千種の街並が広がっている。



神戸からやって来た眼には山奥のわりには明るい商店街を中心とした町並みである。

この千種の町にはいる手前の村には歌舞伎舞台が残っていて、今も農村歌舞伎が受け継がれていると言う。この山間の千種の街で千種川に沿って南の瀬戸内海へ抜ける街道と東西に中国山地の山間をぬって兵庫県・岡山県の町々を結ぶ山越の道国道429号とが交わっている。山間の重要路ではあろうが、昔の賑わいはなく、静かな山間をそれぞれ一筋の街道が貫いている。往時にはこの山奥で作られた「千種鉄」が、この千種の街に集められ、これらの街道を日本各地に運ばれ、多いにぎわったものと思われる。

たものと思われる。

千種歴史民俗資料館に残されている絵図に馬の背に積まれ運ばれて行く鉄と千種の街道の賑わいぶり

が描かれている。千種で作られた鉄が古代から明治の近代西洋の鉄がさかんになるまで、幾世代にも渡って運ばれて行った。この街道の十字路を東へ少し入っていった次の集落が「古代製鉄の神 金屋子神 降臨の伝承地 岩鍋」である。



千種の街道の賑わい 馬の背に載せて運ばれる鉄 千種町歴史民俗資料館で

千種の街へはいる南の入口のところに街道の十字路があり、東西にのびる国道 429 号線を東へ千種の家並を抜け、山間の道を 1km ほどのぼっていく。

国道 429 号線の道路標識とともに岩野辺の地名が不意にあらわれ、岩野辺の部落の家々が途切れ、山へ

かかる峠の三叉路の道端に大きな『古代製鉄の神 金屋子神 降臨の地 岩鍋』の碑が建っていた。

振りかえると千種の街の向こうに「たたら」の山々が、また北も道が伸びる東にも山々がひろがっている。

時たま通る車以外にひとかけなし。静寂の中に 何の説明書きもなくこの碑がたっている。この周辺の山々には「たたら」製鉄の遺跡の印が至る所にいれられているが、この峠からはなにも見えない。ただ 幾重にも重なって見える周辺の鬱蒼とした森と山々が「たたら」製鉄の繁栄を築いたものと想像する。

「一度どんどころなのか 訪れたい」とおもってきたが、本当にあっけない出会いであった。こんなに千種の街近く また 街道沿いが古代鉄発祥伝承の地「岩鍋」とはおもっても見なかった。

碑があるのみで なにもごてごてした説明書きがないのもいい。周辺の山々を眺めながら、少し三叉路をくだったり、まわりの山道を歩いたりしたが 今は本当に静かな山里である。

千種 岩鍋にて

by M. Nakanishi 1999. 5. 15.



金屋子神 降臨の伝承の地 千種岩鍋



製鉄の神 金屋子神の総社

1.2. 金屋子神社 と 金屋子神神話

島根県 広瀬町

hrse.htm by M. Nakanishi



広瀬町ホームページより

1. 金屋子神社 Country Walk



〔広瀬町 金屋子神社 1999.3.12.〕

1999年3月。米子の娘宅からは川沿いに中国山地へわけ行って車で1時間たらず城下町広瀬の街から更に山間に入ったところに「金屋子神社があった。広瀬町の最奥部の重畳たる中国山地の小盆地、西比田に鎮座し、広瀬町の中心からおよそ25kmの南方にある。

古来タタラ神である金屋子神の社として、鉄山師達の厚い信仰を得、今も鉄関係者の参詣の多いことが、奉納された数々の品々やその本殿の立派さ 良く整備掃き清められた境内の様子からうかがえる。

「たたら」遺跡を訪れると必ず「金屋子さん」が祭られているのを見て、総社である広瀬町 金屋子神社は是非行きたいと思っていたところである。

金屋子神信仰の詳細は金屋子神神話として別に記載したが、「鉄山秘書」〔1784〕には金屋神と「たたら製鉄」との関係伝承を次のように載せている。

「太古ある旱天の日、土民が雨乞いをしていたところ、播州宍粟郡岩鍋に高天原から一神が降臨し、金属器の製作法を教えた。

神はさらに西方に飛び、出雲国能義郡比田の黒田に至り、休んでいると、たまたま狩りに出ている安部氏の祖正重なるものがこれを発見。 やがて神託により、朝日長者なるものが宮を建立し、神主に正重を任じ、神は自ら村下となり、朝日長者は炭と粉鉄とを集めて吹くと、神通力によって鉄が限りなくわきでた」と。

鉄山秘書より

神社の大鳥居をくぐるとすぐ右手には、金屋子神信仰の中心にある金屋子神社の縁起や「たたら」にまつわる色々な事を映像や展示で示した立派な金屋子神話民俗館がある。

また 掃き清められた参道の正面奥に門越しに立派な本殿が見え、参道の片側道に沿って大きな「けら」が数個並べて置かれており、その奥に「金屋子神」が舞い降りたとされる「桂」の古木があった。

森につつまれた静けさの中に、掃き清められた境内に立派な本殿がある。

さすが製鉄の神 本殿には奉献された品々に各製鉄会社の名がずらっと並び、立派な本殿とともに、現在にいたるまでここが鉄の守り神であることを示している。



〔金屋子神社 参道脇に並べられた「けら」 1999. 3. 12. 〕

2. 金屋子神話民俗館と金屋子神話



金屋子神社の大鳥居をくぐり参道の直ぐ左手の森に囲まれた丘の上に立派な金屋子神話民俗館があり、有名な金屋子神神話がわかりやすく展示されている。

金屋子神話

金屋子神社に伝えられる製鉄と鍛冶の神々の神話



大昔のある年の夏のことです。播磨の国岩鍋（今の兵庫県と岡山県との境）という山の谷あいにある村あたりいったいは、何日も雨がふらず、太陽が毎日ぎらぎらと大地をこがす日が続きました。村人たちは、このままでは川の水も干あ bb がってしまい、田畑の作物もすべて枯れてしまうと、山に集まって雨が降るよう天の神に祈ることにしました。

村人たちは、奥深い谷川の岩かげのふちで、まわりを清めて火をたき、村おさが岩に向かって手を合わせ、呪文を唱えて一生懸命神に祈ると、不思議にも空にはにわかには雲がわきおこり、大つぶの雨がふってきまかした。「雨だ、雨だ」、「これで畑の作物も枯れずにすむ」、村びとたちは雨にぬれながら、鉦や太鼓をたたいてよろこびの踊りをおどり始めました。

たかぶる雨乞いの祭りのなかで村おさは、自分のところにひらめいた神に、「私たちの願いを、このようになえてくださったあなたは、いったいどなたさまなのか教えて下さい」と、感謝の気持ちをこめて聞きました。神は、「わたしは、金山彦天目一個神ともいう金屋子の神です。生き物に生命をよみがえらせたり、田畑の作物を豊かにみのらせるためには、水は最も大切なものの一つです。私は、この

地ではさまざまな人びとの幸せをまもるために雨を降らせましたが、これからは遠く西の方へいき、そこで鉄を吹き、道具をつくることを多くの人に教えなければなりません」といって、白鷺にのって天空高くに飛び立ちました。金屋子神は、出雲の国の上空までやってきました。そして空から鉄づくりに最も通じた地をさがしました。昔から『たたら』と言い伝えられてきた鉄づくりに、山や川でとれる砂鉄と、鉄をとかすのに必要な大量の木炭と、炉をつくるのにふさわしい



粘土がなくてはなりません。金屋子神は、その三つの条件をかねそなえた地として能義郡西比田を選びました。そして、西比田黒田の森の桂の木に降り立ちました。

金屋子神を最初に見つけたのは、山に犬を何匹もつれて猟に来ていた、安部正重という人でした。

犬たちは、白鷺のからだから放たれる神の光明（ひかり）をみて、身をちじめて吠えています。正重は、犬たちをなだめて神におそるおそる問いかけました。「あなたは

この地に何をしに来られたのですか」と。すると神は正重に、「われは金屋子の神なり。このところに住いして、『たたら』を仕立て、鉄（かね）を吹くわざを始むべし」と告げ、自らも神としてその仕事がうまくいくよう協力することを約束しました。



神からのお告げをつつしんで受けた正重は、近くに住む長田兵部朝日長者にこのことを伝え、ふたりはまず神がおりた桂の木のわきに金屋子神のお宮を建てることから仕事を始めました。そして、正重はその宮の神主に、また長田兵部朝日長者は、これからつくる『たたら』の村下（技師長）をつとめることになりました。『たたら』の高殿（施設）の建設には、金屋子神をとりまくおおぜいの神々が天から地上に来てかかわったと伝えられています。

建設現場に最初にあらわれたのは、なんとおどろくことに75人の子供の神々です。子供の神々は、まず75種類の仕事に必要な道具を

つくりました。始めは自分たちが村下となって土地を整備したり、杉の木を伐って『ふいご』をつくったりして、建設の総指揮にあたりました。

一方、朝日長者は山に入り砂鉄と炭を集めています。高殿では炉がつくられ、そのまわりには、建物の中心となるたいせつな6本の大きな柱が建てられ、その柱を金屋子神をはじめ、木の神、日の神、月の神が、東西南北の方向を分担して守っています。このほか屋根を火災から守る神、炉に風を送る風の神、風を送る『ふいご』などさまざまな道具をつかさどる神々、また、『たたら』には、数ぞえきれないほどおおぜいの神々が参加し、協力しています。

金屋子神は、奥出雲一帯に次々とたくさんの『たたら』の施設をつくりました。

金屋子神がかかかわると、どこの『たたら』でも質のすぐれた鉄が限りなく産みだされました。

金屋子神がかかかわると、どこの『たたら』でも質のすぐれた鉄が限りなく産みだされるので、金屋子神に対する信仰が、『たたら師』とよぶ、たたらで働く人たちのあいだにひろまっていきました。

たたら師たちからは、「金屋子さんは、生産を高める女の神さまだ」と信じる人も出てきました。また、人によっては「いや、金屋子さんは男の神さまだ。いつも炉の中の強い火の光りばかり見ているので、片目をとられてしまった。一つ目の神さまだ」という人もあらわれました。

ある年の冬、金屋子神は村下をつれて『たたら』に向かう途中、高殿の前でとつぜんとびだしてきた犬に吠えられ、ふたりはなんとか逃げようとしたのですが、びっくりした村下は、地面に落ちていた麻緒に、足の小指をとられころて転んで死んでしまいました。金屋子神は、集まってきた『たたら師』たちに、「村下の死骸は葬ってはいけません。そのまま高殿の元山柱にくくりつけて鉄を吹くのです」と、教えました。「たたら師」は、神のいわれるままにして仕事を続けると、いままで以上によい鉄を大量につくることができたということです。

金屋子神は、このように「死のけがれ」を好む不思議な性格の一面をもった神でもありました。

広瀬町 金屋子神話民俗館 資料より

2000. 1. 8. 作成 by M. Nakanishi

姫路市 兵庫県立歴史博物館 ビデオライブラリー

1. 3. 「千種鉄 と たたら製鉄」

hmzi1.htm by M. Nakanishi 2001. 1. 21.



千種町 千種川と砂鉄



千種 天児屋鉄山遺跡



金屋子神と岩野辺のたたら

日曜日 神戸に帰ったついでに、気になっていた歴史博物館のビデオライブラリーの「千種鉄」のフィルムを見にでかけた。前に一度見た事があるのですが、もう一度「千種 たたら」の歴史について頭の整理のつもりででかけました

姫路城の北側 きれいに整備された公園の中に博物館がある。中に入ると思いもかけず、兵庫歴博ゼミの講演会村上泰樹氏「発掘から見た兵庫の歴史 兵庫の鉄」が開かれており、飛び込みで参加。

古代鉄と渡来人の関係や「日本での鉄の生産がいつはじまったのか？」など 自分のイメージ高めようと思っている時だったので、本当に良い機会となりました。

また 今 千種町と隣接する山崎町の山奥で「古代たたら遺跡」の発掘がはじまっていると聞きました。是非たずねようと思っています。ビデオライブラリ「千種 たたら」のフィルムから 千種「天児屋鉄山」の概観図や千種歴史博物館の絵図の写真が「金屋子神」を描いた物である事そして岩野辺の古いたたら遺跡の写真等を見ることができました。また千種のたたらに関係した千種の町の人たちに連綿と続く苗も。ビデオからとった写真を少しスライド風にまとめました。また、最初に千種町歴史民俗資料館を訪れた時に「千種鉄」関係の資料を整理まとめられた本を戴きましたが、今読み返してみても多くの資料が整理されています。先のまとめに記すのを忘れませんでしたので参考に書名のみ記します。

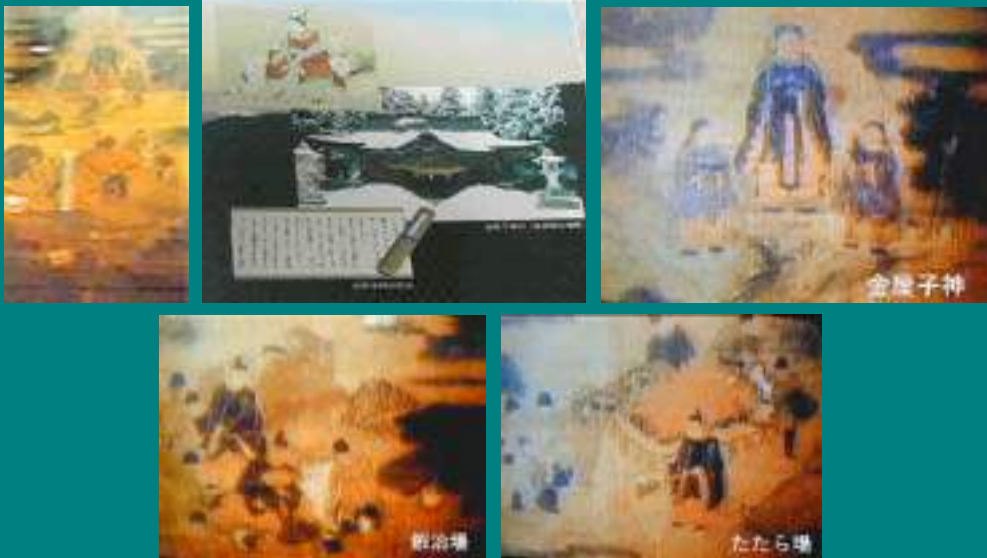
●千種町教育委員会「たたらと村と百姓たち 千種鉄関係資料集一」 昭和 58 年 11 月 15 日発行

2001. 1. 21. 神戸にて M. Nakanishi

千種鉄とたたら製鉄

兵庫県立歴史博物館 ビデオ ライブラリーから

1. 金屋子神話と「たたら」製鉄図



2. 金屋子神 降臨伝承の地「千種 岩野辺」の製鉄遺跡



3. 「たたら」製鉄に関する苗字例



4. 千種川の流れと砂鉄



5. 千種 天兒屋鉄山遺跡



1.4. 「発掘が語る兵庫の歴史『兵庫の鉄』」

村上泰樹氏 講演

—中国伝来の弥生 鑄造鉄斧には既に熱処理による表面加工がおこなわれていた—
hmzi2.htm by M.Nakanishi 2001.1.21.

日曜日 神戸に帰ったついでに、気になっていた歴史博物館のホームライブラリの「千種鉄」のフィルムを見にでかけた。

博物館では思いもかけず、兵博ゼミの講演会村上泰樹氏「兵庫の鉄」が開かれており、飛び込みで参加。丁度古代鉄と渡来人の関係や「日本での鉄の生産がいつはじまったのか？」など 自分のイメージ高めようと思っている時でしたので、本当に良い機会となりました。

また 現実に今 発掘がはじまっている山崎町での「古代たたら遺跡」の紹介是非たずねようと思っています。

ライブラリ「千種 たたら」のフィルムから千種「天兒屋鉄山」の概観図や千種歴史博物館の絵図の写真が「金屋子神」を描いた物である事そして岩野辺の古いたたら遺跡の写真等を見ることができました。

また 千種のたたらに関係した苗字も

兵庫の地が発掘された弥生時代の鉄器・石器道具の分析から倭・大和とほぼ同じ先進の地であったという川村氏の考察 道具の見方 道具が語る考古学おもしろかったです。

また 紀元前 今から約 2000 年前 中国から伝来した鑄造鉄斧には、現在にも通ずる熱処理の原点とも言える脱炭の熱処理が行なわれていた事教えてもらいました。

鉄の技術の奥深さというか古代かには脈々と流れる鉄の技術に触れることができました。

寒い冬 家にじっとしていようかとも思いましたが、やっぱり 出かけるとそれだけの価値有り。



福岡県比恵弥生遺跡から出土した中国製鑄造鉄斧 断面
弥生時代 中期 今から約 2000 年前

村上泰樹氏は「兵庫の鉄」講演の中で 村上恭通氏著「倭人と鉄の考古学」をベースに中国・朝鮮半島と「倭・日本」の交流・鉄伝来の歴史を解り易くレビューし、それらと兵庫で発掘された縄文遺跡・弥生遺跡からの出土鉄との関係が話された。

その中で道具 石器から鉄への変化 また、鉄の日本伝来が巻き起こす古代史の謎解明の手がかりとし

て、紀元前 今から約 2000 年前福岡の弥生遺跡から発見された中国大陸伝来の鑄物製鉄斧にスポットをあて、鉄伝来がの歴史を語られたが、実におもしろかった。

その中で出土した中国製の鑄造鉄斧の表面には 表面部をネバクするため均一の深さで脱炭層を付与する熱処理が施されている事知りました。(例えば 福岡県比恵遺跡鉄斧など)

村上恭通氏著「倭人と鉄の考古学」の表紙を飾る中国製鑄造鉄斧の断面写真は実にあざやかで、古代から現在へ通じる熱処理技術のまさに原点であると私も思います。

鉄器は韻鉄の加工がスタートといわれているが、紀元前中国では精練が既に行なわれ、その鉄を用途にあうように均一に熱処理する技術が既にあったこと驚きです。

また、低温加熱して鍛錬することで不純物や炭素を飛ばし、強靱化する技術(錬鉄)も既に紀元前にあったという。

いずれも現在に通じる鉄の技であり、7 世紀 古代丹後の「高チタン砂鉄によるたたら」の考え方が現在の溶接材料に通じる技であること見つけてびっくりしましたが、それよりもずっと以前に鉄の熱処理の技がほぼ完成された形で日本に入ってきていた事全く知らずビックリしました。

もっとも 日本では当時まだ作れず、日本で作れるようになるのはずっとあと 6~7 世紀。

おそらく 朝鮮半島と交流のあった北九州・吉備などに鉄製品や技法が最初に伝えられたと思われるが、倭・大和が次第にこの鉄のルート・製品の流れを支配することにより、圧倒的な強さを持ち 群雄割拠していた日本各地の豪族を配下においていったに違いない。そして その間 多くの渡来人を配下に鉄の精練・熱処理技術も学び取り、さらに巨大になっていったと考えられる。

今 日本で具体的な精練が行なわれたことがはっきりしているのは 6~7 世紀頃であり、それ以前の鉄の伝来・製造技術については良く判っておらず、日本誕生に間違いなく大きな役割を果たしたに違いない日本での鉄器の製造と日本誕生のロマンと重ね多くの古代史ファンや学者を魅了している。

千種川水系の兵庫県山崎町の一番北の端千種町と接するところ 丁度 古代製鉄発祥の伝承地である岩野辺から山を会して南側にあたる山奥小茅野後山で今古代のたたら遺跡の発掘が進んでいるとの事。今のところ平安時代には遡れるらしいが、調査が進めば、もっと古代へさかのぼれる可能性があるという。「古代製鉄発祥の地」の伝承のある「千種」近隣地で本当に「古代へ遡れる遺跡が出て来ないか」と期待。

是非暖かくなれば walk しようと思っている。

2001. 1. 21. 姫路 兵庫県歴史民俗博物館で By M. Nakanishi

~~~~~

### 播磨国 千 種 鉄

1. 「たたら」製鉄の神 金屋子神 降臨伝承の地  
和鉄のふる里『千種・岩野辺』

【完】

## 2.

## 古代出雲の国 謎の荒神谷遺跡と加茂岩倉遺跡

2001. 2. 12. kjina.htm by M. Nakanishi

古代「iron road 鉄の道」で繰り広げられた壮絶なドラマ  
2000年前忽然と消えた大量の銅剣・銅矛・銅鐸がその姿を現わした



古代出雲 信仰の中心  
神名火山〔仏経山〕



大量の銅剣・銅矛・銅鐸が  
埋められていた荒神谷遺跡



大量の銅鐸が一度に出土  
加茂岩倉遺跡

## 古代出雲の国 謎の荒神谷遺跡と加茂岩倉遺跡

1. 荒神谷・加茂岩倉遺跡 country walk
2. 荒神谷遺跡 探訪
3. 加茂岩倉遺跡 探訪
4. 大量の青銅祭祀器埋蔵の謎



日本誕生前夜 古代出雲に花開いた青銅器文化が忽然と消えた。古代日本の「iron road 鉄の道」で繰り広げられた壮絶なドラマ。それを今に伝えるのが 出雲 加茂岩倉・荒神谷遺跡だ。

2001. 4. 1. By M. Nakanishi

# 古代史の謎

## 2.1. 加茂岩倉遺跡・荒神谷遺跡 Country Walk



宍道湖の西の端 出雲大社の南 平野部から丘陵にかかる一帯は神話の国古代出雲国。この出雲の国の南側にそびえ、古代信仰の中心であった神名火山(仏経山)の山裾から平野部にかかる谷筋の山の山腹から大量の銅剣や銅矛・銅鐸が並んで埋められているのが発見された。荒神谷遺跡である。

また、ここから南東3.5kmの同じような丘陵地山腹から大量の銅鐸が出土した。〔加茂岩倉遺跡〕

日本各地で個々に発見されている古代銅剣・銅鐸の数を超える量がこの地に一度に埋められていた。弥生時代後期紀元2世紀頃と推定されている。

この出雲以外にこれほど大量の青銅器

まとめて発見された例はなく、またこの地が神話に語り継がれる出雲国であったことから、この時代に九州・近畿と並ぶ巨大な王国が出雲に在った事の証拠を提供した。

また、「なぜこのように大量の青銅器が埋められたのか」そしてその後 この地においても 忽然と青銅器は絶え 日本統一が進む古墳時代へと突入して行く。



加茂岩倉遺跡出土 大量の銅鐸



荒神谷遺跡出土 大量の銅剣・銅鐸・銅矛

「この時代 出雲で また 日本各地でなにが起こったのか」この出雲荒神谷・加茂岩倉遺跡の「大量の青銅器出土の謎」については多くの説があるがまだその謎は解けていない。

唯一言えるのはこの時代 「倭の国の大乱」と呼ばれる日本各地での内乱の時代を経て 九州・近畿・吉備・出雲・丹後など次第に統合され各地に王国が形成されて行く。そして、巨大化して行く大和連合。「鉄器」を支配し巨大な勢力を蓄積してきた天孫族大和が次第に各地の王国を従え日本を統一してゆく。大和勢力との戦いの過程で出雲における信仰の中心 国のシンボルであった青銅製祭祀器を隠すため埋めたのであろうか……また 戦いに敗れ 一度に廃棄させられたのか……

鉄の支配を通じ巨大化した大和勢力との戦いのなかで忽然として消えた出雲の王国 その文化の象徴が荒神谷・加茂岩倉遺跡に大量にかくされた青銅器であったのではなかったか……

古代中国・朝鮮半島から続く「鉄の道」が日本国内を進んで行く過程でおこった「青銅器文化の謎」。



古代日本の「iron road 鉄の道」で繰り広げられた壮絶なドラマ それを今に伝えるのが 出雲 加茂岩倉・荒神谷遺跡だ。

本年2月 米子の娘のところを訪ねる機会があり、娘たちとそして 誕生を迎え用としている孫娘と一緒に念願の荒神谷遺跡・加茂岩倉遺跡を訪ねることが出来ました。

まだ少し肌寒い1日 どちらの遺跡にも人影なく、静かな森の中で古代に思いを馳せました。

縄文時代には 既に日本各地との交易が盛んに行なわれていた事が青森山内丸山遺跡の遺物からわかっている。そして弥生時代 戦乱の大陸や朝鮮半島からの季節風に乗ってやって来た多くの渡来人が多くの技術や文化を日本に持ち込んだ。大陸や半島から九州・瀬戸内・畿内へと続く瀬戸内の交流路と同時に 日本海沿岸にもまた時代を超えて大陸との交流路が続く。北九州・山口土井ヶ浜・出雲・伯耆の国麦晚田・丹後・北近江・越へと。

そして 九州各地 瀬戸内・畿内 そして 出雲など日本海沿岸に多くの国々が出来、相互に交流史ながら文化の花を咲かせる。そして巨大化する勢力が統合へ向けての戦乱の世が続いてゆく。

そんな中で 青銅器の文化が花咲いた出雲。

「この大量の青銅器を作った人達はなぜ一度にこれを捨てたのか？」

「敵から奪われるのを避けて隠したのか？」

「ヤッパリ強力な鉄の武器を持つ大和の勢力との戦いの為に神名火山が望める神聖な地に隠し自分達の 国のシンボルを守ろうとしたのか？」

「出雲オオクニヌシノミコトの出雲国譲りの伝説と出雲大社縁起の伝説はこの争いを伝えているのか？」

根拠はないが次々と話は広がって行く ちょっぴり知っている事を披露してご満悦。

古代の遺跡など日頃全く興味のない娘夫婦もびっくり。「この娘が大きくなった時には 教科書にこの遺跡のっているだろうか 自分がこんな凄い遺跡に行ったことおもいだすやろか・・・」などと言っていました。

現代の生活空間からは離れた山裾の森の中。「こんなところになぜ・・・」と思うような山腹で「本当に良く見つけたなあ」と思います。

日本誕生と鉄の関わりの凄さにおもいを馳せ、孫娘の未来にも思いをはせた心地よい1日でした。

2001. 2. 12. 出雲 謎の荒神谷遺跡・加茂岩倉遺跡を訪問して

by M. Nakanishi

大量の銅剣・銅矛・銅鐸が隠すかのように整然と埋められていた

## 2.2. 出雲 荒神谷遺跡 探訪

島根県簸川郡斐川町大字神庭西谷

2001. 2. 12. by M. Nakanisi



荒神谷遺跡は、「出雲国風土記」に記されている神名火山（仏経山）の東約3 km、高瀬山北麓の低丘陵地帯に散在する小さな谷あいの一つにあります。

この荒神谷 神名火山の山裾の丘陵斜面から大量の銅剣と銅鐸・銅矛が相次いで見つかりました。現在は周辺の丘陵地をふくめた広大な史跡公園として整備され 誰もがおとずれられる森林公園になっています。

弥生青銅器が出土した地点は、標高28mあまりの小さな尾根の南斜面中程です。この地点は農道の予定地に決っていたため、県と町教委で分布調査を行い、県教委で遺跡の調査を行った結果、まったく幸運にも昭和59年7月、358本もの大量の銅剣が発見され、さらに翌60年、前年銅剣が大量に発見された場所から約7mはなれた隣接した場所から銅矛16本、銅鐸6個が一度に発見されました。

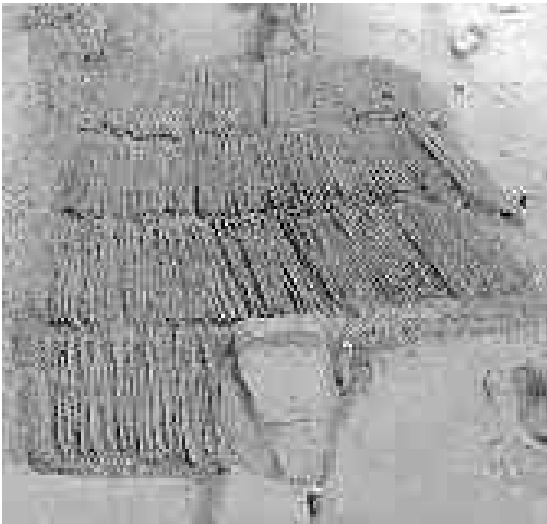
今も発見された時と同じようにレプリカが置かれまじかに発見された様子が見られるとともに、周辺の丘には遊歩道が整備され 青銅器が埋められた山腹全体が眺められるようになっています。



神庭荒神谷遺跡で 2001. 2. 12.



整備された発掘現場 左銅剣 右銅鐸・銅矛（西側）



発見された銅剣



発見された銅鐸・銅

左の写真は発見された銅剣の状態を示していますが、手前から一列に34本、111本、120本、93本の銅剣が、整然と並び、刃を起こして密着した状態で出土しました。日本全国の総出土数を上回る358本もの大量出土は、出雲に巨大な勢力が存在していたことを裏付ける証であり、古代史や考古学界に大きな波紋を投げかけた。これらの銅剣は弥生時代後期（2世紀）「中細形銅剣」類（あるいは「出雲型銅剣」）と呼ばれ、朝鮮半島産の鉛を使っているものが1本残り357本は中国産の鉛を使っていることが分かりました。

このうち100本以上に、刃の部分が刃こぼれのように「ぎざぎざ」が浮き出たものや、鑄型のずれによって刃表面に段差が出来たり、茎がゆがんだりしたままのものなど仕上げの不十分な剣が見つかった。

また328本の銅剣の茎（なかご）部分に「×」印が刻まれていました。

加茂岩倉遺跡から発見された銅鐸にも「×」印があったことで、荒神谷遺跡との関連が注目されています。

銅矛16本の長さは69センチから84センチで、実用品ではなく武器形の祭器だったと考えられます。

刃の部分はキラキラと輝く効果をねらって綾杉状に研ぐ方向をかえているものがある。

佐賀県の検見谷遺跡の銅矛と非常によく似ており、九州で矛製作されたものと考えられています。

また、銅鐸は6個、1号銅鐸は、吊り手の断面が二段になっていることや重弧文・市松文が描かれていることなど近畿地方では見られない大変個性的な銅鐸であり、5号銅鐸は吊り手の断面が厚い菱形であることから最古段階の銅鐸で内面にある突帯が擦り減っていることから長期間にわたって「カネ」として使用されたと思われます。

また、これら銅鐸の成分は、出土した大量の銅剣の成分に含まれる銅、鉛、スズや不純物の混合比率が一致することが分かり、どちらも出雲で製作された可能性があります。

銅鐸は近畿、銅剣は九州を中心とした文化圏とする考古学の通説に見直しを迫ることであります。





荒神谷遺跡の銅剣の柄に〔×〕印



岩倉岩倉遺跡出土の銅鐸にある〔×〕印

### 銅剣の柄にあった〔×〕印と加茂岩倉遺跡銅鐸の表面にある〔×〕印

〔×〕印の線刻は銅剣の柄（つか）に差し込む茎（なかご）にみられ、約1センチ四方の大きさがある。刻まれた理由は「工人グループのマーク」か「銅剣の祭り」の祭主の家紋」ともみられている。また、粗雑な作りの多い理由としては、銅剣や銅鐸などの青銅器はこれまで権力者や神の力を誇示するための儀式に使った後で土中に埋めたとする説が有力だった。しかし、弥生後期は稲作が富の象徴として確立する時期に当たり、宝器として見せるよりも、豊作を祈り地の霊に捧げるため、最初から土中埋納用に生産されたものとする説があります。

「なぜ 出雲で文化圏の異なる銅矛・銅鐸・銅剣が大量に見つかったか」については、出雲の国がもともと朝鮮半島・大陸からやって来た航海術にすぐれた渡来人が作った海の民の国であり、出雲が日本海を中心とした交易の集散地として、これら青銅器の工人も住みつきここで大量に作られた銅剣・銅鐸が全国へ配られたとする説もある。

古代出雲の国 謎の荒神谷遺跡と加茂岩倉遺跡

出雲で作られた大量の銅鐸が約2000年 山中に隠されていた

## 2.3 加茂岩倉遺跡探訪

島根県加茂町大岩 2001. 2. 12 by M. Nakanishi





1996年10月14日加茂町の農道工事現場である丘陵地の山の中腹で39個もの銅鐸が埋まっているのが発見された。大量の銅剣が埋められていた荒神谷遺跡から南東へ約3.5kmはなれた仏経山の麓の谷に面した丘陵地の山腹である。また、加茂岩倉遺跡から少し行ったところに神原神社古墳があり、そこからは、邪馬台国・卑弥呼が魏に使いを送った年と言われる景初3年の年号の入った三角縁神獸鏡が発見されている。これら青銅器はいずれも出雲の国の祭祀と深く関わっていると考えられる。

銅鐸・銅剣・銅矛は弥生中期(紀元前1から紀元1世紀)のものでこの青銅器祭祀は弥生後期[3世紀]に出雲を中心に鳥取・富山などに四隅突出型方墳が現れてくると消えてしまう。

四隅突出型方墳の出現とは少し年代がずれるが、新しい勢力の伸張により、旧勢力である出雲が青銅器を集め、埋め隠すことをしいられ、加茂岩倉・荒神谷遺跡が形成されたと考えるとこの加茂岩倉・荒神谷遺跡の謎も理解出来る。

また この新勢力の伸張にはたした「鉄」の役割はおおきい。大和政権を打ちたてた天孫族 四隅突出方墳を作った伯耆・丹後・越などの諸王国が大陸・朝鮮半島を含め「鉄の覇」を競ったに違いない。

古代製鉄を勢力伸張の中心に据え 長年にわたり、iron road 鉄の道を巡って 諸国間の抗争が続き、この過程で出雲青銅祭祀器の埋蔵を「鉄の新しい王国に屈服していく中での抵抗の象徴」として見るとこの加茂岩倉・荒神谷遺跡の謎も解けてくる。

文化をも抹殺する力を持った鉄のすごさがここでも見える。



加茂岩倉遺跡のある大岩郷遺跡  
正面が大岩〔岩蔭〕岩倉遺跡は反対側

2月12日 朝早く 娘夫婦の案内で米子を出発して国道9号線を松江の方へ。松江の市内を避け玉造から南へ折れて丘陵地を西へ15分ほどで加茂岩倉の郷へ。ちょうど山陰高速道の工事が急てんぽで進んでいる谷合の道路際に岩倉の名の発祥の大岩 岩蔭が見て取れる。街の喧騒の中を脱し、四方丘陵地に囲まれた谷合の静かな場所である。冷たい風が吹きぬけ、朝霧の中「神おわす場所」の感じである。駐車場に車を置いて、谷合の道を10分ほど谷合を入ったところに加茂岩倉があった。今 史跡整備中と見え 足場が幾つも組まれていた。



加茂岩倉遺跡入口  
右手の丘の上が遺跡



加茂岩倉遺跡からもと来た道  
遠方に島根半島を望む



本当に四方いずれも山裾が迫る狭い 谷のどんつきでどこにでもある山間の谷の中。隠す場所としては最適であったろう。大量の銅鐸が埋められていた位置は思ったよりも高く、谷合の道からは数10メートル上の山腹にあり、今高い階段と遊歩道の工事がされている。

本当にまわりには何の目印もないそれとって特徴のない谷合の枝分かれした支谷の山腹に約2000年にわたって隠されていた銅鐸。

どんな思いであったろうか……。



加茂岩倉遺跡への階段

私の知っている銅鐸は神戸の海から見渡せる山々から出土した大型の銅鐸。全く置かれた環境が違ったろう。

寒さに震えつつ、ここに銅鐸を埋め去って行った人達の思いを夢想しつつ、神庭荒神谷に向った。

2001. 2. 12. 加茂町大岩 加茂岩倉遺跡にて

by M. Nakanishi



# 加茂岩倉遺跡の銅鐸



加茂岩倉遺跡で発見された銅鐸の中 幾つかの出雲特有の紋様



加茂岩倉遺跡から出土した39個の銅鐸は、一箇所からの出土としては全国最多です。出土した銅鐸は弥生時代中期ごろに作成された古い形式のものと、新しい形式のものがあります。文様は流れるような流水文と帯を縦横に画いた袈裟襷文（けさたすきもん）と呼ばれるもののいずれかです。

銅鐸の大きさは形式ごとに大きさがそろっており、古く小さいものが約30cm前後、大きいものが約45cm前後で、銅鐸の多くは、大き

なものの中に小さなものを入れた入れ子の状態で発見されたものが

12組あり、その他3組も入れ子だったと推定されております。また、現在加茂岩倉銅鐸の内15個26個については、同じ鋳型で作られた、いわゆる兄弟銅鐸が存在することがわかっています。

発見された銅鐸のうち、幾つかは土製鋳型で作られ その紋様に近畿地方にない特徴があることや、その成分が荒神谷で出土した大量の銅剣とほぼ一致することなど、出雲ないしその周辺の職人の手によって作られたと考えられるふしが幾つか見つかかり、今までの考古学の常識を覆すと共に、出雲に出雲特有の文化をもった巨大な国



銅剣の柄の〔×〕印



銅鐸〔×〕印

があったことを推察する発見となった。加茂岩倉銅鐸の中で最も注目されるのは、銅鐸の身の上にシカ、トンボ等の絵画を画いた18・23・35号銅鐸であり、出雲あるいはその周辺で作られた可能性が最も高いと考えられる銅鐸が、この3個である。こらには出雲

以外では見つかっていない文様があります。例えば35号鐸には、袈裟襷（け

さたすき）文の交わる部分に、四角い文様が何重にも描かれています。

また23号鐸の鹿の下に書かれた動物も特徴的です。一説にはイノシシといわれているが、昆虫という説もあり、真相は謎につまれています。また一般に、袈裟襷文銅鐸は横帯が優先しますが、18号、23号、35号鐸は横帯と縦帯が交差しているのも大きな特徴です。また、出土した銅鐸の中の作った後荒神谷遺跡から見つかった銅剣の大半に着けられたと同じ「×」印をしたものが13個見つかっている。

## 2.4. 青銅祭祀器 埋蔵の謎

古代日本の「iron road 鉄の道」で繰り広げられた壮絶なドラマ  
それを今に伝えるのが 出雲 加茂岩倉・荒神谷遺跡だ



荒神谷遺跡や加茂岩倉遺跡で発見された大量の青銅器が何時埋められたのかは土器など年代を特定出来る遺物が出土せずはっきりしないが、埋められた青銅器の中で最も新しいものである大量の銅剣が製作されてまもなく弥生時代後期 2世紀頃 日本国中が「倭の大乱」と魏誌にかかれた時代と考えられている。

日本が邪馬台国はじめ多くの国々に分かれていた時代から、大和・天孫族により次第に統一され、大和政権が成立して行く「日本国誕生」の前夜 古墳時代の幕開け前の時代である。

この時代は大陸・朝鮮半島と日本の諸国との間には密接な交流があり、また、陸・朝鮮の戦乱をさげ、大陸・朝鮮半島から多くの渡来人がやって来た時代でもある。

朝鮮半島から 季節風に乗る、壱岐・対馬をへて北九州に渡るルートがあり、また朝鮮半島 釜山付近から北西の季節風に乗ると用意に出雲・伯耆・丹後・越の国に至る。この日本海沿岸への大陸からのルートも広く使われていたと考えられ、人々の交流ばかりでなく 稲作の技術 土器 そして 青銅器・鉄器など数多くの技術が渡ってきた。

そして 日本各地にこれらの人々が住みつき先住の人達と融合しつつ多くの国が出来てきた。

出雲もその例にたがわず北九州の影響を受けつつも大きな国が成立していた。

出雲風土記などに語られる神話からは交易を支配した海の民が九州からやって来て次第に定住し王国を作ったと考えられている。

神名火山を信仰の中心として出雲の国の人々の心をつなぐ重要な祭祀が行われ、この儀式の中心に青銅製の祭祀器が使われた。また、同じ流れを持つ同盟の国々をつなぐ心柱としてこれらの青銅器製祭祀器がくばられることもあったろう。当初 北九州・畿内で作られたこれら青銅製祭祀器が出雲の国が巨大になるにつれ、これらの工人を出雲に住ませ、紋様などに独自の手を加え、出雲独自の文化に仕上げで行ったに違いない。

同様の流れは出雲ばかりでなく、九州・瀬戸内海諸国・畿内そして日本海沿岸各地で起こっていたに違いない。そして 日本各地でだんだん勢力を伸ばしてきた国々が衝突。戦いに敗れた国は併合され、独自に培ってきた文化も抹殺されてしまう。こんな事が日本各地で起こったであろう。

魏誌に書かれた「倭の国の大乱」の時代を迎える。この戦乱を支配したのは圧倒的に強力な武器となった鉄器である。大陸・朝鮮半島からの鉄器供給ルート並びに鉄器加工技術を持った国が次第に勢力を伸ばす。恐らく このルートの支配を巡って 朝鮮半島の諸国と日本各地の国々の交流は益々活発となり、

大和 吉備 出雲 伯耆 丹後 越 など日本各地で国々の連合が進み、大きな勢力に成長し、各種祭祀を伴う独自の文化圏を築いて行く。そして やがては これらの連合国どうしが相互に争う事となり、ついには、鉄のルートを支配し、独自に鉄器加工技術をいち早く身につけた大和が日本各地の王国を支配して行く。まさに 日本誕生のドラマが展開されようとしていた。

出雲も必死の抵抗を行なったであろうが、この潮流に飲み込まれた。しかし、出雲の勢力は強く簡単には征服されなかったのであろう。

しかし、抵抗も続かず出雲神話オオクニヌシノミコトの国譲り神話や出雲大社の縁起と神在月伝説に見られるごとく 和睦という名目で征服されて行く。その過程で出雲の心の中心であった青銅の祭祀器が神宿る神名火山のふもとの谷に集め隠されたのではないだろうか

この荒神谷遺跡・加茂岩倉遺跡の出現により、出雲神話が俄然真実味を帯びてくる。

荒神谷遺跡の銅剣と加茂岩倉遺跡の銅鐸に刻まれていた×印も注目に値する。

×印は、同一の信仰集団が、埋納の際に、呪術を込めて刻んだと推定され、製作年代がまちまちな銅鐸と、製作して間もない大量の銅剣が同時に埋納されているのである。

青銅器の変遷は、戦乱が大規模になったのに伴い、より強力な呪力を求めて、九州では銅矛を、瀬戸内海では銅剣を、近畿・東海では銅鐸をそれぞれ大型化する。

しかし、そうした呪力の強化も、新たな思想と信仰を掲げ、豊富な鉄器で武装し、百戦錬磨の戦術を駆使する征服者集団(記・紀に見える天孫族)の力には及ばず、民衆の祭祀は弾圧され、青銅器は相次いで消滅し、初期大和政権の成立、古墳時代の幕開けという大きな画期を迎えたと……。

古代日本の「iron road 鉄の道」で練り広げられた壮絶なドラマ それを今に伝えるのが 出雲 加茂岩倉・荒神谷遺跡だ。

2001. 3. 18. 荒神谷・加茂岩倉遺跡を整理して

by M. Nakanishi

古代出雲の国 謎の荒神谷遺跡と加茂岩倉遺跡

〔完〕

1. 荒神谷・加茂岩倉遺跡 country walk
2. 荒神谷遺跡 探訪
3. 加茂岩倉遺跡 探訪
4. 大量の青銅祭祀器埋蔵の謎



## 3.

## 久しぶりに訪れた 九十九里

## 砂鉄の浜 飯岡浜と羽計台

2001. 4. 27. bioka.htm by M. Nakanishi



古代の湖に広がる水田と香取台地  
海上町 2001. 4. 27.



飯岡漁港とさの向こうに続く九十九里浜  
飯岡 刑部岬から 2001. 4. 27.

4. 27. 午後 約 10 年振り 九十九里 砂鉄の浜 飯岡浜まで 足をのびした。「Iron Road 鉄の道」を歩いてみようと考えたスタートが九十九里浜の北の起点 飯岡の浜。10 年ぶりに訪れた飯岡灯台のある刑部岬はきれいな公園になっていた。

眼下に見える飯岡漁港から南へまっすぐに伸びる九十九里浜 そして その東には古代大きな湖があった海上町の水田がひろがり、その端に「たたら製鉄遺跡」が点在する香取台地もそのまま。



飯岡浜から刑部岬・犬吠崎を望む飯岡浜



風紋に混じる砂鉄

飯岡の浜におりると 沖には砂防のブロック堤防がならび、砂に混じる砂鉄の量が随分すくなくなったように思う。銚子から飯岡・九十九里へ向う岬の上であり、昔随分世話になった教会へも上がってゆきました。

また、かつて住んでいた会社の寮のあった東庄香取台地の羽計台にも寄って見ました。

寮はもう別の建物に変わっていましたが、下総橋駅から羽計台への坂道も昔と変わらず静かな夕暮れ。



昔世話になった銚子の教会



羽計台の夕暮れ

古代の湖に遠々と広がる水田から九十九里

今はもう跡形もありませんが、この銚子から香取へと続く小高い台地が古代の『製鉄』の根拠地であったことを頭に浮かべながら、羽計台の台地の上を北へと帰って着きました。

「羽計」の地名が「たたら製鉄」に関係有る地名と教えてもらったのはずっと後この地を離れてから。

訪れた夕方 日没前 羽計台の東側からは、房総・鹿島・香取の古代製鉄遺跡の連なる場所 鹿島製鉄所の大工場が見て取れ、また台地西には古代の湖の後の地に水田が夕日に映えていた。

この香取台地は古代から今に至るまで製鉄との関わりを持つ重要な地点であり、台地の北の端にある香取神宮もきっと鉄との関わりがあるに違いないとおもえる。



羽計 なんとも奇妙な名前と思って生活していた昔、鉄との関わりを知って、もう一度この台地に立って見たいと思っていた。短時間ではあるが台地に立てた。

本当に夕日の素晴らしい夕暮れでした。

今度は是非ゆっくり 香取神社からこの台地を飯岡海岸へでて、銚子から利根川を渡り、砂鉄の砂丘が続く波崎日川浜 常陸風土記に砂鉄の記事が有る「若松」そして 鹿島神宮へ

時代の流れは無茶苦茶でしょうが 房総と常陸の国をつなぐ iron road 鉄伝播の道をたどって見たいと思っています。

久しぶりに飯岡・東庄訪問

帰路利根川沿いバイクを走らせつつ

2001. 4. 27. by M. Nakanishi

2001. 5. 12. by M. Nakanishi

## 接着・接合の原点

## 4.

## 縄文の石鏃について「アスファルト」

2001. 4. 27. asfa.htm by M. Nakanishi

4. 27. 青森山内丸山縄文遺跡から縄文列島へ「縄文文化の扉を開く」歴史民俗博物館企画展が佐倉の国立歴史民俗博物館で開催中。そのシンポジウムを聴講した。

先日 森本哲郎氏の講演で「山内丸山縄文遺跡」は世界4大文明にも並び 5大文明ではないか」と聞いたが 今「山内丸山縄文遺跡」の世界史的位置付けが議論されていた。

世界文明の展開が農耕定住によって育まれたという定説に対し、森と海に囲まれ農耕を持たぬ森の民が高度な文明を数千年にわたり育み、縄文の世界観を全くかえた青森山内丸山遺跡。

あのベストセラー「神々の指紋」で知られるイギリスの作家ハンコックも世界の古代遺跡探訪のドキュメント取材で山内丸山遺跡に訪れたという。

また、まだ 鉄器が現れる前の時代から 物と物との接合接着に「アスファルト」が使われていた。接合に携わるものとして、接合・接着の原点とでもいえる古代の「アスファルト」接着がどんなものか知りたと思っていました。 縄文時代このアスファルトは新潟「越」の国で産出。交易品として日本海沿岸で広く使われていたという。この「越」の国のアスファルトを石の鏃につけて柄と接続されて展示されていました。

いろんな本で聞いていたが、やっと現物見ることに出来ました。



石鏃とその柄の接合に使われた「アスファルト」

熔融接合の原点は「奈良の大仏の鑄掛け」。

それに先駆ける事数千年前 縄文時代からアスファルトによる接合・接着が行なわれていた。

同じ時代「漆」もまた土器の装飾・接着につかわれ、山内丸山遺跡の土器などの彩色にはベンガラをまぜた赤漆が用いられていた。

簡単そうで中々思いつかぬ物作りのアイデア。 数千年前 既に朝鮮半島から本州・北海道に至る日本海沿岸で「黒曜石」「ヒスイ」などと一緒に広く交易されており、弥生時代以降の「鉄」と同様に大きな文化圏をになう役割を果しているに違いない。

2001. 4. 27. 歴史民俗博物館 「縄文文化の扉を開く」展にて



## 5.

## 接合のルーツ 「漆」・「アスファルト」を見る

-「発掘された日本列島 2001」展-

-日本の固有の「木の文化の加工技術」として-

ursib.htm

6.16. 本年も「発掘された日本列島 2001」展が両国の東京博物館で開催中。

今年の目玉は出雲大社の古代中空にそびえる神殿心柱の発掘。最近の古代遺跡発掘から、4世紀卑弥呼の時代すでに大和に巨大勢力があり、「九州・出雲・東海・越」など日本各地の土器などからこれらの地方が大和の勢力下にあったことが判ってきて、また、従来考えられていた縄文時代には考えられない巨木を加工した日本古来の「木の文化」の存在など古代史が書き換えられようとしている。

出雲大社の発掘から、古代中空にそびえる巨大神殿〔東大寺大仏殿よりも大きな高さ46Mを越える建物〕伝承を裏付ける巨大心柱が発掘された。

春 出雲太神社の本殿の前にある発掘中の「宇豆柱」を見ましたが、大きな柱が三本束ねられ、すごいと思いました。



天空にそびえる 古代 出雲大社 想像図 NHK TV より



発掘中の宇豆柱

三本の大木が一つの柱に組み立てられている

三内丸山遺跡をはじめとして、古代遺跡で次々に見つかる巨大木加工技術。

これらから、日本には世界3大文明に匹敵する「木の文明・文化」があったとする説を唱える人が多くなってきているが、大空高くそびえる出雲神殿の存在はますます日本固有の「木の文化」の存在に根拠を与えるものと思う。ともすれば「日本の文化は渡来人によってもたらされた」とする日本古代史が今書き換えられようとしています。

三本の大木を束ねた柱が幾本も天空高くそびえ その柱の上 天空に大きな神殿がそびえている。

想像しただけでもびっくりする建造物

これが日本古来の文明がもたらした木の加工技術・ピラミッドに相当する文明の粋を集めた巨大木造建造物と言わずにおれようか・・・・・・

本当にビックリした。春 出雲大社でこの宇豆柱の発掘を見たときにはすごい柱だとは思いましたが、天空にそびえる神殿のスケールの大きさを見て本当にびっくり。

三内丸山の巨大な6本柱といい その後の弥生時代の巨大柱を使用した幾多の建造物 そしてこの出雲大社の古代神殿。日本の木の文化の素晴らしさが見えてくる。

そんな中で 古代の加工技術の基本となる接合と深くかかわっていた、縄文の「漆」と「アスファルト」が発掘展示されていた。

接合にたずさわるものの自負心かもしれないが、これらの加工技術が治具・工具をつくり きめの細かい加工を可能にし、その展開が日本の木の文化を大きく育てた事であろうことは想像できる。北海道垣の島遺跡から縄文早期の最古の「赤漆製品」が発掘され、従来大陸から伝わったとされていた「漆」が日本固有の技術である可能性が強まった。また、青森八戸の縄文遺跡からは「赤漆」により、接合補修された痕跡のある遮光器土土偶の首が発掘展示されており、古代の有力な接合・補修技術であることが判る。きっちりと補修接合として漆が使われているのを見るのは初めてでした。

また、新潟の青田縄文遺跡で出土した「天然アスファルトの塊」が展示され、古代縄文のアスファルトの塊も見るのが初めて。もう 数年にわたって 日本の接合・接着技術の原点として 「アスファルト」「漆」で設置・接合された物を見たくて色々博物館へ通いましたが 「アスファルト」につづいて「漆」でもが実際に使われた現物をやっと見る事が出来ました。

### 接合・接着のルーツ 赤漆・アスファルト 「発掘された日本列島 2001」展より



縄文の赤漆と天然アスファルト塊



赤漆での修復痕跡のある土偶

日本の古代の歴史が書き換えられようとしています。それと伴って 従来はあまり注目されていなかった「日本の木の文化」が世界文明の視点からも重要視されています。

日本固有の文化・技術と稲・鉄を中心とした大陸からの技術が融合し、日本が形作られた。

今、「古代鉄の流れ」からも不思議な事多く ちょっとづつ ベールが剥がされていくのが面白い。

## 6.

## 鬼の住む山 京都府 大 江 山 Walk

・ 大江山の鬼伝説に

『Iron Road 鉄の道』のロマンをかきたてて

oeyma.htm by M.Nakanishi



- 6.1. 鬼が住む山 大江山へ 古代 iron road の夢のせて
- 6.2. 鬼の住む山 大江山 walk
- 6.3. 酒吞童子説話と大江山「鬼退治」

8月12日 神戸から車で舞鶴自動車道を通って約2時間弱。お盆の休暇を利用して、あの鬼退治の大江山へ行ってきました。

京都の北 丹波と丹後の境に大江山がある。あの酒天童子の伝説・鬼の住む山である。小さい時から父の故郷丹後へ行くたびに通る道筋にあり、幾度もこの鬼退治伝説を聞かされてきた。

『『鬼』伝説のあるところ『たたら』製鉄遺跡あり』。

『たたら・iron road』探訪をはじめ、一度はきっちり大江山の山中へ入りたいと思ってきた場所である。

この大江山の北側丹後の国は古代大和政権誕生に先立って巨大な古墳が出現し、その後 弥栄遠所遺跡など多くの製鉄遺跡が点在する古代鉄の大王国の地。

大江山に続く丹後の山々(例えば 丹後峰山町の比治山など) には「鬼」伝承と同様「たたら」伝承と関係の深い「羽衣」伝説があり、ここから丹後半島を縦断して日本海に注ぐ竹野川流域には古代遺跡や古い「たたら」遺跡が点在している。

また 大江山に源を発し、丹後半島の付け根岩滝で宮津湾に注ぐ野田川流域にも古代遺跡や製鉄遺跡が点在し、丹後半島のもう一つの古代鉄の王国の根拠地。

一方この大江山の南の丹波側綾部・福知山は「綾部」の名が示すとおり古代大陸からの渡来人が住み着いた根拠地であり、由良川を介して日本海側の若狭・丹後と畿内を結ぶ要衝の地であり、ここにも由良川を支配する古代大王国があったという。

舞鶴道が綾部の街に入る手前の丘をトンネルで突き抜けるがこの丘は今からおよそ1500年前、由良川流域の王の墓として造られた巨大な私市円山古墳が遺跡公園としてきれいに整備されている。直径70m



を超える京都府最大の円墳で被葬者の強大な政治的権を如実にあらわしている。  
 このように大江山の北に広がる丹後は古代日本海側から畿内に至る重要な通商路であり、大陸から日本海を  
 通って日本へやってきた渡来の民・文化の重要な国であったことがうかがえる。



丹後・丹波は古代 大陸から日本海を渡ってきた渡来人たちが畿内へ進む道筋であり、 また、畿内の  
 勢力が古代和鉄の覇権をめぐる伸張してゆく道筋でなかったか。  
 畿内と丹後の国の間に立ちはだかる奥深い大江山。  
 立証されていないが、「古代鉄生産をめぐるの畿内と丹後・丹波の大王国の争いがこの大江山「鬼」  
 伝説を産んだのではないか? 」という夢が丹後の羽衣伝説・大江山鬼伝説とともにふくらんでくる。  
 幾度となく綾部から丹後へのこの大江山の山越えの道を通りかかったことはあるものの一度は是非ゆっ  
 くり大江山の山中へ分け入りたいと思いつつ機会を失ってきた。

## 6.1. 鬼が住む山 大江山へ

・ 古代 iron road のロマンをのせて ・



京都府大江町 大江山登山口



丹後国 古墳・製鉄関連遺跡分布

舞鶴道綾部インターチェンジから由良川沿いの山肌に沿ってすこし戻ったところから大江山・加悦・野田川町の標識に従って山の中に入ってゆく。

あまり高い山ではないが、森の中 幾度となくまがりくねりながら山を登ってゆく。こんなところに人家があるのかと思う奥にも人家がある。山道を約 30 分ほど走ると大江山登山口のところに出る。

いつもはこの山中を走り抜け、大江山を越えると大江山に源を発す 京都府 大江町大江山登山口  
る野田川沿いに丹後側の加悦・野田川の町にでて、海岸沿いの岩滝口へ抜ける。この野田川沿いは古代から開けた土地であり、弥栄町の竹野川沿いととも古代の古墳や製鉄遺跡が分布している古代からの街道筋。今は道の両側から機織の音が響く街道筋。幾度となくこの大江山を越えて丹後へ行った道である。

山深い道ではあるが、古代からの街道筋、古代遺跡・製鉄遺跡の分布から見るとまぎれもない『丹後の国 Iron Road 』。

丹後で本格的な鉄の生産がいつどこでスタートしたかはっきりしませんが、5 世紀頃からこの野田川沿いや竹野川沿いに出現した大型古墳や製鉄遺跡からの鍛冶精錬スラグの発見等からこの流域で鉄の加工鍛冶もしくは精錬までもが始まっていたのではないかと考えられている。特にこの大江山の山懐は丹後の国 古代製鉄発祥の地の可能性がよい。

(弥栄町編古代製鉄と日本文化より)

## 6.2. 鬼の住む山 大江山 walk



大江山 大江山中腹 鬼公園から



鬼瓦モニュメント



鬼の交流博物館  
2001.8.12. 鬼公園にて

由良川の流れから大江山の中へ車を走らせて約 30 分 大江山登山口と書いた標識と鬼のモニュメントが迎えてくれる。本道から別れ、大江山へまっすぐ一本道が続いている。

もっと山奥の薄暗い感じを抱いていたが、非常に明るい谷筋である。この谷に分け入って少しいったところに大江山をバックに大きな鬼瓦のモニュメントがあり、鬼の交流館やロッジほかの野外活動施設がここに集まっている。数年前大江山で開かれた地域博覧会の会場だったところで周辺の山を含め、自然公園としてよく整備され、野鳥の森やキャンプ場がある。そして この広い公園の丘の一角に大江山をバックに酒吞童子ほかの鬼の群像のモニュメントが大きな台座の上に建ちここが鬼の故郷であることを主張している。ものすごい顔をした酒吞童子が京都を指差し茨木童子・星熊童子がそのそばで威嚇している。なんとも明るい。想像と大きな違いである。



大江山の鬼の群像 モニュメント



大江山林道 入口

大江山へのアプローチ



頂上下の崖 原生林に包まれて建つ  
御嶽稻荷神社



京都を指指し天空をにらむ  
酒呑童子の像

この自然公園から大江山の頂上直下のところにある古い御嶽稻荷神社のところまで林道が伸びている。

この林道は山深い原生林の中を曲がりくねりながら森の中を分け入り、ほぼ山を半周する形で頂上直下の切れ落ちた崖のふちに建つ御嶽稻荷神社で車道が終わる。ここからは「約30分 原生林の中の足場の悪い山道を登れば頂上」と山から下りてきた人に聞いた。

今回は家内と二人サンダル履きできたので、ここで断念。でもこの狭い崖のふちの森の中に立つと崖の向こうには若狭・日本海へと山並みがつづき、はるか下に小さな集落がぼんっと見え、いかにも鬼が居そうな深山の山中。登り口で描いたイメージとは本当うらはらに低いが鬱蒼とした森に包まれた山々が幾重にも重なって深山である。



また、この林道の途中には 河守鉦山遺跡の標識がみられ、この大江山が鬼伝承とかかわりのある山「たたら」の痕山跡がここにもあると独り納得した次第。



大江山 林道で見つけた河守鉦山遺跡の標識

ものすごい形相をして京都を指差す酒呑童子の像の前に座り込み、大江山を眺めながら、「源頼光の鬼退治」の物語と製鉄の民が描かれた「もののけ姫」の映像をダブらせながら、この地で何が起こったのか 成敗された「鬼」はいったい誰なのか？ 遠い昔に思いをはせた次第である。

今回は かつて丹後の国の製鉄の民が鉄を求め、日本海側から野田川沿いにこの大江山の谷深く分け入り、製鉄をはじめたその道筋を野田川沿いに大江山頂上までたどってみたい。

今回の大江山 walk で長年いだいてきた「鬼退治の大江山」と「たたら 古代製鉄」の基地 丹後の国とこの国が日本形成に役割を果たしたその象徴としての「大江山」がやっと結びついた1日でした。

それにしても 製鉄の民としての鬼伝説の「鬼退治」 出雲のヤマタノオロチ退治 伯耆 鬼退治 吉備桃太郎伝説の基となった「鬼 ウラ」退治 東北 北上の鬼 蝦夷の雄「アルテイ」の征伐 そしてこの丹後の国 大江山の鬼退治 どれもこれもすべて「鬼はだまし討ち」にされている。

古代日本統一が図られていく中で、次々と退治された鬼たちの国。これらの国の勢力の強さがこの「鬼のだまし討ち」に象徴されていると言っていないだろうか・・・

大和政権のみが語られる日本の歴史。日本に縄文の時代 また渡来の民が大挙してやって来た弥生の時代。多くの人達の融合によって日本が形成されたばかりでなく その後融合され消えてしまったとはいえ、その地方地方にも鬼に代表される地方独自の文化があったとの歴史認識は今を考える上でも重要なポイントと思う。

2001.8.12. 京都府 大江山 walk by M. Nakanishi

・ 酒呑童子の像の前で大江山を見上げ  
古代の丹後の国 たたら民に思いをはせながら ・

## 6.3. 大江山 酒吞童子 と 鬼伝説

oeoni.htm by M.Nakanishi



1. 大江山 鬼伝説の系譜
2. 酒吞童子 説話 -源頼光の鬼退治-
3. 大江山の鬼伝説に  
『Iron Road』の口マンをかきたてて

### 1. 大江山 酒吞童子説話 -源頼光の鬼退治-



大江山



鬼退治に出掛ける源頼光の一行

大江山には酒吞童子ほかの多くの鬼たちが住み、都などに出没し、荒らしまわっておりました。都では鬼による被害が大きいため、鬼退治をすることになり、その任務に源頼光が任命されました。頼光は配下の四天王と呼ばれる渡辺綱・坂田金時・碓井貞光・卜部季武をはじめ、彼らの家来などを引き連れ、大江山に向かいました。

途中、一行は三人の老翁(石清水八幡・住吉明神・熊野権現の化身)に出会い、老人たちから隠れ蓑と神酒を授かりました。隠れ蓑はそれを着ると鬼には姿が見えなくなり、神酒は人が飲めば力がつき、鬼が飲むと神通力を失うというものでした。そして、山伏の姿に変装するとよいと助言しました。そこで頼光らは老翁たちにもらった山伏の衣装に着替え、家来たちを帰らせ、山奥へ分け入って行きました。

やがて一行は川で血の付いた布を洗う老婆に出会いました。老婆は頼光たちを見ると「ここは鬼の里です。見つかる大変ですから、お逃げなさい」と言います。しかし頼光らは「我々はその鬼を退治に来たのだ」と告げ、老婆に、あなたはどのような方なのですか？と問います。すると老婆は涙を流しながら、身の上を語りました。老婆は鬼たちにさらわれた都の貴族の妻。しかし痩せていたため、食べられるのを免れ、鬼の神通力で200年の寿命を与えられ、下働きをして生き長らえているとの事でした。そして老婆は頼光たちに鬼の城への道筋や鬼の城の中の様子などを教えました。

やがて、頼光たちは鬼の城に到着。道に迷ったので泊めて欲しい、と言いました。鬼たちは承知して、一行を中に入れます。すると頼光は泊めてくれるお礼に、と酒を差しだし、鬼たちもそれを喜んで酒盛りが始まりました。大将の酒呑童子の他、四天王の星熊童子・虎熊童子・熊童子・かね童子そして近所の山から来ていた茨木童子。酒盛りが進むに連れ、鬼たちはすっかり上機嫌になりました。やがて夜になると、頼光らは起きだして老婆に聞いていた鬼の寝床に向かい、老翁たちにもらった隠れ蓑をつけて酒呑童子のそばに近寄り、一気に首をはねました。酒呑童子の首ははねられたまま頼光に飛びかかり、その兜にかみついたまま動かなくなりました。

酒呑童子は最期に「おのれ、凶ったか。鬼は決して人をだましたりしないものを」と言ったといひます。

続いて頼光たちは他の鬼たちも次々と倒し全滅させました。そして鬼の亡骸を火葬にすると、山を降りました。途中、老婆と出会った川のところに、人の骨が倒れていました。あの老婆が鬼の神通力がなくなり、寿命により本来の姿に戻ったものでしょう。頼光たちは老婆の骨を丁寧に葬り、都へと帰って行きました。

この酒呑童子説話には その出身を含め、数多くの異説があり、時代時代を反映しつつ、説話として固まっていたと考えられます。

酒呑童子の伝説に関しては下記の文献が基本のようです。

「大江山絵詞」逸翁美術館蔵

15世紀初頭南北朝頃の成立。通称「香取本」。

香取神宮の大宮司家に伝わっていたもの。

「酒伝童子絵巻」サントリー美術館蔵

因幡池田家に伝わっていたもの。16世紀初頭の成立。

「御伽草子」の「酒呑童子」

16世紀末から17世紀初頃の成立。



## 2. 大江山 鬼伝説の系譜

大江山に遺る鬼伝説のうち、最も古いものが8世紀に、国の命令で丹後国が提出した地誌書ともいべき「丹後風土記」の写しの一部といわれる「丹後風土記残缺」に記された陸耳御笠（くがみみのみかさ）の伝説である。

青葉山中にすむ陸耳御笠が、日子坐王の軍勢と由良川筋ではげしく戦い、最後、与謝の大山（現在の大江山）へ逃げこんだ、というものである。この陸耳御笠のことは、「古事記」の崇神天皇の条に、「日子坐王を旦波国へ遣わし玖賀耳之御笠を討った」と記されている。

また、用明天皇の時代というから六世紀の末ごろのこと、河守荘三上ヶ嶽（三上山）に英胡・軽足・土熊に率いられた悪鬼があつまり、人々を苦しめたので、勅命を受けた麻呂子親王が、神仏の加護を受け悪鬼を討ち、世は平穏にもどったというものである。麻呂子親王伝説の関連地は70ヵ所に及ぶといわれている。・「清園寺古縁起」

そして、その後の時代背景とこれら古代の大江山鬼伝説とが結びついて南北朝時代には酒吞童子説話としてかたちづくられて行く。そしてその後、これをもとにして、いろいろな物語がつくられてきた。酒吞童子の名がはじめて登場するのは、15世紀初頭の「大江山酒天童子絵巻」（逸翁美術館蔵）と言われ、その後中世に入り、能の発達と共に謡曲「大江山」の主人公として、あるいは「御伽草子」の出現により、広く民衆の心の中に入り込んでいった。

酒吞童子をはじめとする鬼は古来からの土着の神の象徴であり、都の人々にとっては悪者であり、仏教や陰陽道などの信仰にとっても敵であり、妖怪であった。

退治される側の酒吞童子にとってみれば、自分たちが昔からすんでいた土地を奪った武将や陰陽師たち、その中心にいる帝こそが極悪人であったといえる。

酒吞童子は最期に「おのれ、凶ったか。鬼は決して人をだましたりしないものを」と言ったといいますが、この酒吞童子の最後の叫びは、土着の神や人々の更には自然そのものが征服されていくことへの哀しい叫び声であったのではないかとされている。

## 3. 酒吞童子に『Iron Road 和鉄の道』を重ねて

先にも示したごとく 大江山周辺の大江山や由良川の流域は古くから渡来人が日本海を渡り住み着いた文化先進の地であり、そしてこの奥深い大江山は都から丹後へ至る交通の要衝であり、難所でもあった。古代 朝鮮半島から日本海を渡り 日本へ持ち込まれた鉄は山陰の諸国で加工され、都に運ばれていった。また、その後製鉄の技法が伝えられるとそれら山陰の諸国は古代鉄の一大生産基地として勢力を進展。この鉄の覇権をめぐる日本統一を勧めつつあった畿内の勢力とこれら鉄の大王国との抗争が鬼伝説を産んだとも考えられ、その一大抗争があった地の一つが、丹後の国であったと想像される。

酒吞童子の祖先がヤマタノオロチを祭る一族から生まれたとする伝説 また酒吞童子の生誕・居所と関係深い土地として伝承されている近江・伊吹 越後・弥彦や丹後・大江山 などは修験道・山の民と深く結びつくばかりでなく、古代製鉄の民と極めて強い関連を持つ土地でもある。

この「鉄の道での覇権争い」が「大江山 鬼伝説」となり、それが、酒吞童子説話へと展開していったと考えることはあながち幻想とも言いがたく、『和鉄・たたら』のロマンを追うものにとっては一層そのロマンをかきたててくれる。

山陰鉄の大王国 奥出雲・伯耆そして丹後 この大陸から日本海側を通過して大和・畿内へと続く山陰の『iron road』で起こった鉄の覇権争いがその土地土地で『鬼伝説』を残し、日本誕生へとかわっていったのではないかと・・・

2001.9.7. 大江山の鬼 に 和鉄の道・遠き古代を夢見つつ

## 7.

## 『日本人 はるかな旅 日本の源流』展を見て

ルーツの旅に現代を重ねて

japan01.htm by M.Nakanishi 2001. 10. 10.



「日本人 はるかな旅 日本の源流」展

**国立科学博物館の正面にはニューヨーク貿易センタービル爆破テロの犠牲者への弔旗がかかげられていた。**

**本当にむなしい出来事 人類の長い歴史の智恵で克服できないものであろうか**

NHK で『日本人 はるかな旅』シリーズが始まっている。また、これにあわせ東京・上野の 国立科学博物館で『日本人 はるかな旅』展も始まった。

数百万年前 人類の祖先が誕生し、立ち上がって歩き出したその二足歩行の足跡が 350 万年前のアフリカの大地に記されている。その足跡化石が公開展示されていました。『ルーツのルーツ』に思いひとしお。

アフリカで誕生した人類がその後地球寒冷化の中、凍りつく大地を獲物・温暖の地を求め 遠くアジア大陸を渡り シベリヤを経由して 3 万年前 樺太・北海道・本州へと日本にやって来た原日本人。また、凍りつくアジア大陸の中、海面の低下により地続きの温暖の地となったマレーシア・インドネシア地域(スンターランド)から、2 万年前黒潮に乗って沖縄・鹿児島を経て日本にやって来た縄文人。落ち着いた気候に変化したこの長い縄文時代から弥生時代じょうにかけ、海や海峡をわたり朝鮮や大陸から日本にやって来た渡来の民。 これら日本列島へやって来た人たちが混じり合っ出来上がった日本人。

『日本人のルーツ・日本誕生』について、多くのロマンを込めて色々語られてきたが、そのベールが今ひとつ一つはがされつつある。

最近の遺伝子解析などの成果は数万年前の日本人のルーツの物語のみならず、『人類誕生の 35 万年前の姿』までもを生き生きと浮かび上がらせている。ビックリするような話であるが、いずれも根拠と立証がなされつつあるのが素晴らしい。

この展示をみていると『日本人は島の単一民族』などという考えは全く根拠を失ない、まさに『人間みな兄弟・地球人』の感がふつと浮かんで来る。



アフリカ タンザニア

360 万年前の人類の先祖が印した  
二足歩行足跡の化石  
おとなと子供の二人連れか  
「日本人はるかな旅」展で



人類進化の歴史

猿人・類人・原人から新人(現代人)へ  
茨城県立自然博物館 展示より

また、視点を厳しい環境を生き抜いてきた人類 35 万年延々と続く『知恵と技』に変えると「本当にまあ、よくこの激変する環境をのりこえてきたものだ」と感じる。今を激変の時代と捕らえているが、そんなものちっぽけに見えてくる。

縄文人は決して野山を駆け巡る野蛮人ではない。世界 4 大文明にも匹敵する『木の文化』を咲かしている。巨大な木を切り倒しそれを加工する技術は延々と今に続く日本の木の文化の支えである。

北の縄文の民三内丸山遺跡では巨大な木を加工する技を持ち、大きな集落の定住生活を栗などの木の実など植物栽培で成し遂げている。おそらく延々と栽培植物を捜し求め、やっと行き着いた結果であろう。

DNA 分析が栽培をうらづけている。

鹿児島の上野原縄文遺跡で発見された大量の平底土器は三内丸山縄文人の祖先たちが土器と火を使ってどんぐりなどの木の实を貯蔵・灰汁抜きをする事でその主食を狩猟肉食から植物へ拡げていった先駆の知恵であり、世界で一番早い平底土器使用と言われている。

この狭い日本列島での人口増ときびしい環境変化を知恵と技で生抜き、次々と素晴らしい技を生み出してきた祖先たちの姿が人類-日本人のルーツの中に位置付けられている。

1 天才の出現というより、その時々の人達が延々と技術を作り継承・改良してきた「人の技と智慧」。

「必要は発明の母」とよく言うが、現代に置き換えても本当に「素晴らしいアイデア」である。

でも これらの技は開発・改良に数百年・数千年という長い時間をかけた伝承・改良によって成し遂げられた技術でもある。原始航海術など現代においても「解明できていない謎」も多いがこれらも同じだろう。

現代のあくせくするスピードと付け焼刃的な対応「一夜にして変わる価値観」の連続多様化の時代 飽食の時代 機械文明の時代 といわれるが、何か満たされないこの現代を乗り越えるヒントがあるように思う。



いつも 技術革新に遅れまいとあくせくし、脅迫観念にとらわれている現代。何か毎日がちっぽけで、「生き方かえなあかんのかあ・・・」との不安感にさいなまれる現代。  
天才でもない人それぞれが今もコツコツと歴史を刻みつづけている。この刻みが何千年・何百万年か先にまで受け継がれ、平成の技として刻み付けられていると思うと元気が出てきます。  
こんな事が DNA 分析なんかで判るようになってきたこと全く知りませんでした、ビックリです。  
現在の日本人は「縄文人/弥生人いずれに近いか?」を顔分析から分析した結果も DNA 分析もほぼ「3 対 7」の比率だそう。 おそらく 耳の中の湿り具合なんかの分析もそれにちかいのではないだろうか・・・『蒙古斑はどうなんだろうか・・・』なんて想像が随分現実味を帯びて考えられる。  
「沖縄県人だ」「東北人」「はたまた京都の公家の出。 気質が違う」などと言ってみてもすべてこのルーツ日本人のかごの中で揺れているのにすぎないのか・・・・。そういえば、生き別れた親子の確認の手段に DNA 鑑定が使われるのも納得。  
今まさに起こっている戦争も貧困と飢えに苦しむ南北問題も 先を急ぐのではなく ルーツをベースに基へ基へとたどってゆけば、和解の道 協働の道がひらけるのではないか・・・  
共同の土俵へのアプローチこそ 350 万年前から延々と続く人類の知恵と技ではないか・・・・  
これを逸脱すると破滅への道 そんな風に思う。

技術屋では行き詰まった時は『原点に帰れ』とよく言うが、今がこれだろう。  
また、この流れを解き明かしてきた分析・計測法の進歩が時間の壁を次々と取り払っている。  
木に刻まれた年輪による年代計測法 放射性炭素 C14 による年代計測法など『時間を解き明かす計測法』と『ルーツ・伝承を解き明かす方法』としての DNA 分析等。  
これらの急速な進歩によって、今を想像だにできなかったことが、次々と解き明かされている。  
発掘で今の世に出てきた冷たい物としての道具や遺構が生き生きと人の姿 生活 生き様など時代時代の姿をふつふつと浮かび上がらせている。  
立証の手段を持つ事が物事を次々と深くつき進め、あいまいさを取り去って物事を前向きに前進させてゆく。  
人類がたどってきた足跡人類が生き延びてゆくためのアフリカからの壮大な旅 厳しい自然・環境変化との戦いの流れの中で会得した知恵・技の数々。何気なく暮らしてきた我々の中に引き継がれてきたそれらの大きさにビックリする。『本当にお互いに相容れないのでは・・・』と感じてきた肌の色さえも人類が環境対応の中で取得した知恵・技である。  
『森の民 縄文人』といわれるが 森に手を入れ住める環境に変えつつ森を住処にしてきたわけで、うっそうとした原始林の中に住んでいたわけでない。決して原始の森は人間がすめたものでない。  
縄文の『ストーンサークル』が作られた静寂の森の中に感じだ息遣いがこの人類がたどって来た足跡と知恵であったような気がする。

日本人はるかな旅 日本人の源流展をみて 歴史の流れと今を行き来しつつ

2001. 10. 10. 夜 暗闇を突っ走る東北新幹線の中で

## 岩手県 北上川流域 の 和 鉄

## 8.

蝦 夷 の 主要武器 「蕨手刀」

日本刀 の ル ー ツ 「舞草刀」 を訪ねて一関博物館へ

2001. 10. 11, ktkmi01.htm by M. Nakanishi



一関市立博物館 一関市巖美溪

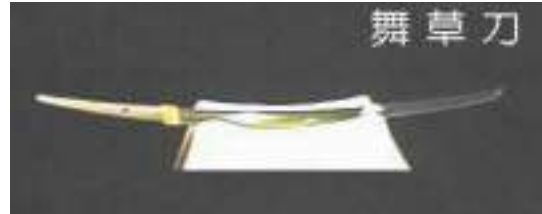


宮城・岩手の国境にそびえる栗駒山 2001. 9. 22.

## 古代 奥州で生まれた日本刀のルーツ



蕨 手 刀



舞 草 刀

## 8.1. 北上川流域の和鉄



岩手北上盆地から太平洋(右側) 栗駒山頂から 2001. 9. 22.

10 月半ば 一度訪問したいと考えていた北上・一関を訪問仙台をでて約 30 分 新幹線が広い宮城平野を抜け 右手に栗駒山・栗駒高原を背後にした広い田園地帯が広がる。栗駒山・焼石岳などの連なる奥羽山脈と北上山地にはさまれた広い田園地帯で、岩手県の母なる川「北上川」がその中央部を北から南へ流れ下る川沿いに南から北へ一関・平泉・水沢・江刺・北上・花巻・盛岡と点々と街が続く北上地方である。

ここは この山間は古代から鉄や金などの鉱物資源が豊富な土地で、古代 奥州・蝦夷 が活躍した根拠地。蝦夷の首領「アテルイ」が「蕨手刀」を武器に大和朝廷に最後まで抵抗した土地である。

水沢・江刺の北上川の東には奥州征伐の前線基地 胆沢城跡が残る。そして、中世 一関・平泉では金や鉄など豊富な鉱物資源を背景に藤原三代が栄華をほこった。

また、「鉄の国 岩手」を支える鉄の中心は「南部」久慈から釜石へかけての海岸地帯であるが、古代・中世にはむしろその中心は北上川沿いの盆地であると聞く。 蝦夷の兵器庫・鍛冶部がどこにあったの

か 自分は知らないが、蝦夷が使った「蕨手刀」。

それまで「突き」が主体の「直刀」であった刀に対し、「切る」ことを主に「反り」をつけた「蕨手刀」が、猛威をふるった。その後 中世この蝦夷刀鍛冶の伝統を受け継いだすごい刀「舞草刀」がこの土地（一関近郊 舞草）で生まれた。この刀が「反りと長身」を有する日本刀のルーツだという。

盛岡の岩手県立博物館には「奥州 和鉄」の多くの資料がありそう。また、一関博物館には「奥州鍛冶」や「蕨手刀」の展示があると聞き、是非一度ゆっくり訪ねたいところだった。

何度も東北新幹線では通るもののゆっくり歩いた事なし。一関・平泉に出掛けたのはもう 30 数年前。栗駒岳登山と引っ掛け、一関へ。また 10 月 11 日秋の溶接学会出席の帰りに盛岡岩手県立博物館そして現在の岩手一の工業都市北上にもよって帰りました。

一関博物館では蝦夷の首領アテルイが使った「蕨手刀」や古代奥州鍛冶の流れ 日本刀の原型「舞草刀」を知ることができました。また、奥州の和鉄製造に広く使われたと言う主要原料「餅鉄」。聞いた写真で見たことはありますが、まじかにみるのは初めてでした。ましてや 川などから得られ、そのまま製鉄原料として使われていたなど知らず。実際に物を見て、本などに書かれている事など理解出来ました。

北上川沿いに新幹線が走るたびに 一度は下車して調べて見たいとおもいつづけていた「和鉄の北上地方」「蝦夷と蕨手刀」と「餅鉄」。この二つの不思議な謎がやっと解けたような気がします。

今度は岩手のもう一つの和鉄の中心地 釜石から三陸海岸沿いに久慈まで歩きたい。10 数年前 後背地北上山地の圧倒的な木々の多さと海岸の陰しさに圧倒されながら歩いた和鉄の道。当時は全くみむきもされなかった和鉄の道ですが、今はどうなっているのだろうか????。

10 数年をへて 日本の近代製鉄業も変わりつつあり、また、日本各地のたたら遺跡が日本歴史の 1 ページとして掘り返されつつある今 どんな風になっているか 楽しみでもある。

2001. 10. 21. M. Nakanishi

岩手県 北上川流域 の 和 鉄

## 8.2. 一 関 市 立 博 物 館 で

ktkmi02.htm by M. Nakanishi



1. 餅 鉄
2. 蝦夷の首領 阿弭流 為の蕨手刀
3. 舞 草 刀
4. 参 考
  1. 古代畿内勢力の蝦夷征伐の兵器庫  
福島県原町 金沢製鉄遺跡
  2. 平泉中尊寺・盛岡 岩手県立博物館





## 1. 餅鉄

古代東北地方で産出した粒状・塊状の磁鉄鉱で主砂鉄や鉄鉱石と共に蝦夷が使用した要鉄資源。  
 (平均2キロ。1個で50キロのものもあるという。)

餅鉄は破碎を必要としない粒状のものもあり、主に河の中などに堆積しているが、山道や耕地にもある。金属状の光沢があるので採取しやすい。特に岩手県釜石付近の餅鉄は純度が高く、鉄分含有量が平均70%。特にリンやイオウなどの不純物が少ないなど良質。

北上で後年出土した「蕨手刀」の製鉄原料として この「餅鉄」を原料として精練・鍛冶されたものが多数ふくまれているといわれている。

## 2. 蝦夷の首領 阿弭流為の蕨手刀



蕨手刀は5世紀末には既に製造がはじまっており、奈良時代後期を中心にして、奈良時代前期から平安時代初期にわたってつくられたもの。特に北上の胆沢と和賀が拠点とみられ、餅鉄や砂鉄を原料につくられた。この頃大和朝廷の奥州征伐に対して、激しく抵抗した蝦夷の主要武器として威力を発揮した。蝦夷の首領阿弭流為の蕨手刀は66cmぐらいあったという。



現在鹿児島や徳島まで180刀発見されているが、岩手が57刀と断然多い。奈良の正倉院にもこの「蕨手刀」がある。

一関市立関博物館 展示より

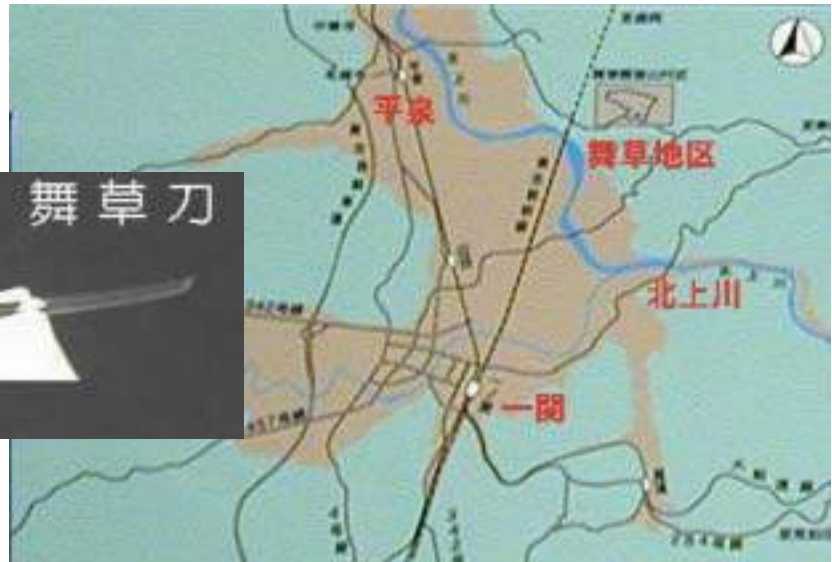
「奥州でいつ鉄の加工鍛冶・精練がはじまったのか？」は定かでないが、700年文武天皇の製鉄禁止例「東辺北辺に鉄冶を置く事得じ」との令がでて、蝦夷の武器作りに大和朝廷が神経質になっていた事が記されている。

この事から かなり古くから鉄の加工・鍛冶精練が始まっていた事がうかがえる。おそらく 大陸・朝

鮮半島からやって来た渡来人を通じ、鉄鍛冶の技術が伝えられていたのであろう。

この禁止令が出た頃 奥州には渡来人の刀匠(漢国鍛冶)がいたことが記録されている。そして この奥州の鉄鍛冶・刀作りの優秀性は奈良・平安時代都にも広く伝わり、奥州刀が都に広く持ち込まれている。一関郊外の「舞草」はその刀鍛冶の中心の一つとして、蝦夷が滅んだ跡 蕨手刀を改良して長身で反りのある刀「舞草刀」を作った。これが、日本刀のルーツとして奥州鍛冶とともに日本全国へ伝播していった。

### 3. 舞草刀



## 舞草刀 一関市

一関市を流れる北上川の東側にある舞草地区  
ここには鉄落山はじめ、刀鍛冶伝承や地名、  
信仰された石像などの平安時代に栄えた舞草  
刀鍛冶の痕跡が残っている。  
この地の鉄落山の南斜面から平安時代の土器  
とともに鉄滓が出土しています。  
刀身が長くて反りのある日本刀の原型がこの  
舞草など奥州で作られ都で評判になった。  
その後 藤原氏の衰退などで舞草など優秀な  
奥州の刀鍛冶が各地に散らばり、この特徴あ  
る刀作りが日本刀の原型として拡がっていった。  
蕨手刀を改良した舞草刀。舞草は日本刀の故郷







## 4. 参 考

### 1. 古代畿内勢力の蝦夷征伐の兵器庫 福島県 原町 金沢製鉄遺跡

【 黄金吹く 「行方製鉄遺跡」 】



### 2. 「一 関 ・ 平 泉」 点 景



一関 美 滝 と 一関博物館 一関 美 滝



平泉 中尊寺 金色堂

中尊寺から 前九年の役 古戦場 2001. 9. 22

### 3. 岩手 盛岡



岩手県立博物館 岩手山を望む



盛岡の夜景と旧岩手銀行本店 2001. 10. 11

## 9.

## 2000 年前 中国から日本へ持ち込まれた中国製鉄斧

約 2000 年前 弥生時代

高度な表面脱炭処理 鉄の強靱化熱処理伝来のルーツか？

古代 7 世紀 丹後遠所製鉄遺跡での「高チタン砂鉄によるたたら」製鉄は現在の溶接材料に通じる技。びっくりしましたが、先日 姫路兵庫県歴史民俗博物館での村上泰樹氏「兵庫の鉄」講演の中で起源前の弥生遺跡から発見される中国大陸伝来の鋳物製鉄斧では 表面をネバクするため脱炭の熱処理が施されている事知りました。（例えば 福岡県比恵遺跡鉄斧など）

また、低温加熱して鍛錬することで不純物や炭素を飛ばし、強靱化する技術（錬鉄）も既に紀元前にあったという。

後年の日本刀に見られる鍛錬技術や硬い鉄とねばい鉄のハイブリッド化技術のルーツがここにも見える。これらの技術も古代から連綿と現在に続く『鉄の技』・『先人の知恵』



高度な熱処理による脱炭表面処理がなされた中国製の古代 鋳造鉄斧

石器時代 黒曜石などガラス質で鋭利な癖開面を出す事が出来る小型の剥離石器の発明が人間の移動を可能にし、アフリカで生まれた人類大発展の起爆(特にシベリア・日本への移動。原日本人の形勢)の一つとなったといわれる。

鉄器についても一口に『日本 鉄器伝来』といわれるが、その鉄器とともに付帯するさまざまな技術が持ち込まれ、鉄器の使用のみならず、社会・文化変革の技術を提供し、更なる発展と日本形成に大きな役割を果たしていったといえる。

上記の弥生時代の中国製鉄斧にも、人類繁栄を作った近代鉄加工技術のルーツの一つが見える。



「鬼伝承」の「鬼」は本当に「悪者」か・・・？

2002.2.3. joni.htm by M.Nakanishi

2002年2月3日 節分。

例年になく暖かい節分である。今年も各地で節分の行事として「鬼追いの豆まき」行事が行なわれている。

日本各地で広く鬼伝説が伝承されている。この鬼伝説には 古代「産鉄の民」「鉄の技術を伝えた渡来人」など「古代製鉄の日本伝来」と密接な関係があり、「鬼伝説」のあるところ「古代たたら」の地であることが多い。

「鬼伝承」の「鬼」は本当に「悪者」か・・・？

鬼伝承が「古代 和鉄鉄」とかかわっていたとしたら「鉄とかかわっていた者はみな 悪者か・・・？」

「そんな事はない。・・・」

「古代たたら」製鉄には「山を崩して その砂を川に流して砂鉄を得、また 大量の樹を切って炭を作る」つまり 山を丸裸にし、川を荒らし、汚染することがつきもの。

平野部の「農耕の民」と「産鉄の民」の争いがこのような「鬼伝説」となって伝承されているといわれる。また「産鉄の民」がもたらした「鉄」は「農耕具・武器」として圧倒的な威力を発揮。その支配をめぐって多くの部族・国が争い、多くの伝説を産んできた。

「鬼伝説」を伝承する側の立場で好きなように伝承された為にすべて「鬼退治」になってしまったのか・・・

日本に伝わる「鬼退治」伝承の多くが、いつも「だまし討ち」であったことは「鉄を有する民の勢力」がいかにか大きかったかを物語っている。抗争の中でこれらの勢力を取り込みつつ古代日本が形成されていったのではなかったか・・・。日本形成に果たした役割はむしろきわめて大きく、このことが「鬼伝説」がこれほど多く、また「今も親しみを持って 語り継がれている」理由でなかろうか・・・。また、青森県津軽 古代製鉄の郷 岩木山北山麓の弘前市鬼沢には「村人を助けた鬼」の伝承が伝わっている。今も節分には「福は内 鬼も内」と豆をまき、夏の「弘前ねぷた」には里を挙げて「鬼沢のねぷた」が街を練り歩く。今も里人に広く親しまれている。

節分の今日 日本各地に伝わる「鬼伝承」を「Iron Road 和鉄の道」を支えた人の群れと捕らえて整理をしてみました。

「古代産鉄の民」として日本の源流を作った「鬼」。日本の「鬼」バンザイの気持を込めて

2002.2.3. 節分 M.Naksanishi

### 日本各地の鬼伝説 リスト

1. 伯耆国 孝謙天皇 鬼退治伝説 鳥取県 溝口町  
日野川流域 楽楽福神社の伝承
2. 北上の鬼 蝦夷の雄「アテルイ」 岩手県一関・胆沢  
坂上田村麻呂の蝦夷征伐
3. 丹後国 大江山酒天童子伝承 京都府 大江町
4. 吉備国 「桃太郎伝説」の鬼ヶ城 岡山県総社市
5. 青森県 岩木山(巖鬼山)山麓の鬼伝説 青森県弘前市・鱒ヶ沢市

# 1. 伯耆国 鳥取県 溝口町 孝謙天皇 鬼退治伝説

楽楽福神社の伝承

伯耆の国日野郡溝口村の鬼住山に悪い鬼 が沢山住み着いていました。

この鬼達は近くの村々に出ては人をさらったり、金や宝物・食べ物を奪って人々を苦しめていました。これを聞かれた孝霊天皇は、みずから軍勢を率いて鬼住山の南のこれより少し高い笹苞山(さすとさん)に登り、鬼住山の鬼達をことごとく退治されました。

天皇が山に登り、布陣された時、人々は笹巻の団子を献上し、士気が大いに上がったといえます。それで、この山を笹苞山(さすとさん)とよぶようになりました。

鬼をおびき出す為、山麓の赤坂というところに団子を三つ並べたところ、弟の鬼『乙牛蟹』が出てきて討たれました。兄の『大牛蟹』は大いに怒り、手下を束ね一層暴れ、容易に退治することが出来ません。ある晩 眠っている天皇に笹の葉を刈って山のように積上げなさい。そうすると風が吹いてそれらを舞い上げ、鬼を遅い退治出来るでしょう」とのお告げがあった。

これを聞いた天皇がその通りにすると三日目の朝、猛烈な南風が吹き、積上げた笹を「あれよあれよ」と鬼の住処の方へ、巻き上げて行きました。天皇はここぞとばかり、全軍を叱咤して舞いあがった笹の後に追い、鬼退治に向かいました。

笹の葉に巻きつかれ、また枯葉が燃え、鬼達はなすすべも無く、麓に逃げて降参 しました。

人々は大変喜んで麓宮原の地に笹で社殿を吹き天皇を祭りました。これが楽楽福(ささふく)神社のいわれです。

-楽楽福神社 古文書より-



大山山麓の「伯耆 溝口」は古代伯耆の国の一大製鉄地帯。

中国山地の山奥から流れ出て大山の山麓を縫い日本海へ流れ出る日野川。この日野川が大山の山裾から平野部に出る山合が伯耆溝口。この日野川沿いの山中は砂鉄の宝庫。この溝口の地では古代から、この川や山中の砂鉄と山中の樹木を焼いて作った木炭を使って、製鉄が広く行われてきた。

この山間の溝口を抜けるとそこは大山をバックに日本海まで、淀江・妻木の平野・丘陵が大きく広がっている。

この淀江の地は古代より、大陸から多くの渡来人がやって来て栄えた王城の地。

## 2. 北上の鬼 蝦夷の雄「アテルイ」

東北・北上地方 多賀城・胆沢城・秋田城遺跡



## 3. 丹後国 大江山酒吞童子伝承

京都府 大江町



801年、蝦夷征伐の本拠地として現水沢市に造った胆沢城（後の鎮守府）

「勇猛果敢な蝦夷の雄「アテルイ」は坂上田村麻呂率いる10万の大和朝廷軍を長年にわたり翻弄。「ヒタカミ（北上）の鬼」とおそれられた。多年にわたる戦いで兵力も次第に減少し、田村麻呂を信じてこれ以上の抵抗をあきらめて降伏。500の兵を連れて都に連れてこられたが朝廷は田村麻呂必死の懇願に関わらず斬首してしまった」という。

この一関・北上の北上川流域は豊富な鉄・鉱物資源を背景に東北で一番先に開けた地。金を背景にした藤原三代の栄華。

蝦夷の刀「葺手刀」を発展させ、日本刀の源流奥州鍛冶の伝統を作った「舞草刀」

ここも和鉄の故郷である。

大江山に住む酒吞童子ほかの多くの鬼たちが都を荒らしまわっていた。

源頼光はこの鬼退治の為配下の四天王と呼ばれる渡辺綱・坂田金時・碓井貞光・ト部季武などを引き連れ、大江山へ。

頼光たちは鬼の城に泊めてもらったお礼に酒を差しだして鬼たちと酒盛り。夜になると、頼光らは起きだして酒吞童子のそばに近寄り、一気に首をはねた。

酒吞童子の首ははねられたまま頼光に飛びかかり、その兜にかみついたまま動かなくなった。酒吞童子は最期に「おのれ、図ったか。鬼は決して人をだましたりしないものを」と言った」という。

大江山の北側にある丹後の国は古代鉄の王国。特に大江山近傍の山並から流れ下る野田川・竹野川流域は古代遺跡と共に製鉄遺跡が点在する一大製鉄地帯



## 4 吉備国 「桃太郎伝説」の鬼城 99.5.29.

「真金吹く 吉備の中山 帯にセル 細谷川音のさや今朝」

”真金吹く”は吉備の枕詞。鉄の時に飛び散る火花を象徴している。

また、古墳の副葬品として鉄製品が出土（岡山市の神宮山古墳や金蔵山古墳）している。



鬼ヶ城から吉備の中山 児島湾を望む

「真金吹く 吉備の中山・・・」と歌われた吉備は 大和に対抗する古代王国があった所であり、かつ古代製鉄の発祥の地の一つ現在の総社市を中心とした吉備地方には古代遺跡・古代製鉄遺跡が目白押し。また、この地には「桃太郎」伝説の源流となった「ウラの鬼伝説」がある。

吉備の平野部から山にかかる所 吉備平野を一望出来る山の上に古代朝鮮の様式で作られた「鬼ヶ城」がある。詳細はまだ良くわかっていないが、古代 大陸からの進入に備えた砦だとも、この砦が「桃太郎の鬼退治」伝説の鬼ヶ城とも伝えられている。頂上に立つとその下の平野

には現在の総社市と古代吉備の国の数々の遺跡が広がり、直ぐ下の丘陵地帯の川筋からも「たたら遺跡」が発掘され 鉄穴流し場などが整備された自然公園となっている。

また、この総社の地の後背の山並みの中には、鬼の住む山としてもう一つ「鬼ヶ城山」がある。



総社市郊外にある「鬼ヶ城」遺跡 99.5.29

桃太郎伝説の原型 温羅伝説 温羅の居城と伝えられる「鬼ヶ城」

## 桃太郎伝説の原型「温羅伝説」

備中国 新山（にいやま、今の総社 市奥坂）に居城を築き西国から都へ通う船を襲っては人を殺め、財宝を奪うなど、数々の悪事を働き、人々は温羅を「鬼神」その居城を「鬼ノ城」と呼んで恐れていた。温羅の悪行にたまりかねた人々は和朝廷に温羅退治を申し出た。

武勇に優れた五十狭芹彦命（のちの吉備津彦命）。命は大軍を率いて吉備の中山に陣を張り、片岡山（倉敷市矢部）に石楯を築いて戦った。

合戦の時 命の放った矢は、鬼ノ城から温羅が投げた岩と 空中でぶつかり合っては落ち、なかなか勝負がつかない。そこで命は一度に二本の矢を放つと一本は温羅の投げる岩とぶつかり合い落下したが、もう一矢は温羅の左目に命中。温羅の左目から吹き出した血は血吸川

（総社市）に流れ、下流にある浜をも真っ赤に染めた。今その地は赤浜と呼ばれている。

命に追われた温羅は色々姿を変え逃げまわったが、とうとう命につかまり首をはねられた。ところが、その首は土中に埋めるなど色々手を尽くしたが、13年間もうなり続けた。

ある夜のこと、命の枕元に温羅が立ち「わが妻、阿曾媛に神饌を炊かしめよ。これまでの悪業の償いとして、この釜をうならせて世の吉凶を告げよう。」と。これが今に伝えられている吉備津神社の鳴釜神事である。



古代遺跡が広がる吉備国 ー鬼城からー



「桃太郎」伝説の吉備津彦神社

この桃太郎伝承・鬼伝説をどう読むか

温羅が朝鮮半島の百濟または新羅の王子としたら、この温羅一族は鉄の技術を持って日本にやってきて、吉備の和鉄の技術を展開した産鉄の民と考えられないか……。出雲のスサノオ伝説がスサノオノミコトを新羅の王子として伝承しているのと同じかも。確証はないが……

伝承を和鉄と重ねると良く符合して理解できる。大和朝廷が直接支配したかった吉備の和鉄。この鉄の覇権をめぐる吉備と大和との戦いがこの温羅伝説であり、桃太郎伝説と言えまいか。



吉備津神社の鳴釜神事の伝承と結びつけ、吉備にとって温羅は「鬼」ではなく 吉備繁栄をもたらした恩人であり、吉備の人達の思いを大和朝廷が無視できず、吉備津神社造営がなされたと考えている人もいる。

吉備の枕詞「真金吹く 吉備の中山・・・・・・」と歌われた古代の大製鉄地帯 吉備を舞台に鉄の派遣を巡っての戦い・しいては日本誕生のため 吉備で展開された大ドラマ それが「桃太郎」伝説ではないか・・・

鬼ヶ城の上に立ち、眼下に広がる吉備の古代遺跡 製鉄の中心だった中山の丘陵地を眺めながら、この温羅の伝説に思いをはせました。

## 5. 青森県 岩木山（巖鬼山） 山麓の鬼伝説

青森県 弘前市・鱒ヶ沢町

岩木山北山麓から鱒ヶ沢へ流れ下る赤石川・鳴沢川の流域は古代からの製鉄地帯であり、また、岩木山は「巖鬼山」の名が示すとおり、多くの鬼が住んでいたとされている。

山の麓にはその元締めとして岩木山を信仰の中心とした巖鬼山神社・岩木山神社や鉄製品を祭る鬼神社など数多くの鬼伝説を伝承する郷が点在する。

### 1. 巖鬼山の鬼伝説が広く伝承される鱒ヶ沢



岩木山 北麓示倉口より



鱒ヶ沢へ流れ下る赤石川



岩木山北麓 十腰内 原生林の中 巖鬼山神社

鳴沢川の上流 原生林に包まれた巖鬼山神社の近くの郷鱒ヶ沢市十腰内には「この地の長者の娘に恋をした鬼が 長者の命で不眠不休で十二本の刀を打ったが、娘をやりたくない長者が その内の二本を隠し、結局 娘をもらえず、刀が十本しかない(十腰内)といいながら山に帰っていった」

という鬼伝承が在る。また、この地には古い製鉄地名と共に古代製鉄遺跡が幾つか発見されている。



## 2. 鬼神社と鬼沢の鬼伝承

## 弘前市鬼沢



また、岩木山北山麓の弘前市鬼沢には「村人を助けた鬼」の伝承が伝わっている。

「早魃で田畑が荒れて困っている村人を見て一夜にして水路を作り水をひいて山に帰っていった鬼  
今も節分には「福は内 鬼も内」と豆をまき、夏の「弘前ねぶた」には里を挙げて「鬼沢のねぶた」が  
街を練り歩く。」

また、この鬼沢の森の中にひっそりと鉄製品の献額を多数かかげた鬼神社がある。

今も里人に広く親しまれている「鬼の里 鬼沢」である。

「鬼」伝説 討たれる方の「鬼」には何か物悲しさと後ろめたさがついてまわる。  
古代から今まで色々な形で表現され、伝承されてきた鬼のさまざまな形態を見ると上記しさ  
「物悲しさと後ろめたさ」の裏にあるのはなにか・・・？  
日本人にとって「鬼」は「悪者」というより、愛すべき存在でなかったか・・・？。  
支配者に対して 必死に抵抗した「弱者」の代表ではなかったか・・・？

この鬼を古代日本に製鉄技術をもたらした「産鉄の民」とすると日本誕生のドラマはこの「産  
鉄の民」をはずしては語れない。しかし、伝えられた鉄の技術により、争いが一層激しい  
ものとなり、強者・弱者が生まれてきたのも事実。

現代の文明においても鉄を語る時 この二面性を常に持っていると言えまいか・・・

「鬼」伝説や伝承が色々変化して多数語られ、表現されるのもこの二面性ゆえ、また伝承の  
なかでも、知らず知らずこれを感じているといえまいか？

## 「真金吹く」吉備の国

「真金吹く 吉備の中山 帯にせる 細谷川のおとのさやけさ」



古代 吉備国 総社市 「鬼ノ城」より遠望 99.5.29.

「真金吹く」吉備の国 吉備の鉄と桃太郎伝説

1. 稲作と鉄器の伝来が縄文の智恵と融合して原日本がつけられた
2. 古代 吉備の国 「鉄」そして「鬼」
  - 「弥生の`暮らし」を持たらした大陸からの渡来人  
- NHK 「日本人遥かな旅」より -
  - 古代 吉備の国 「鉄」そして「鬼」
3. 吉備の国「桃太郎伝説」の原型となった「温羅・うら伝説」
  - 参 考 日本 鬼伝説

「真金吹く」吉備の国 吉備の鉄と桃太郎伝説【1】

1. 稲作と鉄器の伝来が縄文の智恵と融合して原日本がつけられた

kibi0.htm by M.Nakanishi 2002.3.2.



吉備は後の時代に歌われた  
「鉄」と「桃太郎の鬼退治」  
伝説の国

「真金吹く」は  
吉備の枕言葉で鉄精錬で飛  
び散る火花の様を言い表し  
ている。



鬼ノ城から眼下に広がる古代吉備の国を遠望

眼下総社市の平野の向こうに吉備の中山から古代造山古墳ほか  
数々の遺跡そして四国の山並が眺望

岡山県総社市の背後にある丘陵地帯吉備高原南端の丘の上にある「鬼ノ城」に立ち、南を見下ろすと眼下には総社の市街・田園地帯が広がり、その向こうに点在するいくつかの古墳と丘陵地が見え、さらに児島半島を経て瀬戸内海・四国の山並がみえる。眼下に広がるこれらの地は古代吉備の国の中心地。

古代この総社のあたりまで内海が入り込み、古墳・丘陵が点在する。その一番左岡山よりの丘陵地が吉備の中山。眼下に広がる平野は古代吉備の国のまさに中心。

古代 朝鮮半島から北九州・瀬戸内海を通して大和へ至る大陸文化交流の道の真中にこの吉備の国

がどっしりと座っている。 渡来の民によって持たされた製鉄の技術がこの吉備の国に根付き、この古代鉄の一大生産地の覇権をめぐる諸国が争い、その覇権を握った大和を中心として日本が誕生する。

「吉備国の鉄の覇権をめぐる争い」「日本誕生前夜の鉄の争い」が「桃太郎の鬼退治」でなかったか……吉備の国に残る「鬼ノ城」とそこに伝承されている「温羅」伝説が「桃太郎の鬼退治」の元になったと言われ、この「Iron Road 和鉄の道」上での一大ドラマを描いているのではないかと……。

もっとも 現存する鬼ノ城の発掘調査からは7世紀後半大陸からの侵攻に備えて造られた多数の山城の一つと考えられている。しかし 公式にはこの「鬼ノ城」の記録は歴史書のどこにもなく、この城は元々大和勢力とは異なる吉備勢力の造った城もしくは 秘密裏に唐の備えとして築いたとの見方もある。

(663年 倭国軍は朝鮮白村江で唐・新羅連合軍と戦い、大敗。 唐の再三の日本攻勢に怯えた日本が唐の侵攻に備えた 対応とすれば 発掘の結果は説明がつく。また、鬼ノ城のような歴史書に載っていない同時期の山城が瀬戸内海各地に約20もあるといわれている。)

吉備の国で何時「鉄の精錬製造」が初まったかは定かでないが、早くから大陸から輸入された鉄ていを加工する鍛冶が始り、その後鉄精錬も行なわれ、「真金吹く」の伝統が形成されていったと考えられる。総社市窪木薬師寺遺跡からは大陸製の鉄ていとともに鍛冶加工跡が出土している。

日本でも最古の製鉄遺跡の部類に入る総社千引かなくろ谷製鉄遺跡は6世紀後半の遺跡であり、6世紀後半には広く吉備の国で鉄精錬がおこなわれていたと考えられている。



総社市後背の丘陵地にそびえる「鬼ノ城」



備中で出土した大陸製鉄ていと鍛冶跡



## 2. 古代吉備の国 「鉄」そして「鬼」

kibi01.htm by M.Nakanishi

### 2.1. 「弥生の暮らし」を持たらした大陸からの渡来人

-NHK 「日本人遥かな旅」より-

弥生時代に大陸から北九州・山口に渡来した人々は今まで縄文人の暮らしを支えてきた狩猟・森の恵みに依存した採取の生活様式を一変させ、水田稲作により、安定した食料生産をもたらし、その人口を爆発的に増大させた。

また、森を切り開き、水田耕作を可能とする大規模な土木工事を可能とする鉄器並びにその鍛冶技術も大陸からもたらされた。(精練技術が何時もたらされたか? は現状まだ良く解らないがもっと後の時代と考えられている。)

これらの渡来系弥生人の集落はその人口を増加し、縄文人と融合しつつ東海・越前地方まで急速に東進・北進を続け、これらの中から巨大勢力・王国が生まれてくる。

自然環境が大きく異なる東海以東・以北の地方では急速には水田耕作は広がらず、従来森の恵みに依存した縄文人の世界が広がっており、東進の速度は鈍った。

しかし、この地方においても 水田稲作を学ぶ者 渡来人の移住等渡来系弥生人と縄文人が融合しあい、突如として、巨大な弥生集落が形勢され、次第に稲作弥生文化並びに鉄器の拡大と共に弥生の文化の時代に移っていった。

このような縄文の暮らしから弥生への変化が生じる過程において 日本の特筆すべき点は『相手を抹殺するのではなく 従来からいる縄文人と融合する事により、変化が進んだ』事であり、この伝統は良きにつけ悪しきにつけ、今日の日本文化にも脈々と受け継がれている。つまり、『稲作や鉄の技術等をもった渡来人がやってきて、彼らが日本を席卷し、縄文人を蹴散らして日本が誕生したのではない。』と言う事が遺伝子的にも数々の古代遺跡からの数々の遺物やその分布・伝承文化からも解ってきている。

また、最近の研究では 現代にいたるまで、日本人においては、原日本人を形成した縄文人と渡来系弥生人の融合の割合に差があることも解ってきている。

(ある地方が孤立してその系統を保っているというのではなく、日本人全体の中で、よく言われる縄文系あるいは弥生系の顔という話と同じであり、その根本には根絶ではなく、融合の中ではぐくんできた結果であると言われている。)

日本形成の根幹が大陸からの渡来人によってつくられながら、古代から今現在にいたるまで、大陸文化に同化される事なく、日本固有の文化が育まれてきた理由もこれで理解できる。

この事が理解されないと邪馬台国論争を初め、日本誕生の謎を秘めた古代は見えてこないと思われる。

その後 時期的には、弥生時代後期から古墳時代前期にあたる時期 大陸から色々な技術、銅器、鉄器などが流れ込んできた時期と重なるが、西日本では各地で巨大勢力が起こり、となり、日本誕生の前夜が形成された。



弥生後期～古墳時代 出土の鉄製武器

- |            |                 |
|------------|-----------------|
| 1. 北九州勢力   | 筑後川、有明海         |
| 2. 出雲勢力    | 斐伊川、宍道湖、中海      |
| 3. 吉備勢力    | 吉井川、旭川、高梁川、瀬戸内海 |
| 4. 伯耆      | 日野川             |
| 5. 大和、河内勢力 | 大和川、大阪湾         |
| 6. 丹後      | 竹野川、野田川         |
| 7. 越前勢力    | 白山からの九頭龍川、足羽川   |
| 8. 東海勢力    | 木曾川、長良川、揖斐川     |

これらの地域では大陸・朝鮮半島との交流の痕跡が明らかとなっており、さらには、主要な川の流域を中心に古くから鍛冶製鉄が行なわれた地域である。安定食糧である稲作による人口爆発とその水田開発工具としての鉄器製造の支配を通じ、巨大勢力 王国へと育っていった事がうかがえる。

これらの国々は互いに交易・交流すると共にさらには朝鮮半島の新羅・百済とも連携して、他の勢力を圧倒する王国に育ち、それらが並立する時代を経て、抗争・統一の時代へと突入する。日本誕生にかかわった北九州・河内・出雲・吉備・越等の国々である。

## 2. 2. 古代 吉備の国 「鉄」そして「鬼」



「吉備の中山」の丘陵地



鬼退治伝説の吉備津彦命を祭る吉備津神社と吉備津彦神社

吉備国では後に古今和歌集に「真金吹く 吉備の中山 帯にせる 細谷川のおとのさやけさ」と歌われるごとく、鉄・鍛冶生産が早くから行なわれてきた鉄の一大生産地。

大陸から北九州を経て畿内へ行く途中にある吉備では、いち早く大陸の新しい文化・技術が伝わったであろう。その中で、水田耕作・勢力伸張の大きな武器となった鉄精錬・鍛冶の技術も大きな川と内深く入り込んだ内海での豊富な砂鉄の体積を使って、この吉備の地でいち早く根付き、古代鉄の一大生産地となっていった。

まさに「真金吹く 吉備の中山 おびにせる 細谷川のおとのさやけさ」である。

”真金吹く”は吉備の枕詞であり、製鉄の時に飛び散る火花を象徴している。

また、後の時代の延喜式によると吉備は「調」として鍬や鉄を納める国として記載がなされ、中世以降も備前刀や備中鍬等の鉄製で吉備の国は、全国に知られている。

この「吉備の中山」は吉備の古墳群や国分寺跡が並ぶ総社の丘陵地に隣接する別の岡山よりの小さな丘陵地。この丘陵地の麓にも 吉備津神社 吉備津彦神社をはじめ、多くの古代遺跡がある。

吉備の持つ鉄の技術は吉備の勢力伸張の武器であると共に他の巨大化する勢力にとっても魅力的なものであり、この吉備の鉄の覇権をめぐる、連合・争いが巻き起こったであろうし、この中で吉備は出雲と同様大和の勢力下に組み込まれてゆく事になる。

この鉄の覇権をめぐる争いの伝承が「鬼ノ城 温羅伝承」つまり「桃太郎の鬼退治」の伝承であろう。

ぽかぽか陽気の中 眼下に広がる鬼の城。

「鬼ノ城」の丘に立ったのはもう随分前 99.5.29. もう記憶も少し薄れているが、ぽかぽか陽気の午後。こんな温暖の地でたとえ堅固な城であるにしても南に大きく開けた地が 「悪者の鬼の城」には似合わない。もっと 山奥か 人里はなれた未開の土地でなければ・・・。

やっぱり ここでも 鬼は悪者に仕立て上げられたのか・・・・・・・・・・

産鉄の民と支配者との争い 大和にとっては悪者であっても 吉備では良き隣人・恩人でなかったか 「鬼」「鬼」と悪者として追いまわす中に何か 親しみをこめ、「福は内 鬼は外」と豆をまく節分。

21世紀のキーワードと言われる「敵対・抹殺から融合・融和へ」鬼伝説の中にある「親しみ」もこれでないか・・・・・・・・

鉄は両刀の刃。

古代 そして日本の伝統の中に 21世紀を生き抜く解がないか・・・・・・・・・・

2002.2.24. 柏にて 鬼に親しみをこめて

by M.Nakanishi

「真金吹く」吉備の国 吉備の鉄と桃太郎伝説

### 3. 吉備の国 「桃太郎伝説」の原型となった「温羅・うら伝説」

kibioni0.htm by M.Nakanishi

#### 1. 桃太郎伝説の原型「温羅・うら伝説」

#### 2. 鬼ノ城 walk - 朝鮮からやって来た製鉄集団に思いをはせながら



桃太郎伝説の鬼が住む「鬼の城」



「鬼ノ城」から古代吉備の国を望む 99.5.29.  
左「吉備の中山」右 造山古墳・国分寺ほか総社市街



### 3.1. 桃太郎伝説の原型「温羅・うら伝説」

#### 桃太郎伝説の原型「温羅伝説」

備中国 新山（にいやま、今の総社 市奥坂）に居城を築き西国から都へ通う船を襲っては人を殺め、財宝を奪うなど、数々の悪事を働き、人々は温羅を「鬼神」その居城を「鬼ノ城」と呼んで恐れていた。温羅の悪行にたまりかねた人々は大和朝廷に温羅退治を申し出た。武勇に優れた五十狭芹彦命（のちの吉備津彦命）。命は大軍を率いて吉備の中山に陣を張り、片岡山（倉敷市矢部）に石楯を築いて戦った。合戦の時 命の放った矢は、鬼ノ城から温羅が投げた岩と 空中でぶつかり合っては落ち、なかなか勝負がつかない。そこで命は一度に二本の矢を放つと一本は温羅の投げる岩とぶつかり合い落下したが、もう一矢は温羅の左目に命中。温羅の左目から吹き出した血は血吸川（総社市）に流れ、下流にある浜をも真っ赤に染めた。今その地は赤浜と呼ばれている。命に追われた温羅は色々姿を変え逃げまわったが、とうとう命につかまり首をはねられた。ところが、その首は土中に埋めるなど色々手を尽くしたが、13年間もうなり続けた。ある夜のこと、命の枕元に温羅が立ち「わが妻、阿曾媛に神饌を炊かしめよ。これまでの悪業の償いとして、この釜をうならせて世の吉凶を告げよう。」と。これが今に伝えられている吉備津神社の鳴釜神事である。

昔話の「桃太郎」は、吉備津彦命の「温羅退治」の伝承をもとに作られたといわれます。鬼のモデルになった「温羅」は、百済から渡来した王子で、性格は荒々しく、凶悪で、身の丈1丈4尺(約4m20cm)もあったといわれている。

現在の岡山県総社市の当時は海が入り込んだ先端の切り立った丘の上にある、朝鮮式山城、「鬼の城」に住み、瀬戸内海を通る船などを荒らしまわった。そこで大和朝廷は、武勇の誉れ高い吉備津彦命に鬼(温羅)退治を命じた。昔話の中で桃太郎のお供をした犬とキジは、吉備津彦命の犬飼と鳥飼の家臣といわれ、もう一人の猿がなにかは、わかっていない。捕らえられた温羅は首を切られ、地中深く埋められ、13年間もうなり続けた。ある晩吉備津彦命の夢枕に「ワシの首を吉備津神社のかまどの下に埋めてくれ。そうすれば釜をならして世の吉凶を占おう」。こうして始まったのが鳴釜神事です。御竈殿で行われる釜鳴の神事は、お釜の鳴動の音の大小長短によって吉凶禍福を占う。古く「本朝神社考」・上田秋成の『雨月物語』にも紹介されている。



吉備津神社



吉備津彦神社

この桃太郎伝承・鬼伝説をどう読むか

温羅が朝鮮半島の百濟または新羅の王子としたら、この温羅一族は鉄の技術を持って日本にやってきて、吉備の和鉄の技術を展開した産鉄の民と考えられないか・・・。

出雲のスサノオ伝説が確証はないがスサノオノミコトを新羅の王子として伝承しているのと同じかも。吉備は真金吹く和鉄の国。この鉄の覇権をめぐって吉備と大和との戦いがこの温羅伝説であり、桃太郎伝説と言えまいか・・・伝承を和鉄と重ねると良く符合して理解できる。吉備津神社造営や吉備津神社の鳴釜神事の伝承と結びつけ、温羅は「鬼」ではなく産鉄による吉備繁栄の恩人と考えている人もいる。

吉備の枕詞「真金吹く 吉備の中山・・・・・・」と歌われた古代の大製鉄地帯 吉備を舞台に鉄の派遣を巡っての戦いそして、日本誕生の幕開けとして吉備で展開された大ドラマ それが「桃太郎」伝説ではないか・・・

鬼ヶ城の上に立ち、眼下に広がる吉備の古代遺跡 製鉄の中心だった中山の丘陵地を眺めながら、この温羅の伝説に思いをはせている

99.5.29. 「鬼ノ城」で by M.Nakanishi

### 3.2. 鬼ノ城 walk

- 朝鮮からやって来た製鉄集団に思いをはせながら



鬼ノ城山



鬼ノ城 と 鬼ノ城からの展望

総社の町の中を抜け、その背後の丘陵地帯を少し登った所(総社市奥坂)に古代の山城「鬼ノ城」がある。山あいの公園を抜けた小高い丘と丘の間の所に駐車場があり、「鬼ノ城」の立て札がある。

見あげる小高い丘そのものが城砦になっており、「鬼ノ城」。

そこから丘をまきながら小道を頂上に登り、北東の隅の城塞の頂上に達する。切り立った絶壁に、大小無数の石を積み上げた城堡が築かれ、標高四百メートルの頂からは総社市の市街と田園地帯を前に、古代における「吉備の中山」から「吉備の穴海」児島半島までがはるかに見渡せ、四国の山並みまでもが一望できる。

今でこそ内陸の城に見えるが、古代の海岸線ははるかに奥深くまで入り込んでいたらしく、海岸に隣接した「鬼が島」と呼ぶにふさわしい威容だったのだろう。「吉備津」などの地名にその名残がみられる。

「鬼ノ城」は、まさに戦略的に重要な場所に造られた古代の巨大要塞・朝鮮式山城である。「鬼ノ島」「鬼ノ城」と言うとは何か岩山の洞窟と想像していましたが、堅固な城砦で巨大な土木工事がなされた城。「鬼」



がつくった城などというものでなく、吉備の国の立派なリーダーが国を挙げて作ったものであろう。

この城が伝説の「温羅」の城としたら、吉備巨大な勢力をもった集団の居城として「温羅」伝説を「朝鮮半島からやって来た製鉄集団」と考えても良いのではないか

一説にはこの城は大陸からの侵攻に備えた城との考え方も在り、出土品等から七世紀後半から八世紀前半に機能していたとみられる。663年、日本軍が唐・新羅連合軍に敗れた朝鮮半島・白村江の戦いの後、朝廷が建設した大野城（福岡県）や屋島城（高松市）などの朝鮮式山城と構造は似ているが、史書に鬼ノ城に関する記述はなく、「鬼ノ城」が誰によって何の目的で作られたかは謎とされている。



吉備の国 古代遺跡マップと「鬼ノ城」



## 参考

### a. 吉備津宮縁起による温羅伝説

崇神天皇のころ、異国の鬼神が吉備国に空より下った。彼は百濟の王子で名を温羅（ウラ・オンラ）ともいい吉備冠者とも呼ばれた。彼の両眼は爛々として虎狼の如く、蓬々たる堀髪は赤きこと燃えるが如く、身長は一丈四尺にも及び、絶倫かつ剽悍で凶悪であつた。

彼はやがて新山に居城を構え、さらにその傍の岩屋山に楯を構えて、しばしば西国から都へ送る貢船や婦女子を掠奪したので、人民は恐れおののいてこの居城を「鬼ノ城」と呼び、都に行つてその暴状を訴えた。

朝廷は大いにこれを憂い、武將を遣わしてこれを討たしめたが、温羅は兵を用いること頗る巧で出沒は変幻自在容易に討伐し難かつたので空しく帝都に引き返した

そこで、つぎは武勇の間こえ高い孝靈天皇の皇子イサセリヒコノミコトが派遣された。

ミコトは大軍を率いて吉備国に下り、まず吉備の中山に陣を布き、西は片岡山（今の倉敷市日畑西山の楯築山）に石楯を築き立てて防戦の準備をした。

さていよいよ温羅と戦ふこととなつたが、もとより変幻自在の鬼神のことであるから、戦ふこと雷神の如くその勢いはすさまじく、さすがのミコトも攻めあぐんだ。

ミコトの射る矢は、鬼神が岩を投げて空中で噛み合い、海中に落ちた。

そこでミコトは千鈞の強弓で2本の矢を同時に射たところ、一本は岩にあたり落ちたが、1本は見事に温羅の左眼にあつたので、流るる血潮が流水となってほとぼした。（これが血吸川のいわれです）



温羅はたちまち雉と化して山中に隠れたが、ミコトは鷹となって追いかけたので、温羅はまた鯉と化して血吸川に温羅はついにミコトの軍門に降って吉備冠者の名をミコトに献上したので、それよりミコトは吉備津彦命と改称されることとなった。

吉備津彦命は鬼の頭をはねて申し刺しにしてこれを曝した。岡山市の首部（こうべ）はその遺跡とされる。しかるにこの首が何年となく大声を発し、唸り響いて止まらないので吉備津彦命は部下の犬飼建（イヌカイノタケル）に命じて犬に喰わした。それでもなお吠え止まないなのでその首を吉備津宮の釜殿のかまの下八尺を掘って埋めたが、なお一三年の間唸りは止まらず近里に鳴り響いた。

ところがある夜、命の夢に温羅の霊が現われて「吾が妻、阿曾媛をして釜殿のかまを炊かしめよ、幸あれば裕に鳴り禍あれば荒らかに鳴ろう」と告げた。これが吉備津神社につたわる釜鳴神事のおこりとされる。

## b. 再度 古代吉備 「鉄」と「鬼」



「吉備の中山」の丘陵地



鬼退治伝説の吉備津彦命を祭る吉備津神社と吉備津彦神社

## 「真金吹く 吉備の中山 帯にせる 細谷川のおとのさやけさ」

吉備国では後に古今和歌集に「真金吹く 吉備の中山 帯にせる 細谷川のおとのさやけさ」と歌われるごとく、鉄・鍛冶生産が早くから行なわれてきた鉄の一大生産地。

大陸から北九州を経て畿内へ行く途中にある吉備では、いち早く大陸の新しい文化・技術が伝わったであろう。その中で、水田耕作・勢力伸張の大きな武器となった鉄精錬・鍛冶の技術も大きな川と内深く入り込んだ内海での豊富な砂鉄の体積を使って、この吉備の地でいち早く根付き、古代鉄の一大生産地となっていた。

まさに「真金吹く 吉備の中山 おびにせる 細谷川のおとのさやけさ」である。

”真金吹く”は吉備の枕詞であり、製鉄の時に飛び散る火花を象徴。

後の時代の延喜式によると吉備は「調」として鋤や鉄を納める国として記載がなされ、中世以降も備前

刀や備中鍬等の鉄製で吉備の国は、全国に知られている。

「吉備の中山」は吉備の古墳群や国分寺跡が並ぶ総社の丘陵地に隣接する小さな丘陵地。

この丘陵地の麓にも 吉備津神社 吉備津彦神社をはじめ、多くの古代遺跡がある。

この吉備の持つ鉄の技術は吉備の勢力伸張の武器であると共に他の巨大化する勢力にとっても魅力的なものであり、この吉備の鉄の覇権をめぐる、連合・争いが巻き起こったであろうし、この中で吉備は出雲と同様大和の勢力下に組み込まれてゆく事になる。

この鉄の覇権をめぐる争いの伝承が「鬼ノ城 温羅伝承」つまり「桃太郎の鬼退治」の伝承であろう。

ぼかぼか陽気の中 眼下に広がる鬼の城。鬼ノ城」の丘に立ったのはもう随分前 99.5.29.。

「もう記憶も少し薄れているが、ぼかぼか陽気の午後。

こんな温暖の地でたとえ堅固な城であるにしても南に大きく開けた地が「悪者の鬼の城」には似合わない。 もっと 山奥か 人里はなれた未開の土地でなければ・・・。

やっぱり ここでも 鬼は悪者に仕立て上げられたのか・・・・・・・・・・

産鉄の民と支配者との争い 大和にとっては悪者であっても 吉備では良き隣人・恩人でなかったか

「鬼」「鬼」と悪者として追いまわす中に何か親しみをこめ、「福は内 鬼は外」と豆をまく節分。

21世紀のキーワードと言われる「敵対・抹殺から融合・融和へ」鬼伝説の中にある「親しみ」もこれではないか・・・・・・・・

鉄は両刀の刃。古代 そして日本の伝統の中に 21世紀を生き抜く解がないか・・・・・・・・・・

2002.2.24. 柏にて 鬼に親しみをこめて by M.Nakanishi

## 「真金吹く」吉備の国 吉備の鉄と桃太郎伝説

【完】

### 「真金吹く」吉備の国 吉備の鉄と桃太郎伝説

1. 稲作と鉄器の伝来が縄文の智恵と融合して原日本がつけられた
2. 古代 吉備の国 「鉄」そして「鬼」
  - 「弥生の`暮らし」を持たらした大陸からの渡来人 -NHK 「日本人遥かな旅」より
  - 古代 吉備の国 「鉄」そして「鬼」
3. 吉備の国「桃太郎伝説」の原型となった「温羅・うら伝説

- 参 考 日本 鬼伝説

---

2002.3.2. by M.Nakanishi

第5回 暦博国際シンポジウム  
「古代東アジアにおける倭と加耶の交流」に参加して  
『加耶の鉄と倭国』  
2002. 3. 13. 千葉県佐倉市 国立歴史民俗博物館



2002. 3. 13. から 4 日間 韓国と日本の考古学の先生中心に古代日本の成立に大きな影響を与えた朝鮮「加耶」と「倭」の交流について、最近の日本・韓国の発掘調査結果などを踏まえて「古代東アジアにおける倭と加耶の文化交流」についての国際シンポジウムが千葉県佐倉市の国立歴史民俗博物館で開催された。このシンポジウムの初日に「加耶の鉄と倭国」のテーマで古代日本の製鉄のルーツや朝鮮半島の辰韓・加耶の鉄が古代日本成立にはたした役割等が新しい考古学調査を基に討論された。

「日本の古代製鉄のルーツは大陸・朝鮮にあることが定説になっており、この鉄の覇権をめぐって展開されたドラマが日本誕生に深く結びついている」と言われ、弥生時代から古墳時代そして大和朝廷の時代へと紀元 2~7 世紀の古代和鉄を探ってゆくと常に行き着く「朝鮮半島加耶の鉄」。

自分の知識と言え、情報が断片的で、時代もきっちり把握できておらず、何とはなしに「加耶の鉄が製鉄の民と共に日本へやってきて、その鉄の歴史が古代日本誕生のドラマの中で数々の役割を演じてきた」と。

1. 吉備・出雲神話と鉄のかかわりと各地に残る古代「鬼伝説・羽衣伝説」
2. 出雲荒神谷に忽然と消えた青銅器文化と鉄のかかわり
3. 鉄とともに忽然と現れた四隅突出方墳から巨大前方後円墳への墳墓の変遷
4. 大和連合日本統一にはこの加耶の鉄が決定的役割をはたしたのではないかと等々。

自分のもっばらの関心事は「これら日本で起こった数々の事象・伝承が実際の大陸・朝鮮との交流史の中に於いて、考古学でかつ日本・朝鮮・中国での製鉄・鍛冶遺跡発掘で信憑性を持って語られているのか」「本当のところ 日本の鉄のルーツはわかってきたのか・・・」そんな興味を持って このシンポジウム聴講。

昨今の古代史ブームの中 もっとも興味を持たれている「古代日本のルーツ」にかかわる「朝鮮加耶と



の交流」がテーマであり、専門家ばかりでなく、各地の文化財保護に関わる人 そして私みたいな素人など 席が指定されるほどで、国立歴史民俗博物館の大ホールが満席の盛況であった。

**12.1. 弥生時代には日本自前の鉄はなかった？ — 日本古代 鉄 の 歴 史 —**

弥生の時代の始まりは鉄器使用に裏付けられた水田稲作によると言われる。`、  
 しかし、現状弥生時代には種々の鉄製工具が使われ出したが、いずれも日本で作られた鉄ではなく、大陸から持ち込まれた物と見られている。  
 一番古いもので紀元前2世紀頃から日本各地で鉄斧など鑄鉄製品が出土しているが、これらはすべて大陸からもたらされたもので、日本で鑄造された痕跡はない。  
 九州テクノ大野正巳氏らの鉄器遺物 鍛冶スラグなどの分析を通じた整理等をベースにシンポジウムでの諸氏の話をもとめ、日本での鉄の歴史を次のように整理した。

**表 日本古代 鉄 の 歴 史**

|             |     |     |      |     |     |    |           |      |                 |             |            |     |            |     |      |      |
|-------------|-----|-----|------|-----|-----|----|-----------|------|-----------------|-------------|------------|-----|------------|-----|------|------|
| BC 800      | 600 | 400 | 300  | 200 | 100 | 0  | 100       | 200  | 300             | 400         | 500        | 600 | 700        | 800 | 1000 | 1500 |
| ▼           | ▼   | ▼   | ▼    | ▼   | ▼   | ▼  | ▼         | ▼    | ▼               | ▼           | ▼          | ▼   | ▼          | ▼   | ▼    | ▼    |
| 縄文晩期        |     |     | 弥生前期 |     |     | 中期 | 後期        | 古墳前期 | 中期              | 後期          | 飛鳥         | 奈良  | 平安         | 室町  |      |      |
| 【鑄造破片再生の時代】 |     |     |      |     |     |    | 【本格鍛冶の時代】 |      |                 |             | 【鉄の量産化の時代】 |     |            |     |      |      |
| 日本古代 和鉄の歴史  |     |     |      |     |     |    | 【原始鍛冶の時代】 |      | 【鉄生産・鉄の自給拡散の時代】 |             |            |     |            |     |      |      |
|             |     |     |      |     |     |    |           |      |                 | 【鍛打伸展鍛冶の時代】 |            |     | 【鉄の多様化の時代】 |     |      |      |

- 1. 縄文晩期 ~ 弥生前期 紀元前2世紀 ~ 紀元1世紀 【鑄造破片再生の時代】**  
 中国・朝鮮半島との交流は縄文時代晩期には既に始まっており、中国にその起源をもつ鉄器が日本に現れ、その後弥生前期には中国で製造された鑄物製の鉄斧などの破片を日本で割るなどの再加工して使用する事が始まる。
- 2. 弥生時代中期 ~ 後期 紀元1世紀 ~ 3世紀初頭 【原始鍛冶の時代】**  
 薄く板状に鑄込み表面脱炭された素材が日本に持ち込まれ、曲げなど簡単な鍛冶が行われる。
- 3. 弥生時代後期以降 ~ 古墳時代中期 2世紀 ~ 4世紀 【鍛打伸展鍛冶の時代】**  
 中国では脆い鑄鉄鑄物ばかりでなく、鉄鉱石を低温還元焼成してつくられた塊状鍊鉄が得られるようになり、日本では、脱炭鑄鉄と同時にこれらを素材とした鍛鍊加工(原始鍛冶)がスタートし、次第に本格鍛冶へと移って行く。
- 4. 古墳時代初頭以降 初期 ~ 中期 3世紀前半 ~ 5世紀 【本格鍛冶の時代】**  
 大陸では塊状鉄精鍊が本格化し、鍛冶材料として広く流布。朝鮮半島でもこの塊状鉄精鍊がスタートしたと見られるが、はっきりしない。この当時 半島朝鮮半島の南部辰韓・加耶と倭国との交流が始り、4世紀半ばには加耶が鍛冶加工された薄い鉄板(鉄)の供給基地として登場し、渡来人の交流と共に大量の鉄が鍛冶原料として持ち込まれるようになる。  
 当初3世紀には北九州に限られた鉄の先進地が5世紀には瀬戸内・出雲・吉備・畿内へと東進してゆく。この間日本に於いてはこれら朝鮮半島から持ち込まれた鉄と共にこの鍛冶・加工に使った鍛冶炉跡や鍛冶滓が大量に見つかるようになる。  
 5世紀後半になると畿内には大県遺跡など大規模な專業鍛冶集団が生まれて勢力を伸ばす。

## 5. 古墳時代中後期～飛鳥・奈良 5世紀末～8世紀【鉄生産・鉄の自給拡散の時代】

その始りはまだはっきりしないが、5世紀末から6世紀初頭にかけて 鉄鉱石原料とした箱型炉による製鉄精錬が日本国内(吉備)で始まり、鉄素材の自給が始まった。

また 国内に大量に存在する砂鉄を原料とした精錬も始まり、日本での鉄自給の波が西国から東へ広がって行く。

7世紀末から8世紀には現在の福島県原ノ町近傍(行方製鉄遺跡)まで広がりさらに、9世紀には青森岩木山北山麓での製鉄が確認されている。

## 6. 奈良・平安時代 8世紀～11世紀 【鉄の多様化の時代】

竪型炉が関東・東国に出現し、大型の箱型炉や鋳物遺跡の出現など鉄生産が日本全国におよび、鉄生産の多様化が進む。本格的な鋳物生産がはじまり鉄の多様化がはじまる。

## 7. 中世 15世紀以降 【鉄の量産化の時代】

高殿たたらが鉄山経営として成り立ち 出雲など中国地方の生産が他を圧倒して行く

日本では縄文晩期に鑄造鉄斧があらわれ、弥生時代には数多くの中国製と考えられる鉄斧が出土しているが、日本で鉄が自給されるのは5世紀末から6世紀と考えられ、それ以前には鍛冶滓などはみつかったても、製鉄炉や精錬スラグは見つからず、自給の鉄精錬が行われた痕跡は見つかっていない。

5世紀末 千引カナクロ谷製鉄遺跡等吉備の国で大陸と同じ方式の鉄鉱石原料とした鉄精錬が現れ、6世紀になると国内に大量にある砂鉄を原料とした製鉄炉もあらわれ、九州・西国から東へ急速に鉄の自給が進んで行く。

このことから 「鉄の時代の始まり=弥生時代」といわれるが、自前の鉄文化が日本で根付くのは大和朝廷が成立する飛鳥時代以降と言う事になる。

### ● 弥生時代 中国から移入された鑄造鉄斧等の鉄器類



弥生時代には大量の鉄斧が中国から伝来したが、これらの鉄斧表面は再加熱による表面弾炭処理が施され、硬くて脆い高炭素鑄鉄(白鉄)の表面にねばい脱炭層が付与されている。日本に鉄器が伝来した初期から高度の加工処理が施されていた。

また、これら日本に伝来した鉄斧は工具として使われたのみならず、この鉄斧や折損破片を鉄素材としてさらに鍛打・研磨・剥ぎ取りなどの技法により、工具に再生された。

弥生時代後期になる表面脱炭さした薄

い鑄造鉄板が伝来し、簡単な加熱曲げ加工が始まる。(原始鍛冶)

当時 中国は前漢の時代。前漢は全国に46の鉄官を置き鉄の生産すべて官営として管理下においた。これらの鉄が朝鮮半島に置かれた楽浪郡等4郡の交易基地を通じて日本にもたらされたと見られている。また、弥生後期から古墳前期にかけて、鉄鉱石を直接還元して鉄を作る塊状錬鉄法がおこなわれるようになり、脆い鉄に替わって ねばい鉄が得られるようになり、鍛冶材料として広く交易商品として中国朝鮮で流通するようになる。それらも日本に伝来し、本格的な過熱鍛冶が始まる。当初は中国製がそのまま日本にもたらされるが、次第に朝鮮半島で鍛冶加工されたり、朝鮮半島で製造されたものが、日本

にもたらされる。特に4世紀 朝鮮半島の南端に近い加耶はこの鉄の生産・鍛冶・交易の中心地となり、日本にもたらされる鉄鍛冶材料も飛躍的に増大。  
この朝鮮からもたらされた鉄は冶具や水田耕作などの道具に鍛冶加工されたばかりでなく、武器としても広く用いられ、この朝鮮の鉄の派遣が日本(倭国)各地に起こった諸国の勢力争いの重要な武器となり、この中から大和連合が生まれ、日本を統一して行く事になる。



日本最古の中国製鉄斧が出土した  
福岡県曲り田遺跡



日本出土各種鉄器



近畿最古の鉄斧が出土した  
京都府 丹後扇谷遺跡



福岡県比恵弥生遺跡から出土した中国製鑄造鉄斧 断面 弥生時代 中期 今から約2000年前



## 2. 「加耶の鉄を巡る古代日本の派遣争い」それが日本を造っていった



中国製の鑄造鉄が大量に日本に移入された弥生時代 大陸との交流の主は朝鮮半島を通じてであり、中国では漢が成立し、紀元前2世紀末には全国46ヶ所に鉄官をおき、周辺諸国に主として鑄造鉄器供給をすると共に鉄を支配。倭・朝鮮諸国へは朝鮮半島に置いた楽浪・帯方郡など4郡を通じて供給された。  
その後、朝鮮半島では中国の鉄素材を板状鉄斧等に鍛冶加工するとともに製鉄の技術もつたわったと考えられ、朝鮮で鉄鉱石精錬された鉄が交易の中心として倭に持ち込まれるようになる。

2,3世紀になると中国歴史書に倭の記事が載るようになり、中国・朝鮮半島との交流が盛んになり鉄は重要な交易品となっていることが解る。



2世紀 「後漢書・東夷伝の弁辰条」には「国出鉄、倭・馬韓並従市之」の記述があり、「南部弁辰の地（弁韓後の加耶地域）で産出する鉄鉱石の製練（鍛錬）が行われ、その鉄を倭・韓の人たちが買っていた」との記述がある。おそらく斧状鉄板とみられている。

3世紀 卑弥呼が魏に遣使を送ったのが AD239 であり、「魏史・東夷伝の弁辰条」AD286 にも朝鮮半島南部弁辰の地（後の加耶地域）が「国出鉄、韓・倭、皆従取之」の記述がある。



吉備の遺跡ら出土した中国製 鉄てい



朝鮮半島から日本等周辺諸国へ交易された鉄てい

4世紀になると朝鮮半島では馬韓・弁韓・辰韓そしてそれらを引き継ぐ百済・加耶・新羅の三国時代になるとその地方にある鉄鉱石を原料とした精錬・製鉄が盛んに行われるようになり、これらの国から周辺諸国・中国への鉄の輸出もさらに活発になったと推定されている。

4世紀半ばこれらの地域で斧状鉄板から鉄へへの形状変化がおり、鉄生産の中心をになった加耶など朝鮮半島南部から日本に製鉄素材として大量に日本へ持ち込まれるようになる。

この頃 高句麗の南下・漢の4郡の衰退 4郡の衰退による朝鮮半島の鉄交易先の変化そして朝鮮3国の勢力の変化など中国・朝鮮での勢力変化が頻繁に生じ、鉄の倭に対する供給基地であった加耶を中心とした朝鮮三国と倭の関係も鉄の覇権・文化交流も大きく揺れ動く事になる。また、これら大陸の先進文化と共に朝鮮各地から数多くの渡来人が日本にやってくる。

特に鉄の入手は日本国内諸国最重要項目であり、くるくると変わり行く朝鮮の情勢。鉄の入手・鉄の自給への道を巡って多くの交流があり、鉄の覇権をめぐる日本国内諸国の争いを経て、古墳時代から飛鳥時代への変遷 大和を中心とした連合による日本統一へと進んでいったと見るのも一つの側面であろう。

「加耶の鉄」を巡って「大陸から朝鮮・対馬をへて北九州・日本へ」壮大な古代「鉄の道」が大陸から海をわたって日本・畿内へと続いている。

第5回 暦博国際シンポジウム「古代東アジアにおける倭と加耶の交流」に参加して

『加耶の鉄と倭国』

【完】

## 近江国 瀬田丘陵の古代製鉄遺跡群



一野路小野山遺跡・木瓜原遺跡ほか一

古代大和勢力を支えた琵琶湖南岸の大製鉄地帯  
瀬田川兩岸の南郷・瀬田丘陵に広がる古代製鉄遺跡群

京都から滋賀県との境に連なる京都東山・逢坂山の峰々を越えて大津に入ると左手には比叡・比良の山々を背に琵琶湖が広がり、右手には湖南アルプスをはじめとした勢田丘陵が続く。

琵琶湖とこの湖南アルプスから鈴鹿へと続く山々の間には広大な近江平野が広がるが、大津はその入口部にあたる。北に大きく扇形に広がる琵琶湖は大津の東瀬田で上記した南に延びる湖南アルプスなどの丘陵地と京都東山連峰にはさまれた谷間を瀬田川となって南郷・宇治・大阪へ流れ下って行く。この瀬田川の東側

から南東には広大な丘陵地が東西に延々と続き、その背後には笠置・信楽・鈴鹿の山々がさらに続いている。

この丘陵地と琵琶湖の間には大津・瀬田を入口に広大な近江平野が続く。この大津・瀬田から草津・野洲へと連なる平野部は琵琶湖を交易路として畿内と大陸並びに日本海沿岸・東国を結ぶ古代から開けた要衝の地で、大陸・朝鮮半島など新しい文化流入の地である。そしてこの瀬田川東岸の瀬田丘陵地と対岸を含めた南郷地区は古代の製鉄遺跡が点在し、7世紀後半から8世紀にかけての古墳時代から飛鳥時代・奈良時代にかけての古代畿内の大製鉄地帯だったと考えられている。

これらの南郷・瀬田丘陵地の製鉄遺跡の特徴は吉備の国と共に大陸・朝鮮半島で行われてきた鉄鉱石精練であり、他の地域が日本で改良された砂鉄精練であるのと大きく異なっている。

日本における精練・製鉄の始りは5世紀後半ないしは6世紀初頭 鉄鉱石精練法として大陸朝鮮から技術移転されたといわれ、吉備千引がなくろ谷遺跡等が日本で製鉄が行われたとの確認が取れる初期の製鉄遺跡と言われている。

大陸・朝鮮で砂鉄精練が行われていたとの実証はなく(最近朝鮮で大量の砂鉄が鍛冶工房と一緒に見つかった例がでてきた)砂鉄精練は日本で大きく改良発展したと考えられているが、この時代の製鉄炉として砂鉄精練の痕跡を残す製鉄遺跡も数多多く発見されている。この南郷・瀬田丘陵地で発掘された製鉄遺跡群は、日本での製鉄開始時期からは100年程度後の飛鳥時代の製鉄遺跡ではあるが、日本に最初に伝来した初期の製鉄法がそのまま踏襲されてき、それが大和勢力と密接に関係する吉備と この近江の国のみであると考えれば鉄器文化先進の地北九州と朝鮮の結びつきを圧して 大和・吉備の勢力が朝鮮の新しい勢力と組み鉄の覇権を握って日本統一を成し遂げたと考えるのもあながち乱暴ではなかろう。

それ以後大和勢力は丹後・出雲などの砂鉄精練技術をもつ諸国をもが従えて行くが、日本統一の原動力となった近江の鉄鉱石精練技術がそのまま痕跡として受け継がれてきたのではないかと・・・

古代近江は琵琶湖を通じた交易の要衝としての重要性が強く指摘されているが、この近江の鉄の生産国としての重要性も認識せねばならない。

古代天智天皇の近江の宮 聖武天皇の信楽宮 そして雄略天皇の越の国からの大和入場もすべてこの近江の鉄を舞台にまわったのではないかと・・・?

# 1. 滋賀県の古代製鉄遺跡

## 滋賀県で確認されている 古代 製鉄遺跡一覧 (7~9世紀)

|            |            |               |            |
|------------|------------|---------------|------------|
| 1、太平遺跡     | 大津市石山寺辺町   | 27、小荒路遺跡      | 高島郡マキノ町小荒路 |
| 2、平津池ノ下遺跡  | 大津市平津一丁目   | 28、天神社裏山A遺跡   | 高島郡マキノ町海津  |
| 3、南郷遺跡     | 大津市南郷一丁目   | 29、海津B遺跡      | 高島郡マキノ町海津  |
| 4、芋谷南遺跡    | 大津市南郷四丁目   | 30、白谷遺跡       | 高島郡マキノ町白谷  |
| 5、山口遺跡     | 大津市南郷五丁目   | 31、北牧野A遺跡     | 高島郡マキノ町牧野  |
| 6、青江遺跡     | 大津市神領三丁目   | 32、北牧野C遺跡     | 高島郡マキノ町牧野  |
| 7、青江南遺跡    | 大津市神領四丁目   | 33、北牧野D遺跡     | 高島郡マキノ町牧野  |
| 8、月輪南流遺跡   | 大津市月輪三丁目   | 34、北牧野E遺跡     | 高島郡マキノ町牧野  |
| 9、源内峠遺跡    | 大津市瀬田南大萱町  | 35、大谷川遺跡      | 高島郡マキノ町牧野  |
| 10、関ノ津東遺跡  | 大津市関津三丁目   | 36、谷八幡遺跡      | 高島郡今津町梅原   |
| 11、小山池遺跡   | 大津市関津六丁目   | 37、東谷遺跡       | 高島郡今津町大供   |
| 12、大塚遺跡    | 大津市上田上中野町  | 38、酒波遺跡       | 高島郡今津町酒波   |
| 13、藤尾遺跡    | 大津市藤尾奥町    | 39、木津遺跡       | 高島郡新旭町養庭   |
| 14、大野遺跡    | 大津市真野大野一丁目 | 40、鶴川遺跡       | 高島郡高島町鶴川   |
| 15、木瓜原遺跡   | 草津市野路町     | 41、明神遺跡       | 高島郡高島町鶴川   |
| 16、湧谷遺跡    | 草津市野路町     | 42、山田地蔵谷遺跡    | 滋賀郡志賀町北小松  |
| 17、金鉄落遺跡   | 草津市野路町     | 43、膝山北川遺跡     | 滋賀郡志賀町北小松  |
| 18、野路小野山遺跡 | 草津市野路町     | 44、滝山遺跡       | 滋賀郡志賀町北小松  |
| 19、キドラ遺跡   | 彦根市中山町     | 45、オクヒ山遺跡     | 滋賀郡志賀町北小松  |
| 20、古橋東遺跡   | 伊香郡木之本町古橋  | 46、念仏山井天神社遺跡  | 滋賀郡志賀町南小松  |
| 21、黒山A遺跡   | 伊香郡西浅井町黒山  | 47、谷ノ口遺跡      | 滋賀郡志賀町南小松  |
| 22、黒山B遺跡   | 伊香郡西浅井町黒山  | 48、後山畦倉遺跡     | 滋賀郡志賀町北比良  |
| 23、ひくれ谷遺跡  | 伊香郡西浅井町小山  | 49、天神山金糞峠入口遺跡 | 滋賀郡志賀町南比良  |
| 24、小山A遺跡   | 伊香郡西浅井町小山  | 50、タタラ谷遺跡     | 滋賀郡志賀町小野   |
| 25、小山B遺跡   | 伊香郡西浅井町小山  | 51、金刀比羅神社遺跡   | 滋賀郡志賀町守山   |
| 26、大浦A遺跡   | 伊香郡西浅井町庄   | 52、二口遺跡       | 滋賀郡志賀町     |

滋賀県教育委員会ホームページ <埋もれた文化財の話> 「近江の鉄と銅」より

上記一覧表は滋賀県埋蔵文化財センターで作成された古代7世紀~9世紀の滋賀県製鉄遺跡の一覧表でその分布がきわめて特徴的で3地域に分けられることです。

1. 大津市から草津市にかけて位置する瀬田丘陵北面（瀬田川西岸を含む）、
2. 西浅井町、マキノ町、今津町にかけて位置する野坂山地山麓、
3. 高島町から志賀町にかけて位置する比良山脈山麓

このうち、野坂山地と比良山脈からは、磁鉄鉱が産出するので、その鉄鉱石を使用して現地で製鉄していたと考えられる。

特に野坂山地の磁鉄鉱は、『続日本紀』天平宝字6年(762)2月25日条に、「大師藤原惠美朝臣押勝に、近江国の浅井・高島二郡の鉄穴各一処を賜う」との記載があり、浅井郡・高島郡の鉄穴に相当するものと考えられ、全国的にも高品質の鉄鉱石であったことが知られます。

一方、瀬田丘陵近辺では、現在のところ磁鉄鉱の産出は知られておらず、この地での製鉄は、原料の鉄鉱石をどこからか運んできて生産したと考えられ、規模が大きく、かつ古代では例のない防湿施設をもつ木瓜原遺跡の製鉄炉や、6基の製鉄炉を整然と配置し、高品位の鉄鉱石を使用している野路小野山遺跡の製鉄炉などを考えるとこの瀬田丘陵での製鉄は律令国家がかかわる官営工場の可能性が高い。

そこで注目されるのが、『続日本紀』天平14年(743)12月17日条の「近江の国司をして、有勢の家の専ら鉄穴を貪り、貧賤の民の採り用い得ぬことを禁断せしむ」という記述です。これによると、近江国で、有力な官人・貴族たちが、公民を使役して私的に製鉄を行っていたというのです。その場所がどこで、7~9世紀にかけて、瀬田丘陵を中心に近江国の各地で製鉄生産が行われていたことは、律令国家成立期において近江国が政治的・経済的にきわめて重要な位置を占めていたことを示しています。



## 2. 瀬田丘陵 古代製鉄群を訪ねる

草津市 野路小野山製鉄遺跡・木瓜原(ボケバラ)遺跡



3月23日京都から草津市の野路小野山製鉄遺跡など古代 大和政権成立の黎明の時代に極めて重要な役割をはたしたといわれる瀬田丘陵の古代製鉄遺跡群を訪ねた。

3月13日国立歴史民俗博物館で開催された「加耶の鉄と倭」の国際シンポジウムで古代日本誕生の黎明期に大和連合のバックボーンとして鉄自給の使命を担ってさっそうと登場した近江の国琵琶湖南岸の鉄鉱石精練の話聞いた。



比叡ドライブウェイ 山中越え 琵琶湖から瀬田丘陵

近江が鉄の国であることは司馬遼太郎の「街道を行く」等ではいたもののそれはむしろ大陸と関係して湖北・比良山麓と考えていたので話を聞いてビックリ。

余知らなかったが、かつてよく通った南郷・瀬田の瀬田川沿いの丘陵地 最近 龍谷大学の理工 立命館大学の理工が進出し

たあの瀬田丘陵に古代の大規模な製鉄遺跡群があるという。資料も予備知識も全く無し。

でもあの丘陵地に続く近江平野は縄文・弥生の時代から開け、渡来人も多く住んだ古代の文化先進地。また 丘陵の奥にはかつて古代に都が造営された信楽があり、鈴鹿から笠置の峰々へ。またこの山間をぬけると飛鳥・奈良へと古代の道が続いている。



古代製鉄遺跡群のある瀬田丘陵の位置

さっそく地図と地名を頼りにまず一番解りやすそうな草津市野路小野山製鉄遺跡を訪ねる事にした。

京都から滋賀へ抜けるルートは幾つかあり、大動脈である国道1号線・名神高速道は京都から山科を抜け逢坂山を越えてゆく。また 京都の街の北から比叡山の南側を越える山中越えや比叡山の北を越える途中越えの道がある。京都から琵琶湖へ抜け、琵琶湖と山々との間の狭い平地に広がる大津の街を街道が抜けて行く。琵琶湖が瀬田・淀川として南に流れ出す口にかけてられた近江大橋を渡り草津にはいる。

大阪からだともう少し南側 国道1号線を瀬田の唐橋で瀬田川を渡り草津へ。

JR南草津駅のところで国道1号線を右に曲がる。

面真近かに幾重にも重なって住宅が立ち並ぶ丘陵が東西にのびている。瀬田丘陵である。約 500m ばかり進んでこの丘陵地にさしかかるところが京滋バイパスの野路中央のインター。このバイパスを越えたところに小野山団地のバス停があり、野路小野山製鉄遺跡もほぼこのあたりであるが、全くみあたらず。街の人たちに聞くが誰も要領を得ず。



国道1号線 京滋バイパス 草津市野路中央インター交差点付近

南西から延びる瀬田丘陵の北側の山裾 この道路の下に野路小野山遺跡がある

さらに丘陵地を少し登って行くと立命館大の正面の入口。もう一度引き返し、団地の中をうろうろするが解らず。通りがかりのお爺さんが「バイパスの直ぐ北側のところだ」と教えてくれるがやっぱり何も無し。近所をウロウロ約30分。 近くに草津玉川公民館を見つけそこで話をしてやっと所在が解った。

「インターそのものが小野山遺跡。約10mばかり土盛をせず橋になっているその下が遺跡」と教えてもらう。また「立命館大学正面のはいったところのグランドの下が木瓜原製鉄遺跡。ここは発掘跡が保存されているが、グランドの下なので事前に申し込んで扉を開けてもらわないとダメだろう」と。

「街の中 街として開発される中での遺跡の保存がいかに難しいか う・・・ん」とうなってしまった。

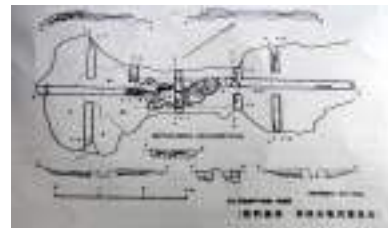
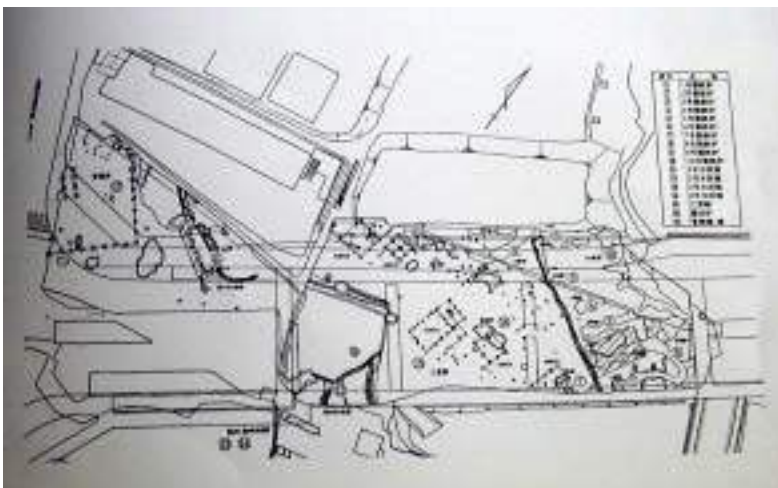


京滋バイパス 野路中央インターの橋脚の下にある野路小野山製鉄遺跡

この京滋バイパスの国道の下には下記のような7世紀末から8世紀半ばにかけての長方形の箱型製鉄炉11基・木炭窯6基・鍛冶工房とみられる掘建て柱建物など製鉄に関する一連の大製鉄遺跡遺構がまとまって眠っている。

一度調査後、埋め戻された遺跡は平成12年にバイパス下を中心に再度部分的に掘り起こされ、保存状態の確認が行われた。

〔滋賀埋文ニュース 第253号より〕



野路小野山遺跡概要と発掘された製鉄炉 野路小野山遺跡発掘調査概報より

京滋バイパスの野路中央の交差点の直ぐ東側約10mの幅で土盛のない橋になっていましたが、暗い橋の下です。調査は終わっているとは言いながら厳しいと感じました。





木瓜原製鉄遺跡が地下に保存された草津キャンパス グラウンド  
立命館大 草津市

立命館大もやっぱり土曜日  
でダメでした。

この南郷・瀬田の丘陵地は交  
通の要衝として また京  
都・大阪のベッドタウン  
とて有無を言わず開発の  
進んだところ。

古代から多くの渡来人がこ  
の地で日本人たちと一緒  
になって 鉄の自給に命を  
かけて取組みそれが原動、  
力となって 次第に大和政  
権から日本律令国家へ

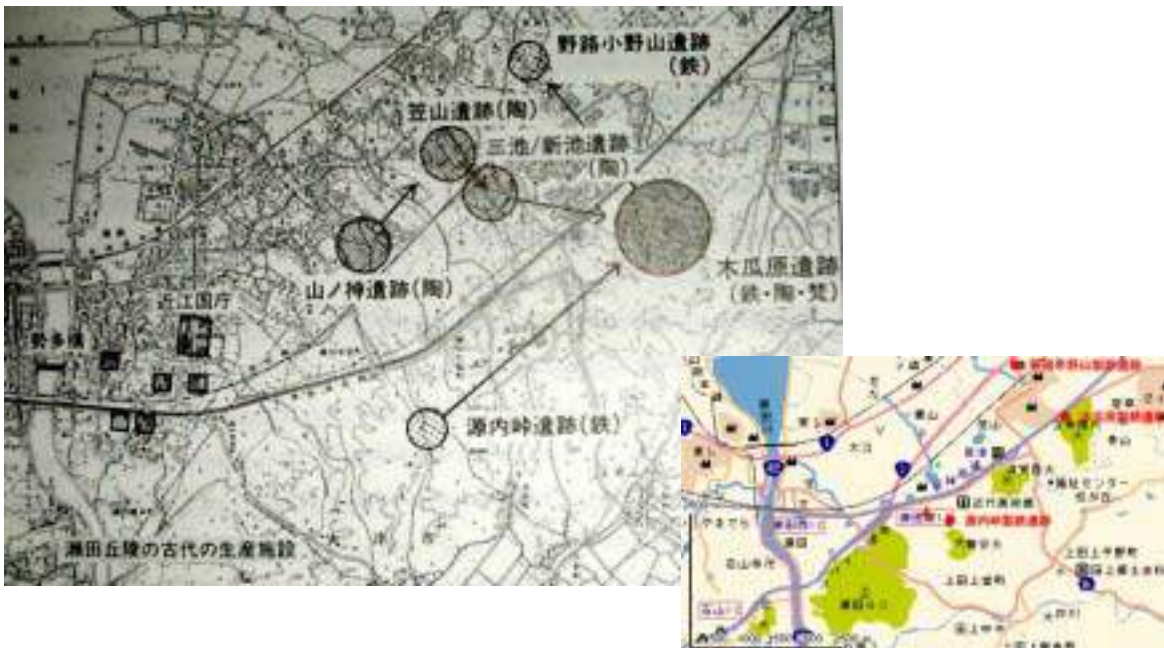
古墳時代から飛鳥・奈良の時代へと移っていく。この南郷・瀬田丘陵の製鉄遺跡と日本誕生のドラマ また、近江平野で発掘される数々の古代遺跡。近江の国の位置付けを考えるとこの地に総合的な古代博物館があっても良い地域ではないかと思うのですが・・・・。

今は住宅地開発の中に完全に埋もれてしまった瀬田丘陵。古代日本形成の重要な役割を担った畿内屈指の鉄の大生産地。眼前に広がる琵琶湖を眺めながら京都に山越えするとこの地の重要性が実感としてわかってくる。

大津市南郷・瀬田地区 龍谷大のある丘陵 今滋賀県文化財センター等がたちならんでいるが、この地も源内峠製鉄遺跡や桜峠遺跡など古代製鉄遺跡が発掘されている。このあたりも住宅地。きっちり遺跡がのこっているのだろうか？

源内峠製鉄遺跡はこの瀬田丘陵で発掘された一番古い遺跡と言う。

### 3. 瀬田丘陵の古代製鉄遺跡群 個々の製鉄遺跡概要



## ● 草津市 野路小野山製鉄遺跡

野路小野山製鉄遺跡は、市内野路町字小野山に所在する遺跡で、京滋バイパス建設に伴う発掘調査によって製鉄炉11基、木炭窯6基、大鍛冶跡、工房跡などが発見された。

この遺跡のある瀬田丘陵には、他にも木瓜原（ぼけわら）遺跡、観音堂遺跡、源内峠遺跡など多くの製鉄遺跡が集中し、飛鳥時代から奈良時代にかけての国内でも有数の製鉄地帯である。

瀬田丘陵の製鉄遺跡群の中では、野路小野山製鉄遺跡が最も新しい段階の遺跡と考えられ、操業の中心は8世紀なかば頃奈良時代の遺跡と推定されている。それ以前の遺跡では、1基から数基の大型製鉄炉を用いて鉄が生産されていたが、野路小野山製鉄遺跡では、やや小型の製鉄炉を6基並べて操業していたことがわかっている。これは、熱効率のよい小型の製鉄炉を用いて良質の鉄を多量に生産することを目的としたためと考えられています。

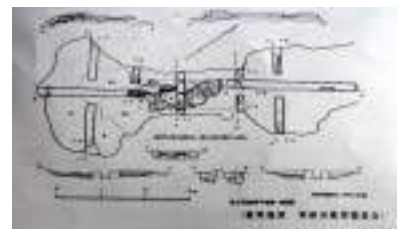
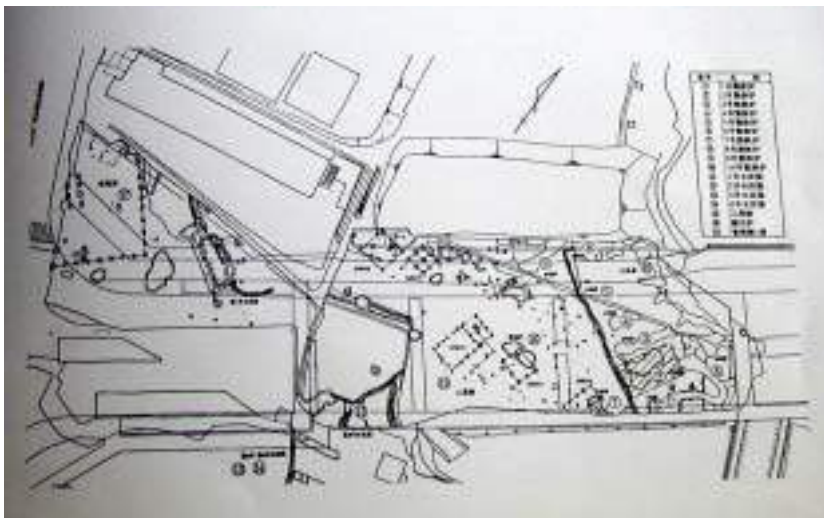


小野山遺跡製鉄炉跡



小野山遺跡復元模型

[天平の都 紫香楽] 刊行委員会発行 滋賀県信楽町 ホームページより



野路小野山遺跡概要と発掘された製鉄炉 野路小野山遺跡発掘調査概報より



製鉄原料として使われた鉄鉱石の一例

さらに、ここから出土している鉄鉱石は、他遺跡のものとは比べて極めて良質で、近隣では採集されないものであり、また、その鉄鉱石を分割する方法についても、高度な技術が用いられていたといわれています。これらのことから、野路小野山製鉄遺跡は、当時の最新の技術を用いて作られた製鉄所であったと考えることができる。

このように遠隔地から良質の原料を集め、最新の技術を導入することができたのは、一地方勢力の力だけでは困難であり、背後に大きな力が存在していたと考えられます。

この頃中央では聖武天皇の時代で、唐の文物制度を採用し、国政を充実させていました。野路小野山の地に作られた製鉄所は、中央の権力と深く関わりがあったと考えることができます。



● 草津市 木瓜原製鉄遺跡 (立命館大ホームページより)



木瓜原(ぼけわら)遺跡は、七世紀末から八世紀初頭までの製鉄遺跡。立命館大学 草津キャンパスの建設に先立ち 1990 年から 1992 年にかけて発掘調査され、7 世紀末から 8 世紀初めにかけての貴重な製鉄遺跡である事が判明。現在、立命館大学の草津キャンパスのグラウンド地下に発掘された状態のままに保存されている。

この遺跡は箱型の製鉄炉と鍛冶場 木炭炉・須恵器窯・梵鐘の鑄造場など多岐にわたる生産施設が配置されたコンビナートの様相を呈する大規模な遺跡である。また 製鉄炉は他地域の同時代の製鉄炉と比べて格段に大きく(2.8x0.6m) 地下防湿近構造も丁寧で近江の中心的製鉄所であったと考えられる。

この木瓜原遺跡の概要については『「古代の製鉄コンビナート」立命館大学びわこ・くさつキャンパス 木瓜原遺跡の発掘』1994 年 立命館大学の小冊子にわかりやすくまとめられている。



木瓜原遺跡の製鉄炉遺構 『「古代の製鉄コンビナート」木瓜原遺跡の発掘』より



● 大津市瀬田 源内峠製鉄遺跡 龍谷大学 安食氏ホームページより



源内峠製鉄遺跡 発掘風景 安食真城氏ホームページより



源内峠遺跡の発掘報告を伝える 源内峠遺跡で発掘された製鉄炉 滋賀埋文ニュース 第221号より  
滋賀埋文ニュース 第221号

源内峠遺跡は龍谷大学瀬田学舎（大津市瀬田大江町横谷）のすぐ近く。昭和52・60年度の2度にわたる調査で遺跡は7世紀後半の製鉄炉跡で瀬田丘陵一帯では最古の遺跡である可能性があり、鉄鉱石精練が行われた箱形の4つの製鉄炉が発見された。調査後現地は埋め戻され現地保存の処置が取られているという。

まだ、自分で現地に立つ事できていませんが、龍谷大学の安食真城氏がホームページで発掘の時の様子を紹介されており、また安食氏並びに滋賀県埋蔵文化材センターの藤崎高志氏より貴重な資料を送っていただいたので、その中から遺跡の様子を紹介する。

あたりには鉄粉が80センチから1メートルも体積しており、約20～30トン程度あるとみられることから、この地で長期間にわたって作業が繰り返されたと推測されている。

古くから地道があり、鉄粉が多く見られたことから、以前からこの場に遺跡があるのではないかと考えられていた。龍谷大学開学時に道路をつけるに当たり調査をして遺跡の存在が確認された。

7世紀 藤原京、大津京、紫香樂京などの造営に大量の鉄が使われたのではないかと考えられている。

7世紀後半は朝鮮半島白村江での敗戦・百濟の滅亡・新羅の朝鮮半島統一と朝鮮半島との関係で国際緊張が高まり、朝鮮半島からの交易も思うに任せず、大和朝廷にとってこの源内峠製鉄遺跡等南郷・瀬田丘陵での鉄生産・自給が極めて重要な時であったと考えられ、その後この瀬田丘陵で次々と大規模な官営と見られる製鉄基地が営まれ、律令国家形成のバックボーンとして機能する。

## 4. 製鉄技術伝来と大陸・朝鮮から伸びる鉄の道



古墳時代中期 4世紀から5世紀にかけて朝鮮の加耶が鉄素材の供給基地として成長そこから鉄の形で大量に輸入された鉄は日本国内で数々の工具・武器・武具に鍛冶加工されて用いられた。日本では鉄素材の供給を加耶を中心とした朝鮮に頼らざるを得ず、国内諸勢力は朝鮮諸国との鉄供給をめぐる連携を進める一方、技術移転をベースに鉄自給の道が模索されてきた。この時期 中国・朝鮮も戦乱の時代であり、高句麗が勢力を伸ばし、南下してくると百済のみならず加耶諸国も圧迫され、鉄の供給も逼迫し、供給基地も変化する。また、新羅が順次勢力を伸ばし、6世紀半ばには加耶がほろぶ。このような5~7世紀にかけての朝鮮半島の混乱は日本の諸国にも大きな影響を与え、鉄の覇権をめぐる朝鮮諸国との連携や大量の渡来人の流入が生じる中、北九州や大和連合等諸国が対立し、百済と結び鉄の覇権を握った大和が次第に日本諸国を統合して日本骨格を作ってゆく。また、大和は同時に渡来人の技術をいち早く吸収し、鉄の自給についても、早くから大規模精錬を開始し、この鉄の力をもって諸国を統一し、7世紀初頭には律令国家を作り上げ、飛鳥・奈良時代を作ってゆく。大和朝廷の勢力の源泉となったのが、朝鮮からの鉄の移入と同時にこの瀬田丘陵での鉄自給と考えられている。

日本での鉄の生産は5世紀末から6世紀初頭まで遡れると言われているが、この近江の国瀬田丘陵ではおそらく渡来人のもたらした技術による鉄鉱石による鉄精錬が7世紀にはスタートしている。

他の地域がやっと鉄鉱石の代替原料として砂鉄を見つけ。これを用いた効率・品質でも劣る鉄精錬を開始している時にこの瀬田丘陵では大和国営の大規模な鉄生産がおこなわれ、次々と勢力を伸ばしていったと推定される。

まさに古墳から飛鳥・奈良時代にかけての日本骨格の誕生には朝鮮の鉄を巡る戦いそして日本での鉄自給の戦いが重要な役割を演じており、大和から朝鮮半島への幾重もの『Iron Road 和鉄の道』があり、近江の国はその重要な中心地として栄えたと考えられる。

この大和の繁栄を支えたのはこの近江国瀬田丘陵の鉄・吉備国の鉄であり、その後 これに丹後や越の国の鉄が加わり、蝦夷地征伐の8世紀には今の福島県原町金沢地区の行方の製鉄基地が加わって行く。

鉄の自給を達成し 大和朝廷を支えた「近江国 瀬田丘陵の古代製鉄遺跡群」

—野路小野山遺跡・木瓜原遺跡ほか—

【完】



## Iron Road 【2】 2001

2001-2002. 4



4. 27. 大型連休のはじまり。 5月の連休との谷間に仕事あり。ぼんやりと1日ゆったりと春の信州へ出掛け 八ヶ岳山麓を小海線でめぐり、茅野にも行きたいと考えていた矢先に信州「佐久」で江戸末期の「たたら」遺跡「佐久町 茂来山鉄山」が調査されたとの昨年9月「信濃毎日」の記事が眼に飛び込んできた。

## 信濃毎日 2001. 9. 9. 「茂来山たたら」の記事

## 江戸末期の製鉄「たたら」地下遺構 佐久町で確認

長野県佐久町で、江戸時代末期につくられた「たたら」と呼ばれる製鉄用の地下遺構が、良好な状態で残っていることが8日までに、町教委が進めている発掘調査で分かった。調査担当の研究者によると、たたら遺構がはっきりと確認できたのは中部地方では初めて。たたらは主に砂鉄の産地で発見されており、この遺構付帯のような鉄鉱石の産地で、たたらを輸入したのが確認されたのは全国でも珍しいという。製鉄史や県内産業史をたどる上で貴重な資料となりそうだ。

遺構が埋められたのは、町町大目内の「茂来山（ちらいさん）たたら遺跡」。小海町境の茂来山（一、七〇メートル）の登山道入り口付近の山林内にある。この場所に製鉄所があったことは知られており、町史跡に指定されている。町教委は発掘調査への後援申請に併し、今年一月から十日までの予定で、「高野（たかの）」と呼ばれる中核遺跡の地下遺構部分を中心に行う「試掘」している。

この結果、縦約十メートル、横約八メートルにわたって、高野の遺構を特定。炉を加熱するための炭などを入れる「大舟（おおふね）」と呼ばれる遺構は、長さ五メートル、幅約六メートル、深さ九十センチ。その周囲は粘土を張り付けた石垣になっていた。大舟に水分が入らないように、大舟の両側まで火をたいて周囲の土を乾燥させるための「小舟（こぶね）」と呼ばれる溝も確認され、長さ五メートル、幅六十センチ、深さ九十センチのはほぼ完全な形で残っていた。

調査した広島大学大学院の河村正利教授（文化財学）によると、たたら遺構の確認例は、中国地方に多いが、東日本では、福島県や岩手県で一箇所しかないという。しかも、たたらは砂鉄の産地に似た遺跡で、「鉄鉱石産地でたたらを輸入した例が確認されたのは全国でも初めてではないか」としている。今後、産出した鉄鉱石を貯め入れるために細かく砕く際、どのような方法がとられたのかなどの調査が続ける。

遺構はいったん埋め戻す予定で、その前の九日午前九時半から、一般住民対象の見学会を開く。町教委は「産業者と相談し、常時見学が可能になる形を探るができないか検討したい」としている。

古くから鉄鉱石や鉱物が出る現地でそのまま鉄山が経営された貴重な遺跡との話に興味津々。

日本の鉄製錬は6,7世紀 朝鮮半島から伝来。鉄鉱石原料を用いた「たたら」製鉄がそのスタート。しかし、日本各地に豊富にある「砂鉄」を用いたたたら製鉄に直ぐ移ってゆく。わずかに 東北地方に鉄鉱石製錬が残っているのみと考えていた。

江戸時代といえもう奥出雲・中国山地の「砂鉄」による大型たたら製錬華やかな時代。その時代に 信州で鉄鉱石原料によるたたら製鉄が実施されたと言う事と縄文の時代を含め、早くから開けた信州の地でのたたら製鉄遺構 信州にたたら遺跡など思いも寄らなかったのに興味深々。

地図で調べると千曲川をはさんで平野部があり、その両側を奥秩父へ連なる山々と八ヶ岳の山々が対峙する佐久町。佐久町の東側南端の山間を奥秩父から千曲川へ流れ下る抜井川があり、その川に沿って 佐久から十石峠を経て武州・奥秩父へつながる武州街道〔国道 255 号線〕が走っている。この武州街道を歩いて行くとすぐ前方左手にいくつかの低い山の上に正三角錐の美しいピラミットの山が見えてくる。この山が「茂来山」高さ 1717m。この山中に分け入ったところに茂来山鉄山遺跡がある。その高さ 山容の大きさから 八ヶ岳・蓼科の山々や浅間山の陰に隠れて目立たないが 佐久平からみると東に美しいピラ



茂来山 1717m 長野県 佐久町



ミッド形状の山体を見せ一目で判る山である。



昔 この佐久平から十石峠越えて 武州・奥秩父へと繋ぐ武州街道の街道脇で旅人たちにその姿を楽しませたに違いない。

今 信州 佐久は雪解けの水がながれ、八ヶ岳の峰々をバックに一編に春の花が咲き満ちているに違いない。小海線に乗って八ヶ岳の麓を回るのもよし・茂来山に登るのもよし。

佐久ー秩父の幹線 武州街道と茂来山鉄山遺跡の位置

## 1. 「茂来山 鉄山」製鉄遺跡 Walk 長野県 南佐久郡 佐久町

幕末 秩父と信州を結ぶ武州街道沿いで

現地産出の鉄鉱石原料を使った「たたら製鉄」があった



千曲川越しにみた茂来山



佐久町のシンボル「たんぽぽ」と JR 小海線 海瀬駅



信州「佐久」へいってみようと思いついたのが吉日 4.27.朝 7時7分の長野新幹線に飛び乗る。

兎に角 速い。もう8時半には新幹線「佐久平」の駅に立っていました。小海線に乗り換えて 千曲川沿いに約30分佐久平を南へ、佐久町の羽黒下駅 海瀬駅へ。残念ながら蓼科・八ヶ岳連峰は霞んで良く見えない。新幹線の「佐久平」駅があるのが 佐久市 そこから 小海線は千曲川の東側の山裾を上流へ走り、地域医療の先駆で有名な佐久総合病院がある臼田町その隣りが佐久町 そして八ヶ岳の麓小海町 千曲川の源流品の川上へと続く。

海瀬駅で小海線を降りるが無人駅。全く案内板もなし 但し 直ぐ横が抜井川であり、これを遡れば行ける。

でも 遺跡の位置も正確にはよくわからず、羽黒下の駅まで戻り タクシーで奥の部落大日向へ行き、

鉄山遺跡のある茂来山登山道へ入ることにする。ここでもまた、「もの好きな・・・」と笑われたが、幸いやっと正確な遺跡の位置を知っている人に巡り会いほぼ 20 分程で大日向へ。  
残念ながら茂来山のピラミダルな姿は雲の中見えず。もっとも歩いて帰る道すがらずっとその美しい姿を見せてくれた。また、山は「親子連れの出た」とかで登山禁止。道であった街の人も「自分も見て、次の日に人がおそわれた・・・」と言うので残念ながら一人では前へ進みがたく茂来山 鉄山遺跡の上 営林署跡地の登山口まで行って引き返した。



海瀬駅から抜井川沿いの集落を抜け 茂来山の麓 大日向集落へ 2002. 4. 27.

海瀬駅を東に折れて抜井川沿いに集落が点在する広い谷筋を奥秩父への道 武州街道を進むと 田圃のあちこちには黄色いタンポポが咲き乱れ春を告げている。  
小海線の駅名表示板にも「タンポポ」の花の絵と「花のまち さく」の表示が添えられ、この街がタンポポが咲き乱れる日本原風景がみられる街であることにいつわりなし。  
田圃と連なる山々を見ながらよく整備されたバイパス道路を進む。  
大きな送電鉄塔がこの平地を横切って伸びている。黒部一秩父一関東への幹線送ルートと表記されており、ここが今も信州と関東を結ぶ重要幹線であることが判る。  
約 20 分ほど進んで 右手に 茂来山から伸びる深い沢とそこを流れ下るの合流点に来る。茂来山登山道の標識も見える。大日向の集落である。右からの深い沢が霧久保沢 流れ下る川が切り久保川で ここまで来ると雲と前の山々にさえぎられ、小さな山の連なりの向こうにピラミッドの輪郭が一部見える。





大日向 茂来山の登山口 と 霧久保沢

茂来山登山道と書かれた標識の所から茂来山へ沢筋につけられた砂利道を一気に登って行く。  
 もう 誰もいない山中へ分け入って行く。右手の谷川に沿って新緑の林の中を道が山へ登って行く。山道の両側には「山吹」が黄色の花をつけ歓迎してくれている。約 15 分ほど谷筋を山中へ分け入ったところ、谷川と反対側 道脇の脇林の中に少し平らな部分が見え、其の中央部 木立の中の地面に青いビニールシートが被せてある。ただそれだけ 標識もなにもなし。茂来山 鉄山遺跡である。



霧久保沢 茂来山への登山道と 道端の「ヤマブキ」 - 茂来山 鉄山への道 2002. 4. 27. -



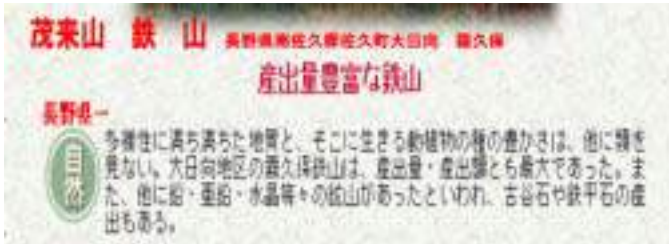
鉄鉱石原料によるたたら製鉄が行われた 幕末 の 茂来山 鉄山 遺跡



タクシーを帰して 一人其の中に立つ。

この遺跡の横で 谷川は滝となって雪解けの清流を落としている。そのそばで山吹が実に鮮やかな黄色の花を咲かせ、山全体が芽吹きを終えた若葉が覆う木立の中ウグイスの鳴き声が響き渡るたたら遺跡跡。周辺を少し歩くと幾段かの平らな土地があり、その段差を区切る石垣跡も見える。幕末の遺跡と聞いたのでまだ 周りに人の生活のにおいがすると思ったが、全く何もない。関西以西の遺跡にある金屋子さんも無し。ただ ひっそりと山肌の斜面の端 林の中にひっそりと埋もれている。

## 2. 茂来山 鉄山 遺跡 の 概 略



佐久町公民館の平岡氏から後日この茂来山鉄山遺跡の発掘図や公開資料を沢山送っていただいた。

この鉄山が経営されたのは幕末 嘉永元年・1848年から山火事で焼失する文久2年・1862年までの14年間と言われ、その後 製鉄は大日向に移され 明治の初め頃まで経営された。

一方この地はその後 畑となったりして私有地として管理され この地の下にたたら製鉄遺構そのまま埋もれていると言う。大日向の集落から徒歩で約30分～1時間山の中へ入ったところ。やっぱりこの鉄山も集落からは少し奥に入り、隔離されている。今は全くその面影も見えず山中である。

往時は沢山の人がこの鉄山へ往来し、また 大日向から武州街道を通過して江戸にこの鉄も送られたに違いない。今はみるかげもないが・・・・・・・・

資料によるとこの鉄山遺跡のある大日向集落の奥 霧久保沢周辺は昔から磁鉄鉱石はじめ 多くの金属鉱石が出る所であり、ここから出る鉄鉱石を粉碎してたたら製鉄に供したと思われる。また、青いシートがかけられた所がたたら炉跡で2基あったらしい。

### 2.1. 茂来山 鉄山 遺跡 今と昔



| 調査項目  | 調査結果                                                                                                                                         | 調査日      | 調査者 |
|-------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------|-----|
| 遺構の位置 | 遺構の位置は、調査地の北東部にあり、周囲は土壌が比較的硬い。遺構の形状は、長方形で、長さ約10m、幅約5mである。遺構の壁は、土で築かれたもので、厚さ約0.5mである。遺構の内部には、土の盛り上がりや、土の盛り上がりがある。遺構の周囲には、土の盛り上がりや、土の盛り上がりがある。 | 2001.9.1 | 調査者 |
| 遺構の形状 | 遺構の形状は、長方形で、長さ約10m、幅約5mである。遺構の壁は、土で築かれたもので、厚さ約0.5mである。遺構の内部には、土の盛り上がりや、土の盛り上がりがある。遺構の周囲には、土の盛り上がりや、土の盛り上がりがある。                               | 2001.9.1 | 調査者 |
| 遺構の材質 | 遺構の材質は、土で築かれたものである。遺構の壁は、土で築かれたもので、厚さ約0.5mである。遺構の内部には、土の盛り上がりや、土の盛り上がりがある。遺構の周囲には、土の盛り上がりや、土の盛り上がりがある。                                       | 2001.9.1 | 調査者 |
| 遺構の用途 | 遺構の用途は、不明である。遺構の形状や、遺構の材質から推測すると、倉庫や、土蔵などである可能性がある。遺構の周囲には、土の盛り上がりや、土の盛り上がりがある。                                                              | 2001.9.1 | 調査者 |

史料

遺構の位置は、調査地の北東部にあり、周囲は土壌が比較的硬い。遺構の形状は、長方形で、長さ約10m、幅約5mである。遺構の壁は、土で築かれたもので、厚さ約0.5mである。遺構の内部には、土の盛り上がりや、土の盛り上がりがある。遺構の周囲には、土の盛り上がりや、土の盛り上がりがある。

遺構の形状は、長方形で、長さ約10m、幅約5mである。遺構の壁は、土で築かれたもので、厚さ約0.5mである。遺構の内部には、土の盛り上がりや、土の盛り上がりがある。遺構の周囲には、土の盛り上がりや、土の盛り上がりがある。

遺構の材質は、土で築かれたものである。遺構の壁は、土で築かれたもので、厚さ約0.5mである。遺構の内部には、土の盛り上がりや、土の盛り上がりがある。遺構の周囲には、土の盛り上がりや、土の盛り上がりがある。

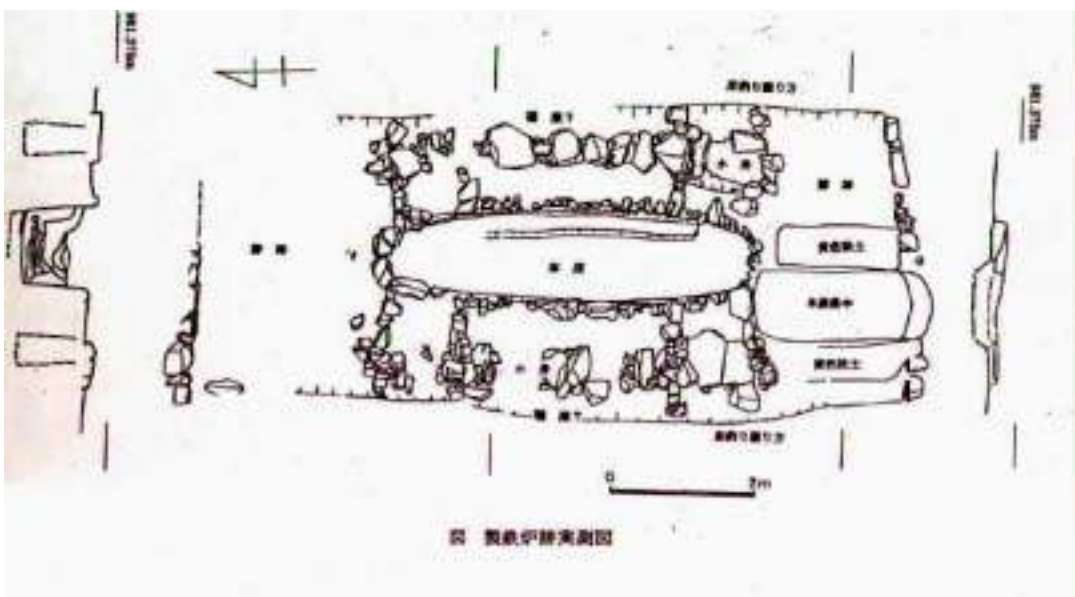
遺構の用途は、不明である。遺構の形状や、遺構の材質から推測すると、倉庫や、土蔵などである可能性がある。遺構の周囲には、土の盛り上がりや、土の盛り上がりがある。

注：表1、表2、史料は、高山史館『約熱の火』(1997)より引用

## 2.2. 茂来山 鉄山 遺跡 試掘調査 2001.9.



## 2.3. 茂来山 鉄山のたたら製鉄炉 概要





## 2. 4. 鉄鉱石採掘 露天掘りの跡 と 製鉄スラグの分析結果



表1 郡沢鋼滓、茂来山鉄滓の化学分析結果 (重量%)

|         | SiO <sub>2</sub> | MnO  | S     | P     | Cu    | MgO  | CaO   | Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub> | TiO <sub>2</sub> | T-Fe  |
|---------|------------------|------|-------|-------|-------|------|-------|--------------------------------|------------------|-------|
| 郡沢鋼滓 ①  | 45.40            | 3.06 | 0.774 | 0.055 | 0.149 | 1.43 | 18.77 | 1.53                           | 0.11             | 19.74 |
| 郡沢鋼滓 ②  | 54.03            | 1.03 | 0.354 | 0.114 | 0.241 | 1.40 | 8.70  | 12.05                          | 0.53             | 11.37 |
| 茂来山鉄滓③  | 28.47            | 0.23 | 0.015 | 0.070 | 0.002 | 1.00 | 8.66  | 5.61                           | 0.30             | 42.07 |
| 茂来山鉄滓④  | 29.24            | 0.23 | 0.022 | 0.071 | 0.002 | 1.01 | 10.62 | 5.94                           | 0.47             | 38.43 |
| 茂来山が跡鉱石 | 1.07             | 0.45 | 0.015 | 0.026 | 0.015 | 8.19 | 8.10  | 0.26                           | 0.81             | 70.02 |
| 参考新石鉄鉱石 | 2.01             | 0.99 | 0.002 | 0.023 | 0.002 | 8.14 | 8.40  | 0.54                           | 0.33             | 69.88 |

(注) 国立歴史民俗博物館田口尚、東京工業大学高塚秀治の分析による。



この遺跡からさらに奥へ少し進むと登山道脇の崖に2,3穴があいているのがみえる。脇には含銅または鉄鉱石であろう石くずが散在している。資料によるとこの霧久保沢は古くから鉱山産出地であり、当時このあたりからは豊富な鉄鉱石が発見され、露天掘りが当時行われたあたりである。

この豊富な鉄鋼石を砕いて原料として鉄鋼精錬が行われたらしい。

砂鉄原料のたたら製鉄華やかな江戸幕末の時代に、ここの現地から産出する鉄鉱石原料はよっぽど魅力的であったに違いない。疑問が残るが・・・この茂来山鉄山で作られた鉄が何に使われ、どこで消費されたのかによってその謎も解けてこよう。今はまだ その解を持っていない?。

また、平岡氏に送っていただいた資料によると信州ばかりでなく東北地方を除いて 鉄鉱石製錬を行ったたたら製鉄遺構が残っているのはほかに例がなく、また 東国で完全な形でのたたら製鉄炉遺構が見つかったのはじめてであり、本当に貴重な遺跡である。

## 2. 5. 茂来山 たたら製鉄遺跡 周辺

2002. 4. 27. 茂来山 霧久保沢で



茂来山 たたら遺跡 周辺 スナップ





茂来山 たたら遺跡の上流 滝がかかる霧久保沢

**3. 霧久保沢から帰路 小海線 羽黒下駅まで  
のんびりと山郷の Walk**

遺跡があるからいうのではないが、この霧久保沢の清流 花と新緑の中 滝を作り美しい渓谷美を見せている。 この道をそのまま詰めると茂来山の頂上に約2時間で立てるとの事だったが、茂来山の尾根への取っ付き口に熊出没 通行禁止の札と鎖があり、一人では薄気味悪く引き返し、ゆっくり JR 羽黒下駅まで春の里歩きをする。

霧に包まれていた山も下るにつれ、日がさしだした。田圃のあぜにはタンポポが黄色いベルトを作り桜・桃が満開。今潜り抜けてきた山は芽吹いた若葉の緑で一杯 気持ちの良い里歩きとなった。



茂来山登山堂を大日向の集落に降りてきて



武州街道沿い 大日向から海瀬へ 山里の walk

大日向の集落から見上げるとチョコッと茂来山の頭が見え、さほど興味のある山に見えない。

「茂来山も ここからだ と 周りの山とあまり変わらず ですね・・・」という身を乗り出して来て「もっと佐久の平野に下ると その大きさが見えてくる。 佐久の街からだ と 抜井川越しにスケールの大きなピラミッドが堂々とした姿で現れてくる」と。



武州街道 大日向近傍から 後ろに頭をのぞかせる茂来山



a. 海瀬駅東 抜井川越しに



b. 海瀬駅西 千曲川越しに

JR 海瀬駅近傍からピラミッド型の美しい姿を見せる茂来山

朝は霧と車で通ったので気が付かなかったが、街の人たちが自慢するとおり、佐久の街に近づくにつれ、美しく均整の取れたピラミダルな姿が一層高く抜きんでて見えてくる。立派な山である。

1 時間ちょっとで千曲川と抜井川の合流点 海瀬駅にて 小諸の方へ流れ下る千曲川沿いに羽黒下の駅まで歩いた。

春先の信州の山里をポカポカ陽気に誘われて歩いたのは初めてであるが 実にすがすがしい気分で山へ登るのとはまた違った魅力である。そして たたら製鉄遺跡遺構をその山の中に抱えこんで、ピラミダルな姿を見せる茂来山とその渓谷も味わい深い。

新緑の中 山吹が咲き 鳥が鳴き 清流が心地よい音を響かせている明るい谷にひっそりと静かに埋る製鉄遺跡。そして あぜ道のここかしこでタンポポ 桃の花が咲く山里 実に美しい光景ばかりが目に焼きついている。

ルンルンの気分で小海線に乗った。

2002. 4. 27.

小海線の車窓をながめながら

M. Nakanishi

なお 帰って知ったのだが、この「茂来山 鉄山」については 畠山次郎氏の「 灼熱の火 ―茂来山鉄山物語―」の労作がある。ゆっくりと読もうと思っている。

また、この茂来山鉄山遺跡に関する資料を色々ご送付いただいた佐久町公民館の平岡豊彦氏に感謝する。

